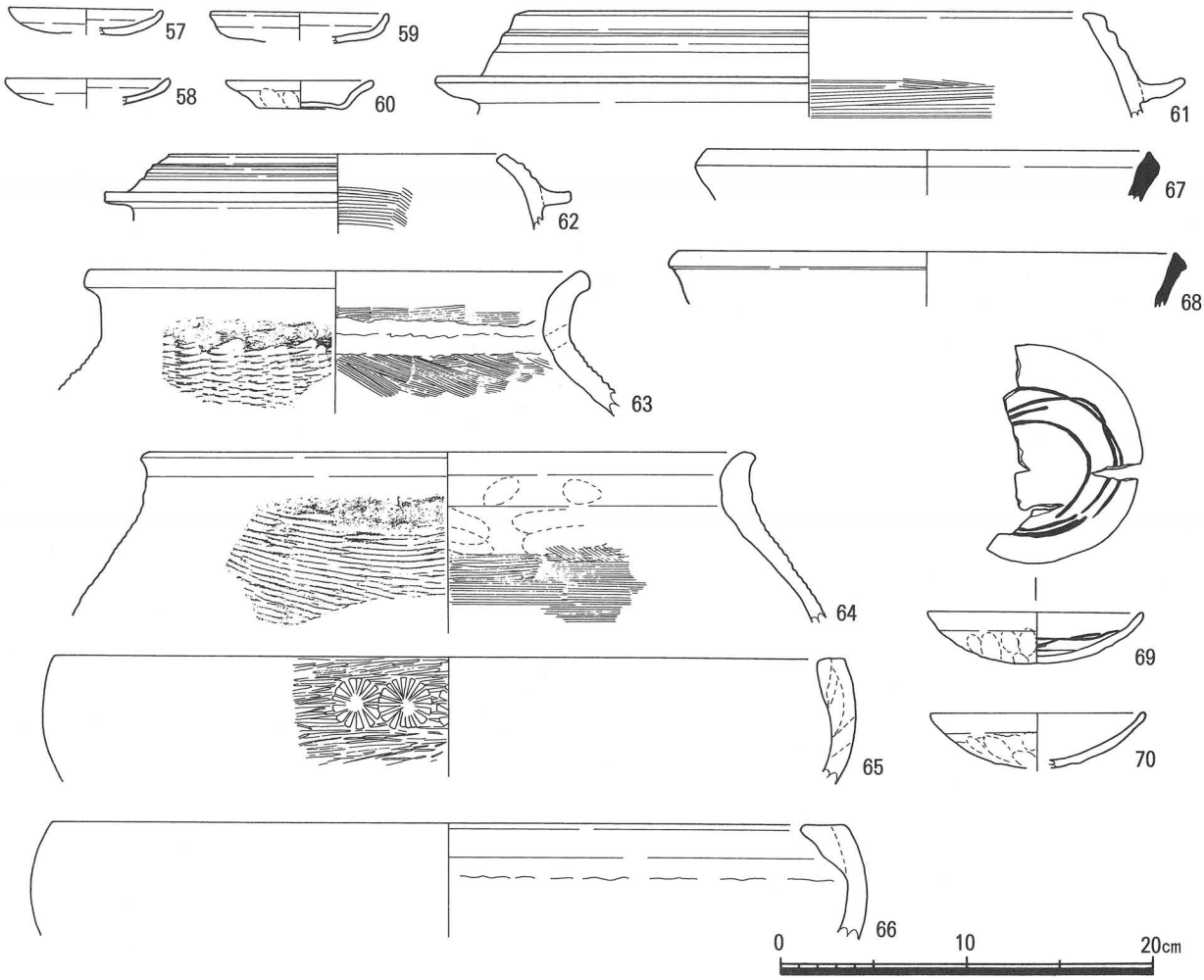
・包含層出土遺物

第４層および第５層から出土した14点（57～70）を図化した。一部、1/2程度の残存が認められる以外は小片化したものが大半を占めている。その内訳は、土師器小皿４点（57～60）、須恵器鉢２点（67・68）、瓦器椀２点（69・70）・瓦器土釜２点（61・62）・瓦器甕２点（63・64）・瓦器浅鉢２点（65・66）である。

土師器小皿（57～60）には、口縁部が底部から内彎気味に立ち上がる（57・58）、口縁部が底部から斜上方へ直線的に伸びる（59）、上げ底の底部から口縁部が外反して伸びる（60）がある。４点ともに浅黄橙色の色調で胎土は精良である。（60）のように上げ底で体部下半に指頭圧成形が顕著な土師器小皿は中河内地区では14世紀中期以降に認められる。須恵器鉢（67・68）はともに東播系須恵器鉢の小片である。口縁部の形態では、（67）が逆「く」の字、（68）が玉縁状口縁を呈する。２点ともに口縁部外面に重ね焼き痕がある。瓦器椀（69・70）は和泉型瓦器椀の最終形態の特徴とされる高台を欠き、浅い椀形の形態を持つものである。（69）の見込みから体部内面にかけては雑な圏線状の暗文が施文されている。（70）は重ね焼き痕が体部外面に認められるほか、内面の炭素付着は不良である。２点ともに胎土は粗く器面に0.5～2㎜大の砂粒が散見される。14世紀中葉の所産である。瓦器土釜は２点（61・62）を図化した。（61）は内傾して大きく



第10図　第４層・第５層出土遺物実測図

立ち上がる口縁部外面に２条の段を有するもので、森嶋分類のＧ型式にあたる。（62）は強く内傾して立ち上がる口縁部の外面に３条の段を有するもので、森嶋分類のＥ型式にあたる。２点ともに15世紀前半の所産と考えられる。瓦器甕は２点（63・64）図化した。（63）がほぼ直立して伸びる頸部から口縁部が外反して伸びるもので、外端面は平坦な面を呈する。体部外面のタタキ調整は幅３㎝程度の原体が使用されており、右から左方向にほぼ水平に行われている。（64）は口縁端部付近で小さく外反して、外方向にやや尖り気味で終わる端部を形成する。体部外面のタタキ調整は丁寧で原体幅は２㎝程度である。瓦器浅鉢は２点（65・66）図化した。いわゆる奈良火鉢に分類されるもので、坪之内徹氏の分類によれば（65）が浅鉢Ⅰ、（66）が口縁部の形態では浅鉢Ⅳに分類される。（65）の口縁部外面には菊花文がスタンプされている。ともに14世紀中葉以降の所産と考えられる。

註記

註１　三宅正浩　1985『佐堂（その１）』（財）大阪文化財センター
　　中井貞夫・阪田育功他　1984『佐堂（その２）－Ⅰ』（財）大阪文化財センター
　　中西靖人・森屋直樹他　1985　『佐堂（その２）－Ⅱ』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター

註２　吉田野乃　1996「５．佐堂遺跡（93－534）の調査」『八尾市内遺跡平成７年度発掘調査報告Ⅰ』八尾市文化財調査報告33　平成７年度国庫補助事業　八尾市教育委員会

参考文献

・中河内の中世土器編年

森島康雄　1987「西の辻遺跡周辺における中世土器の編年」『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査概要Ⅳ』大阪府教育委員会

・土釜

菅原正明　1983「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論集

菅原正明　1983「畿内における中世土器の生産と流通」『藤沢一夫先生古希記念古文化論叢』

森島康雄　1990「中河内の羽釜」『中近世土器の基礎研究Ⅳ』日本中世土器研究会

・奈良火鉢

坪之内徹　1990「中世南都の瓦器・瓦質土器」『中近世土器の基礎研究Ⅵ』日本中世土器研究会

・東播系須恵器

丹治康明　1985「東播系須恵器について」『中近世土器の基礎研究』

・中国産磁器

横田賢次郎・森田　勉　1978　「太宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集４』九州歴史資料館

第４節　出土遺物観察表*

・凡例　量－◎多量　○多い　△少ない　▲稀少　　粒径－Ｌ　１㎜以上　Ｍ0.5～１㎜未満　Ｓ0.1～0.5㎜未満　ＳＳ0.1㎜以下　　※赤－赤色酸化土　花－花崗岩

遺物番号	図版番号	器種	法量（㎝） 口径 器高 底径 （復元値）	調整・手法 外面 内面	色調 外面 内面	胎土 素質	長石	石英	雲母	角閃石	チャート	その他	焼成状態	残存率	地区 備考
1		土師器 小皿	7.3 1.2 －	外面：口縁部ヨコナデ。底部弱いナデ。 内面：口縁部から底部半分ヨコナデ。底部中央部ナデ。	灰黄色 〃	精良	△ S		▲ S	△ S	▲ S		良好	ほぼ完形	２・３Ｂ区 ＳＫ－201
2		土師器 小皿	(9.4) (1.7) －	外面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	黄橙色～ 灰白色 〃	精良	△ S	▲ S	▲ S		▲ S		〃	口縁部 1/6	〃
3		土師器 中皿	(13.8) (1.9) －	外面：器面剥離のため調整不明瞭。 内面：　〃	にぶい褐色 〃	精良	△ S	△ S － M	△ S	△ S			〃 内外面器面剥離	口縁部 1/8	〃
4		瓦器 小皿	(8.0) (1.2) －	外面：口縁部ヨコナデ。底部指頭圧成形後ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	灰色 〃	精良	△ S	△ S					良好	1/3	〃
5		瓦器 椀	(16.4) －	外面：口縁部ヨコナデ。体部指頭圧成形後ナデ。 内面：磨耗のため調整不明瞭。	暗灰色 灰白色	精良		▲ S					やや不良 器面磨耗	口縁部 1/4	〃
6		瓦器 椀	－ － 高台径(5.7) 高台高(0.5)	外面：高台部外側面ヨコナデ。 内面：見込み格子状暗文。	灰色 〃	精良	△ S			△ S			良好	高台部 1/4	〃
7		瓦器 足釜	(16.0) － － 鍔径(19.3)	外面：口縁部ヨコナデ。鍔部下面から体部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ハケメ。	灰色～ 明褐灰色 灰色	精良	△ S		△ S	▲ S			良好	口縁部 1/12	〃 鍔部以下炭素付着不良
8	三	瓦器 足釜	(19.0) － － 鍔径(24.3)	外面：口縁部から鍔部下面ヨコナデ。体部指圧成形後ナデ。 内面：口縁部から体部　ヨコナデ。	灰色 〃	密	○ S － M	○ S	▲ S		▲ S	赤 ▲ S	良好	口縁部 1/8	〃
9	三	瓦器 足釜	(20.5) － 鍔径(24.0) －	外面：鍔部下部から口縁部ヨコナデ。体部指頭圧成形後ナデ。 内面：口縁部から体部ナデ。	灰色 灰白色	精良	○ S － M			○ S			〃	口縁部 1/10	〃
10	三	須恵器 捏鉢	(21.0) － －	外面：口縁部から体部回転ナデ。 内面：　〃	口縁部黒灰色 体部明青灰色 青灰色	密	○ S	○ S					堅緻	口縁部 1/12	〃
12		土師器 小皿	7.9 1.2 －	外面：口縁部ヨコナデ。底部弱いナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい褐色 〃	精良	△ ＳＳ	▲ ＳＳ	△ S	○ S		赤 ▲ S	良好	1/2以上	１・２Ｂ ＳＤ－201
13		土師器 小皿	8.0 1.4 －	外面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい褐色 〃	精良	▲ ＳＳ	▲ ＳＳ	○ S	○ ＳＳ		赤 ○ S	〃	1/2	〃
14		土師器 小皿	8.6 1.15 －	外面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい褐色 〃	精良	△ S	△ S － L	△ S	○ ＳＳ		赤 △ S	〃	1/2	〃
15		瓦器 小皿	7.8 1.4 －	外面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。一部酸化鉄付着。	灰白色 〃	精良	▲ S	▲ ＳＳ	△ ＳＳ	○ ＳＳ	▲ S		〃	1/2	〃
16		土師器 小皿	8.3 1.2 －	外面：全面にわたり酸化鉄付着の為調整不明瞭。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい褐色 〃	精良	▲ ＳＳ	▲ M	▲ ＳＳ	△ ＳＳ			〃 外面酸化鉄全面に付着	完形	〃
17		土師器 小皿	8.4 9.5 －	外面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい褐色 〃	精良	▲ S	▲ S	△ S	○ ＳＳ			〃	ほぼ完形	〃
18		土師器 小皿	8.0 1.2 －	外面：口縁部強いヨコナデにより、底部との境が明瞭。底部弱いナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい褐色 〃	精良	△ S － M	▲ S	△ S	○ ＳＳ			〃	完形	〃

＊Ｓ－Ｌは裸眼による観察。ＳＳについては実体鏡（×30）により確認できたもの。

・凡例　量－◎多量　○多い　△少ない　▲稀少　　粒径－L　1㎜以上　M0.5～1㎜未満　S0.1～0.5㎜未満　SS0.1㎜以下　　※赤－赤色酸化土　花－花崗岩

遺物番号	図版番号	器種	法量（㎝）口径 器高 底径（復元値）	調整・手法 外面 内面	色調 外面 内面	胎土 素質	長石	石英	雲母	角閃石	チャート	その他	焼成状態	残存率	地区 備考
19	三	土師器 小皿	8.2 1.5 －	外面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい褐色 〃	精良	△ SS	△ SS	○ S	○ SS			良好	完形	SD－201
20	三	土師器 小皿	8.3 1.1 －	外面：口縁部強いヨコナデにより底部との境が明瞭。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい褐色 〃	精良	▲ S	△ S－L	△ S	○ SS			良好	完形	〃
21		土師器 小皿	7.7 1.4 －	外面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。底部粘土紐の接合痕を認める。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい褐色 〃	密	▲ S	▲ S－L	▲ SS	○ SS		赤 ▲ S	良好	完形	〃
22	三	土師器 小皿	8.1 1.4 －	外面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。底部粘土紐接合痕。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい褐色 〃	密	△ S－L	△ SS	△ S	○ SS		花 ▲ L	良好	完形	〃
23	三	土師器 小皿	8.0 1.5 －	外面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい褐色 〃	密	△ S	△ S	△ S	○ SS		赤 ▲ S	良好	ほぼ完形	〃
24		土師器 小皿	7.9 1.3 －	外面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい褐色 〃	精良	▲ S	▲ SS	○ SS	△ SS			良好	1/2以上	〃
25	三	土師器 小皿	7.9 1.5 －	外面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部繊維状の圧痕。	にぶい褐色 〃	精良	▲ S	▲ S	○ S	○ SS			良好	1/2以上	〃
26	三	土師器 中皿	11.6 2.1 －	外面：口縁部ヨコナデ。体部中位指頭圧痕。底部ナデ。 内面：口縁部から体部ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい黄橙色 〃	精良	▲ S	▲ S	△ SS	○ SS			良好	ほぼ完形	〃
27	三	土師器 中皿	12.0 2.2 －	外面：口縁部ヨコナデ。体部中位指頭圧痕。底部ナデ。 内面：口縁部から体部ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい橙色 〃	精良	▲ S	△ S－L	▲ S	○ SS			良好	ほぼ完形	〃
28		土師器 中皿	11.6 2.2 －	外面：口縁部ヨコナデ。体部中位指頭圧痕。底部ナデ。 内面：口縁部から体部ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい橙色 〃	密	▲ S	○ S－M	○ S	○ SS	▲ L		良好	ほぼ完形	〃
29	四	土師器 中皿	11.6 2.1 －	外面：口縁部ヨコナデ。体部中位から底部ナデ。 内面：口縁部から体部ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい橙色 〃	精良	▲ S	△ S	○ SS	○ SS			良好	ほぼ完形	〃
30	四	土師器 中皿	11.8 2.1 －	外面：口縁部ヨコナデ。体部中位指頭圧痕。底部ナデ。 内面：口縁部から体部ナデ。底部ナデ。	にぶい橙色 〃	精良	▲ S	○ SS	△ SS	○ SS			良好	完形	〃
31		土師器 中皿	11.2 2.1 －	外面：口縁部ヨコナデ。体部中位指頭圧痕。底部ナデ。 内面：口縁部から体部ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい橙色 〃	精良	▲ S	▲ SS	▲ SS	○ SS			良好	ほぼ完形	〃
32	四	土師器 中皿	11.2 2.2 －	外面：口縁部ヨコナデ。体部中位指頭圧痕。底部ナデ。 内面：口縁部から体部ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい橙色 〃	精良	▲ S	▲ S	△ SS	△ SS			良好	完形	〃
33	四	土師器 中皿	11.4 2.1 －	外面：口縁部ヨコナデ。体部指頭圧痕。底部ナデ。 内面：口縁部から体部ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい橙色 〃	精良	▲ S	○ S	△ S	○ SS			良好	完形	〃
34	四	瓦器 小皿	(9.8) 2.6 －	外面：口縁部ヨコナデ後、一部ヘラミガキ。底部一定方向の密なヘラミガキ。 内面：口縁部ヨコナデ。見込み部シグサク暗文。	暗灰色 〃	精良		▲ S					良好 内面焼成時の剥離	1/2以上	〃
35		瓦器 椀	－ － 高台径5.6 高台高0.4	外面：体部指頭圧成形後ナデ。高台部側面ヨコナデ。底部ナデ。 内面：全面ナデ。見込み平行線状ヘラミガキ。一部格子状。	淡灰色 灰色	精良		▲ S					良好	高台部 1/2	〃

・凡例　量－◎多量　○多い　△少ない　▲稀少　　粒径－Ｌ　１㎜以上　Ｍ0.5～１㎜未満　Ｓ0.1～0.5㎜未満　ＳＳ0.1㎜以下　　※赤－赤色酸化土　花－花崗岩

遺物番号	図版番号	器種	法量（cm） 口径 器高 底径 （復元値）	調整・手法 外面 内面	色調 外面 内面	胎土 素質	長石	石英	雲母	角閃石	チャート	その他	焼成状態	残存率	地区 備考
36	四	瓦器 椀	(13.6) (3.7) 高台径3.4 高台高0.1	外面：口縁部ヨコナデ。体部指頭圧成形後ナデ。高台側面ナデ。 内面：全面ナデ。見込み平行線状、体部圏線状の粗いヘラミガキ。	灰色～灰白色 〃	精良	▲S	▲S					良好	全1/2 高台全周	〃 外面重ね焼き痕
37		土師器 土釜	(26.2) － －	外面：口縁部から頸部ヨコナデ。 内面：口縁部から頸部ヨコナデ。	にぶい橙色 〃	やや粗	△M	◎S－M			△L		良好	口縁部 1/8	ＳＤ－201 内面炭化物付着
38		土師器 土釜	－ － 鍔径(36.6) －	外面：鍔部ヨコナデ。体部ヨコナデ。 内面：体部ナデ。	にぶい橙色 〃	粗	○Mむ－L	◎S－L			△L		良好	鍔部1/10	〃 外面鍔部以下煤付着
39		瓦器 土釜	(21.3) － 鍔径(24.4) －	外面：口縁部から鍔部ヨコナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。	灰色 灰白色	精良		○S					良好	口縁部 1/10	〃
40		土師器 土釜	(22.8) － 鍔径(28.2) －	外面：口縁部、鍔部、体部ヨコナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	浅黄橙色 〃	精良		○S	△S	△SS			良好	口縁部 1/10	〃 外面鍔部以下煤付着
41		瓦器 足釜	－ － －	外面：脚部ナデ。 内面：体部ナデ。	灰白色 〃	密	▲L	△S		△S			良好		〃
42	四	須恵器 甕	(27.3) － －	外面：口縁部回転ナデ。体部上半左上がりのタタキの後回転ナデ。以下右上がりのタタキ。 内面：口縁部回転ナデ。体部ナデ。	灰白色 〃	密	△S	△S			▲S		堅緻	口縁部 1/12	〃
43	四	中国産 磁器 白磁碗	(16.5) － －	外面：回転ケズリの後口縁部から体部上半灰白色の釉を施釉。以下露胎。 内面：灰白色の施釉。	磁胎－白色 釉－灰白色	緻密							堅緻	口縁部 1/4	〃
46		土師器 小皿	(8.8) － －	外面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	浅黄橙色 〃	精良	▲S	△S	▲S	○SS			良好	口縁部 1/6	ＳＤ－202
47		土師器 中皿	(14.4) (3.15) －	外面：口縁部ヨコナデ。体部指頭圧痕。 内面：口縁部ヨコナデ。体部から底部ナデ。	浅黄橙色 〃	精良			△S			赤○S	良好	口縁部 1/12	〃
48		瓦器 椀	－ － 高台径　(6.2) 高台高　(0.85)	外面：体部ナデ。高台部ヨコナデ。底部弱いナデ。 内面：体部から見込みナデ。	灰色 〃	精良	▲S			△S			良好 内面一部風化	高台部 1/2以上	〃
49		土師器 土釜	23.8 － －	外面：口縁部ヨコナデ。頸部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。頸部ナデ。	灰黄褐色 浅黄橙色～褐灰色	粗	▲S－M	◎S－L			▲L		良好	口縁部 1/8	〃
50		土師器 土釜	－ － 鍔径(34.6) －	外面：器壁面全面風化のため調整不明瞭。 内面：器壁面全面風化のため調整不明瞭。	浅黄橙色 灰褐色	粗	▲M－L	◎S－L			▲M	赤▲S	良好 内外面とも風化	鍔部 1/6	〃
51	五	瓦器 擂鉢	(29.2) － －	外面：口縁部ヨコナデ。体部横方向のヘラケズリ。 内面：口縁部から体部水平ないしは斜め方向のハケメ。擂目３本残存。	灰白色 〃	やや粗	◎S－L	◎S		△S	▲L		良好	口縁部 1/8	ＳＤ－205
52		瓦器 土釜	(23.0) － 鍔径(29.9) －	外面：口縁部３条の段。口縁部から鍔部裏面ヨコナデ。体部ヨコヘラケズリ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部水平方向のハケメ。	灰色 〃	密	▲S	○S		△S	▲S		良好	口縁部 1/8	〃
53	五	土師器 土釜	(20.0) － 鍔径(27.0) －	外面：口縁部ヨコナデにより段を形成。鍔部ヨコナデ。 内面：口縁部から体部ハケメ。	灰白色 褐灰色	密	△S	○S－L	▲S	△SS			良好	口縁部 1/10	ＳＤ－206 鍔部以下煤付着
54	五	土師器 土釜	(17.8) － 鍔径(23.0) －	外面：口縁部３条の段。口縁部から鍔部裏面ヨコナデ。体部板ナデ。 内面：口縁部横方向の粗いハケメ。体部ナデ。	褐灰色 〃	密	○S－M	△S		△SS			良好	口縁部 1/4	〃

・凡例　量－◎多量　○多い　△少ない　▲稀少　　粒径－L　1㎜以上　M0.5～1㎜未満　S0.1～0.5㎜未満　SS0.1㎜以下　　※赤－赤色酸化土　花－花崗岩

遺物番号	図版番号	器種	法量（㎝） 口径 器高 底径 （復元値）	調整・手法 外面 内面	色調 外面 内面	胎土 素質	長石	石英	雲母	角閃石	チャート	その他	焼成 状態	残存率	地区 備考
55	五	土師器 土釜	(19.8) － － 鍔径(26.9)	外面：口縁部3条の段。口縁部から鍔部裏面ヨコナデ。体部左から右方向のヘラミガキ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部横方向一部縦方向のハケメ。	灰黄褐色 褐灰色	密	△ S	○ S	▲ S	△ SS	▲ M		良好	口縁部 1/8	〃
56	五	瓦器 土釜	(25.8) － － － 鍔径(33.8)	外面：口縁部3条の段。口縁部から鍔部裏面ヨコナデ。体部指頭圧痕。一部ヘラケズリ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	灰色 〃	密	△ S	○ S					良好	口縁部 1/8	SD－206
57		土師器 小皿	(8.2) 1.3 －	外面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	橙色 〃	精良	△ S	△ S	▲ S	○ SS			良好	口縁部 1/4	第4層
58		土師器 小皿	(8.8) (1.5) －	外面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	浅黄橙色 〃	精良	▲ S	△ SS	△ S	○ SS		赤 △ S	良好	口縁部 1/4	〃
59		土師器 小皿	(9.5) (1.6) －	外面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい黄橙色 〃	精良	▲ S	△ S	▲ SS	○ SS		赤 ▲ S	良好	口縁部 1/4	〃
60		土師器 小皿	7.9 1.55 －	外面：口縁部ヨコナデ。体部から底部指頭圧痕。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	浅黄橙色 〃	精良	▲ S	▲ S－ M	△ S	○ SS		赤 ○ S	良好	1/2	第5層
61	五	瓦器 土釜	(30.6) － － 鍔部(40.8)	外面：口縁部2条の段。口縁部から鍔部裏面ヨコナデ。体部ケズリ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部横方向のハケメ。	灰白色 〃	密	△ S	○ S		○ SS			良好	口縁部 1/6	〃
62	五	瓦器 土釜	(18.2) － － 鍔部(25.3)	外面：口縁部3条の段。口縁部から鍔部裏面ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部横方向のハケメ。	灰色 褐色	やや粗	△ S	○ S			△ S		良好	口縁部 1/10	〃
63	五	瓦器 甕	(26.8) － －	外面：口縁部ヨコナデ。頸部ナデ。体部水平方向のタタキ。 内面：口縁部ヨコナデ。頸部水平、体部左上がりのハケメ。	灰色 〃	密	△ S	○ S			△ S		良好	口縁部 1/8	第4層
64	五	瓦器 甕	(32.4) － －	外面：口縁部ヨコナデ。頸部ナデ。体部水平方向のタタキ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部上半指頭圧成形後ナデ、以下水平方向のハケメ。	灰色 〃	やや粗	○ S	○ S			▲ L		良好	口縁部 1/6	〃
65	五	瓦器 浅鉢	(43.0) － －	外面：口縁部ヘラミガキ。菊花文のスタンプ。 内面：口縁部ヨコナデ、以下ナデ。	褐灰色 〃	密	△ S	△ S－ M			△ S		良好 器面風化	口縁部 1/8	第5層
66		瓦器 浅鉢	(43.2) － －	外面：口縁部から体部ヨコナデ。 内面：口縁部ヨコナデ、以下ナデ。	灰色 〃	密	▲ S	○ S			△ S		良好 器面風化	口縁部 1/8	〃
67		須恵器 鉢	(24.0) － －	外面：口縁部から体部上半回転ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部回転ナデ。	灰色 口縁部暗灰色 〃	密	▲ S	△ S					堅緻	口縁部 1/12	〃 東播系　口縁部外面重ね焼き痕
68		須恵器 鉢	(27.0) － －	外面：口縁部から体部回転ナデ。 内面：口縁部から体部回転ナデ。	灰色 口縁部暗灰色 〃	精良		△ S					堅緻	口縁部 1/16	第4層
69	五	瓦器 椀	11.6 2.7	外面：口縁部ヨコナデ、以下指頭圧痕。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。体部に圏線状暗文。	灰白色～灰色 〃	やや粗	▲ S	△ S			▲ S		良好	1/2	〃 外面重ね焼き痕
70		瓦器 椀	(11.6) 2.9 －	外面：口縁部ヨコナデ。体部指頭圧痕。 内面：口縁部から体部ナデ。	灰色 灰白色	やや粗		○ S－ L					良好	1/4	第5層 外面重ね焼き痕

第３章　まとめ

今回の調査では、小面積にも拘らず平安時代末期・鎌倉時代前期・鎌倉時代中期・室町時代中期・近世に比定される遺構・遺物を検出した。

平安時代末期・鎌倉時代前期・鎌倉時代中期に比定される遺構については、概ね調査区の北部で検出されている。なかでも、鎌倉時代前期～中期に比定される遺構については、自然河川（ＮＲ－201）の流路に規制されて構築されたものである可能性が高い。ただ、時期的には連続性を持つものはなく、単発的な土地利用が断続して行われたことが窺える。

平安時代末期のものとしては、調査区の北部で溝１条（ＳＤ－202）を検出したのみで、包含層からもこの時期に比定される遺物は少量出土したにすぎない。鎌倉時代前期のものは土坑１基（ＳＫ－201）があり、ＮＲ－201に隣接する位置に構築されている関係から両者の有機的関係が想定される。鎌倉時代中期のものとしては、溝１条（ＳＤ－201）があり、ＮＲ－201からの引水の役割を果たした遺構であったと考えられる。なお、調査区の北西約350ｍ地点で昭和56年～昭和59年に近畿自動車道路建設に伴って（財）大阪文化財センターにより実施された佐堂（その１）の調査においては、当該時期の集落が確認されており、中世時期の長瀬川右岸の自然堤防上に展開した集落の広がりが想定される。

室町時代中期の遺構は、北部から南部に広がっており、前代に比して集落の拡大傾向が認められるものの、居住域の中核を成す建物は検出されておらず不明な点が多い。この時期の集落は、調査地の北方約120ｍにある杵築神社ならびに「佐堂狐塚」から想定される神宮寺の存在や、東方約350ｍに存在した千眼寺（穴太廃寺）との関係から、これらの寺社に付随した集落であったと考えられる。

近世の遺構としては、井戸ならびに土坑を検出している。これらの遺構群は耕作土である第2a層（一部第４層）上面を構築面にしていることから、概ね農耕に関連した遺構群と推定され、当該期においては、当地が生産域として利用されていたことが推定される。

なお、これまでに佐堂遺跡内で実施された発掘調査としては、一部の小規模な調査を除けば、近畿自動車道建設に関連したものが唯一であった。周辺地域においても、東方の宮町遺跡範囲に存在する千眼寺（穴太廃寺）周辺で実施された調査成果が知られている程度で、考古学的成果の蓄積が少ない地域であった。今回、発掘調査を実施した地点（佐堂町１丁目）は、前述の既往調査地のほぼ中間地点に位置しており、今回の調査成果が本遺跡ならびに、東接する宮町遺跡の当該期の集落推移を推定するうえで一助となろう。

註記

註１　三宅正浩　1985『佐堂（その１）』（財）大阪文化財センター
　　中井貞夫・阪田育功他　1984『佐堂（その２）－Ⅰ』（財）大阪文化財センター
　　中西靖人・森屋直樹他　1985『佐堂（その２）－Ⅱ』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター

註２　棚橋利光　1987『新版八尾の史跡』八尾市市長公室広報課・八尾郷土文化研究会
　　なお、註文献によれば、「佐堂狐山」は杵築神社の後方にあった小さな塚状の地にあたり、宮寺の土壇の跡と考えられている。ここには、元亀元年（1570）銘のある墓碑が残されている。

註３　米田敏幸他　1982「宮町遺跡－昭和55・56年度埋蔵文化財調査年報」『八尾市文化財調査報告』八尾市教育委員会

原田昌則・成海佳子　1983「第１章　宮町遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要　昭和56・57年度　（財）八尾市文化財調査研究会報告３』（財）八尾市文化財調査研究会

註４　原田昌則　1993「第１章　宮町遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981年度』八尾市教育委員会

坪田真一　1995「Ⅱ宮町遺跡（第１次調査）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告45』（財）八尾市文化財調査研究会

図　　版

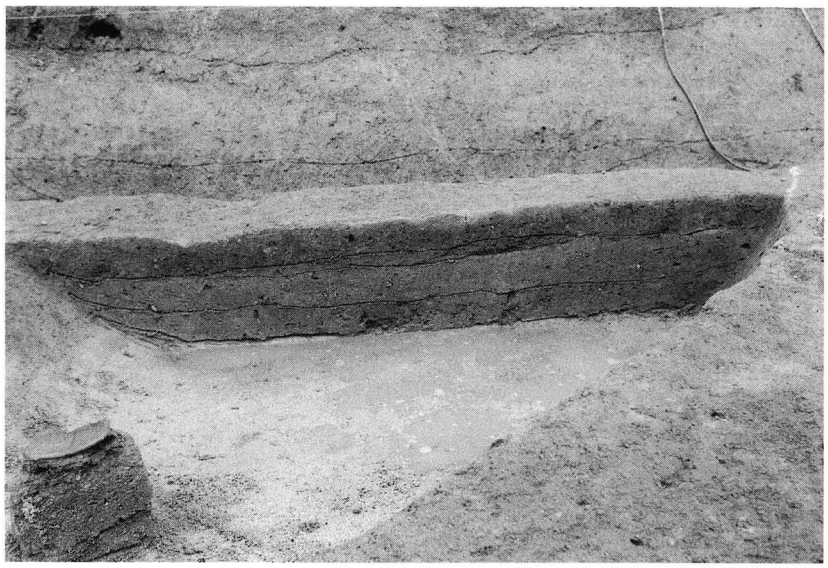
図版一

調査区全景（南から）

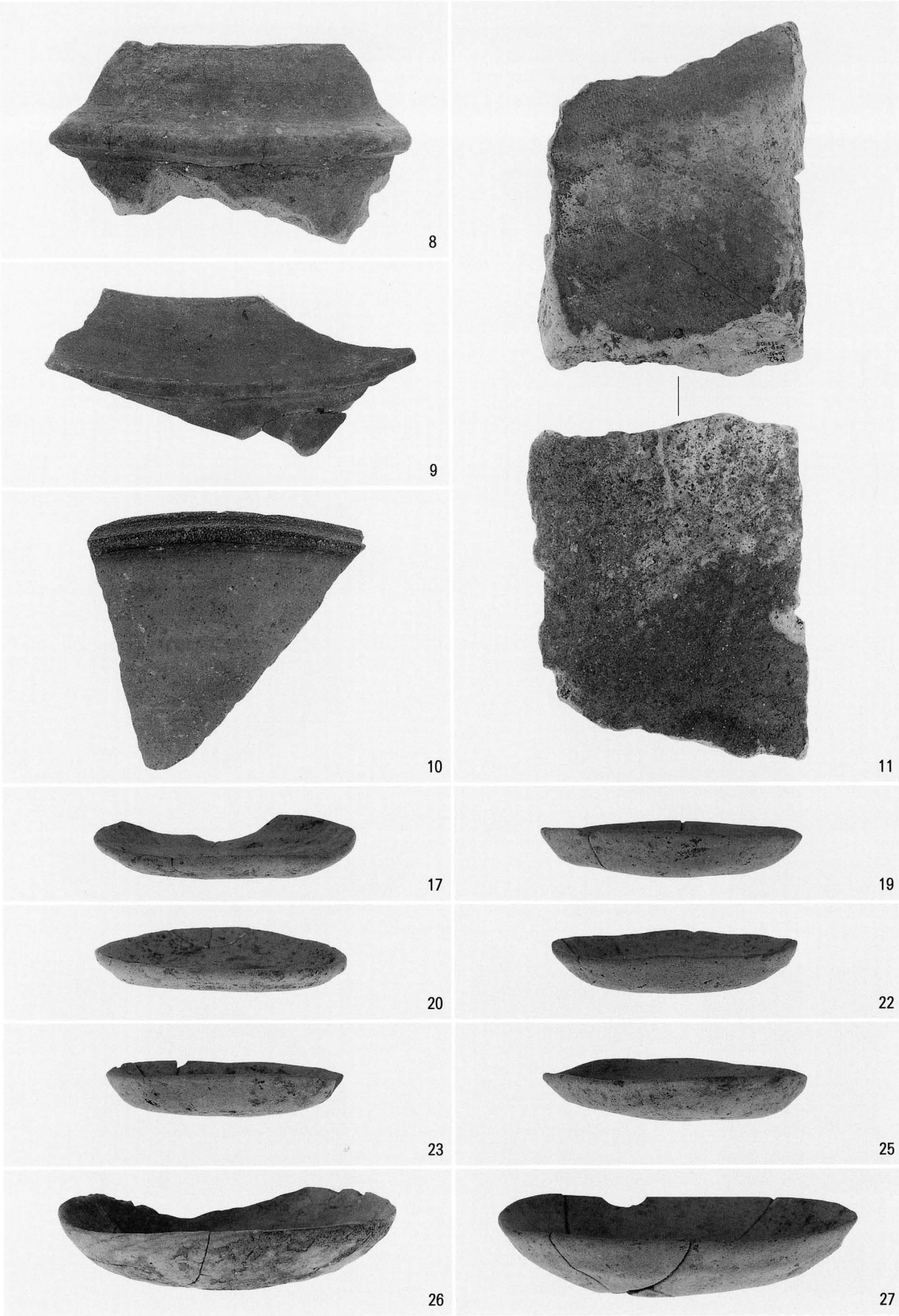
図版二

ＳＫ－201断面（南から）

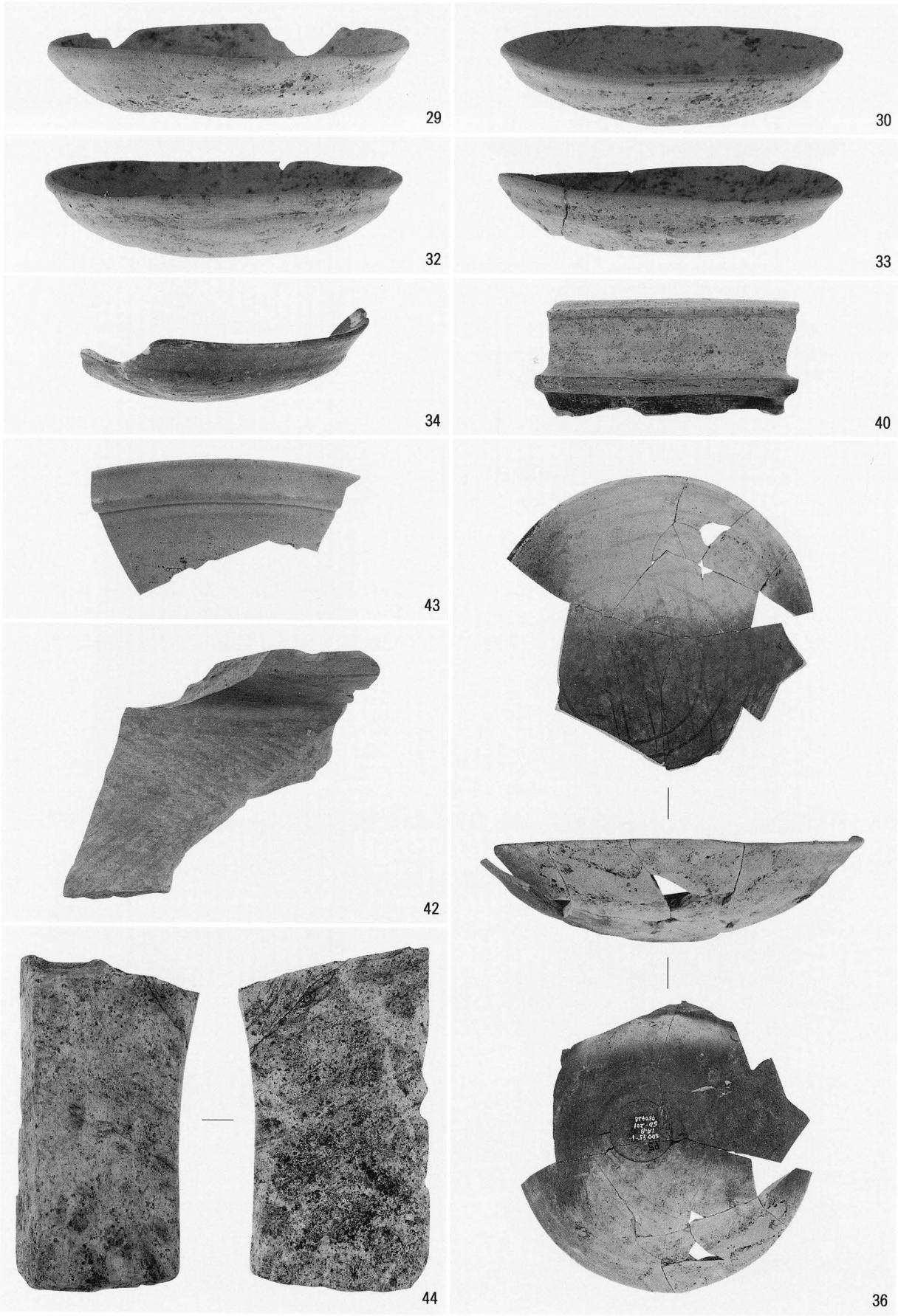
ＳＤ－201断面（南から）



ＳＤ－207断面（東から）



ＳＫ－201（８～11）、ＳＤ－201（17～27）出土遺物

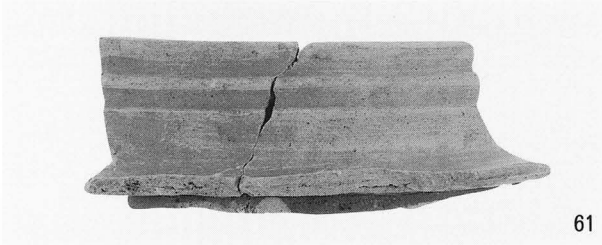


ＳＤ－201（29・30・32～34・36・40・42～44）出土遺物

51

54

56


61

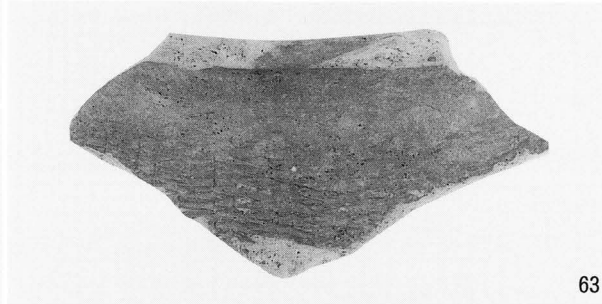
64

65

53

55

62


63

69

ＳＤ－205（51）、ＳＤ－206（53～55）、ＳＤ－207（56）、第４層（63・64・69）、第５層（61・62・65）出土遺物

Ⅴ　太子堂遺跡第７次調査（ＴＳ97－７）

例　　言

1．本書は、八尾市太子堂１丁目地内で実施した公共下水道（９－30工区）工事に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する太子堂遺跡第７次調査（ＴＳ97－７）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋497－３号　平成10年１月30日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成10年３月２日から平成10年４月20日（実働13日）にかけて西村公助を担当者として実施した。調査面積は94㎡を測る。なお、調査においては市森千恵子、岡部和志、中西明美、松本貴匡が参加した。

1．本書に関わる業務は、遺物実測－西村・中西、図面レイアウト・トレース－中西・西村が行った。

1．第７次調査地と第８次調査地は近接して調査を行っているため、調査地周辺図は第７次調査報告に記載し、第８次調査報告では省略した。

1．本書の執筆、編集は西村が行った。

本　文　目　次

第１章　はじめに……59
第２章　調査概要……60
　第１節　調査の方法と経過……60
　第２節　検出遺構と出土遺物……60
　第３節　出土遺物観察表……70
第３章　まとめ……73

挿　図　目　次

第１図　調査地周辺図……59
第２図　調査地位置図……61
第３図　２区１層（１～３）、２区ＳＤ－201（４）、３区ＳＫ－301（５～８）、４区４層（９～20）、４区ＳＰ－401（21～23）、５区ＳＤ－501（24・25）、７区４層（26・27）、７区７層（28）、７区ＳＰ－701（29）出土遺物実測図……63
第４図　１区～５区平断面図……64
第５図　６区～10区平断面図……65
第６図　11区～13区平断面図……68
第７図　８区４層（30・31）８区ＳＤ－801（32・33）９区ＳＥ－901（34～43）10区３層（44）12区（45～47）12区ＳＫ－1201（48～50）13区２層（51）出土遺物実測図……69

図　版　目　次

図版一　１区全景（南から）　２区全景（南から）
３区調査状況（南から）　３区全景（南から）
４区全景（南から）　５区全景（南から）

図版二　調査地周辺および６区掘削状況　６区全景（西から）
７区全景（南から）　８区全景（南から）
９区全景およびＳＥ－901内遺物出土状況（南から）　10区全景（南から）

図版三　11区全景（南から）　12区全景（南から）
13区全景（南から）　13区下層掘削状況（南東から）
２区１層（３）　３区ＳＫ－301（５－８）出土遺物

図版四　４区４層（９～16・18～20）　４区ＳＰ－401（23）　８区４層（30・31）出土遺物

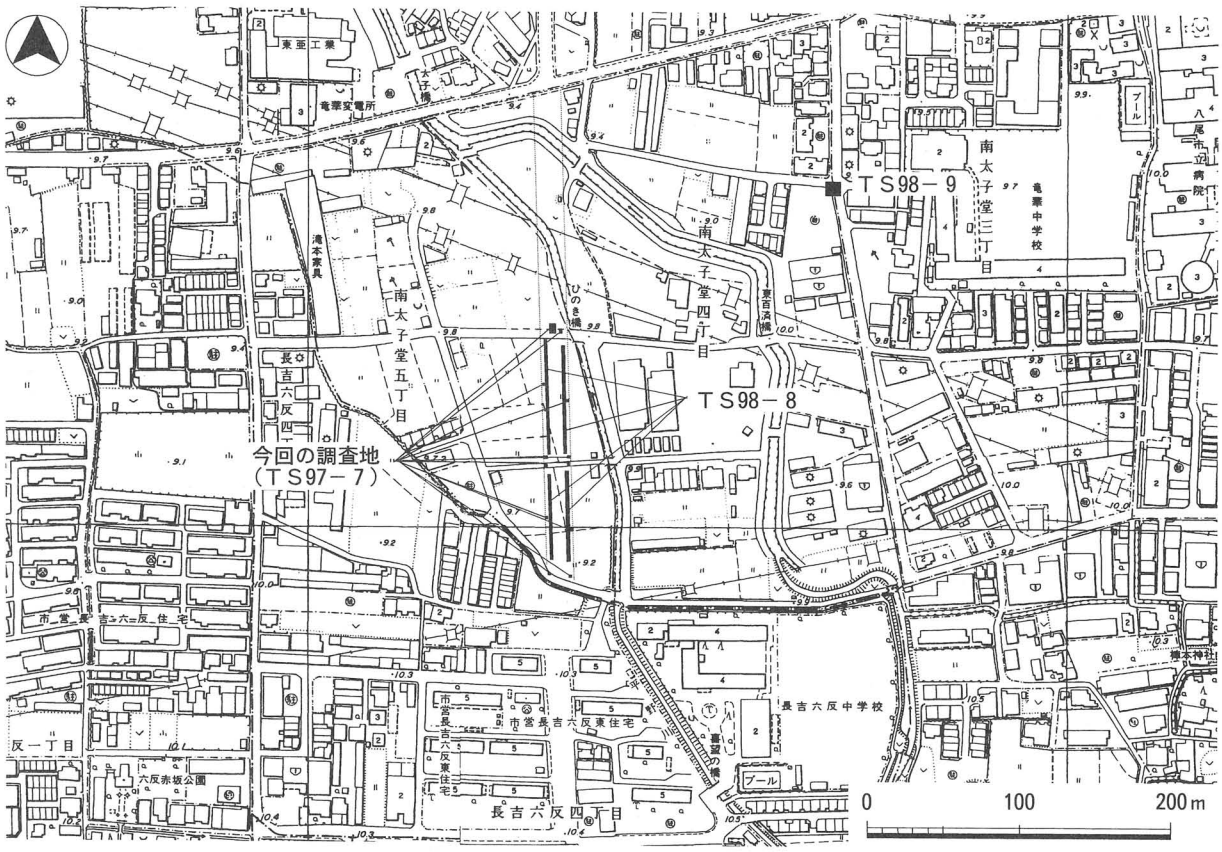
図版五　８区ＳＤ－801（32・33）　９区ＳＥ－901（41～43）
12区ＳＫ－1201（48～50）出土遺物

第１章　はじめに

太子堂遺跡は八尾市の南西部にあたり、現在の行政区画では太子堂３～５丁目、東太子２丁目、南太子堂１～６丁目とその範囲としている。地理的には、旧大和川の支流であった平野川の自然堤防上に位置する古墳時代前期から近世にかけての複合遺跡である。当遺跡周辺には、北に跡部遺跡、北西に亀井遺跡、東に植松南遺跡、北東に植松遺跡が存在している。

当遺跡内では昭和58年度～平成10年度までに当調査研究会が９次におよぶ発掘調査を実施しており、古墳時代前期～室町時代にかけての遺構・遺物が確認されている。なかでも、当遺跡内の北東部に位置している第１次調査地では、奈良時代の遺構・遺物が多く検出されている。また、第２次調査では古墳時代前期の遺物が多量に出土した溝を検出している。

今回の調査地は当遺跡範囲の南部に位置し、道路を挟んだ南側は大阪市の長吉六反４丁目に接している。調査地の周辺では、当地より西部へ約300～500ｍの付近で（財）大阪文化財センターが昭和54年度～昭和61年度にかけて近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う発掘調査を断続的に行なっており、弥生時代～近世の遺構・遺物が多数出土されている。北東部へ約200～400ｍ付近では大阪府教育委員会が昭和53年度から断続的に行なわれている平野川河川改修工事に伴う発掘調査から弥生時代中期の遺構・遺物を検出されている。さらに当地西側の道路を挟んだ西部（約100～200ｍ）付近の大阪市域である長吉出戸７丁目・長吉六反１丁目地内で（財）大阪市文化財協会が平成８年度に長吉東部地区区画整理事業に伴う発掘調査を行い、古墳時代後期～飛鳥時代に



第１図　調査地周辺図

かけての遺構・遺物が検出されている。

なお、第８次調査地は道路建設工事に伴い実施した調査で、第７次調査地とは近接している。

第２章　調査概要

第１節　調査の方法と経過

今回の調査は公共下水道（９－30工区）工事に伴う発掘調査である。人孔11箇所（１区～11区）および立坑２箇所（12区・13区）の調査を実施した。

掘削に際しては、現地表下約0.6～0.8ｍ前後までを機械掘削した後、以下0.2～0.5ｍ前後については人力掘削を行い遺構・遺物の検出に努めた。調査の結果、現地表下0.6～1.2ｍ前後で平安時代前期から後期の遺物包含層および遺構を検出した。以下調査区毎に検出遺構と出土遺物を記載する。

第２節　検出遺構と出土遺物

１区

今回の調査地の南西側に位置する調査区である。盛土の層厚は0.7ｍで、現地表面はT.P.＋10.0ｍを測る。その下には水田耕作土が存在していた。以下粘土層が３枚堆積していることが判明したが、どの層からも遺物や遺構の検出はなかった。第５層の上面（T.P.＋8.8ｍ前後）は攪拌をうけ土壌化している層である。この層の上面で調査を行ったが遺構の検出はなかった。しかし他の調査区の層から推測すると平安時代頃の土壌化層と推定される。以下粘土層を３枚確認したが遺構の検出や遺物の出土はなかった。

２区

１区の北側約38ｍの地点の調査区である。現状は水田になっている場所で、現地表面はT.P.＋9.4ｍを測る。第０層が現在の水田耕作土である。第２層以下第６層までは粘土層が堆積しており、遺構の検出はなかった。第７層上面（T.P.＋8.5ｍ前後）は土壌化を受けている層で、上面で平安時代後期の溝１条（ＳＤ－201）を検出した。第８層以下には粘土層が堆積していたが遺構の検出はなかった。第10層内には細砂のブロックが混入し、亀裂が入っている場所を１箇所確認した。この細砂の部分について第10層中で精査を行い平面的に見ると、幅２～５㎝程度のおおよそ東西方向に走る亀裂を確認した。断面では吹き上がっている痕跡は１箇所確認し、この吹き上がりは第10層中で止まっていた。この細砂層は堆積状況から地震による噴砂ではないかと思われる。これを地震による現象とするならば、詳しい時期の特定はできないが、層序から平安時代以前に起こった地震によるものと推測できる。

第１層からは平安時代後期に比定できる土師器の中皿（１）、小皿（２）が出土した。第７層からは、ＴＫ47型式に比定できる須恵器の高杯（３）が出土した。（３）は外面に波状文を施す。

ＳＤ－201

南北方向に伸びる溝である。溝の西側は調査区の外にあり幅は不明であるが、検出した幅は1.1ｍ以上を測り、深さ0.3ｍを測る。埋土は10YR4/4褐色粗砂混粘土で平安時代後期の瓦器の破片

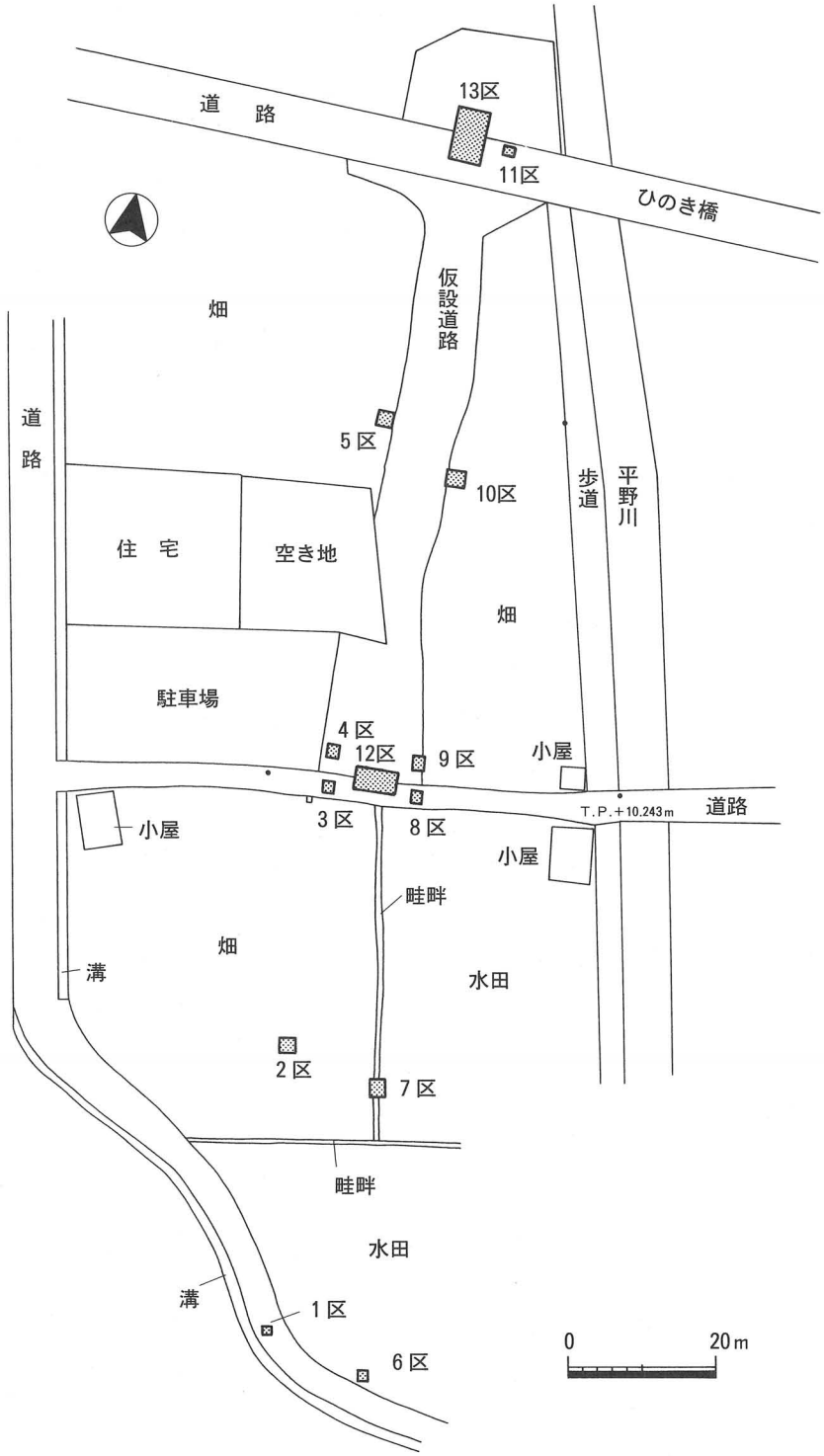
や土師器の皿（４）が出土した。

３区

２区の北側約35ｍの地点の調査区である。現状は道路になっている場所で、現地表面はT.P.＋10.1ｍを測る。第０層は盛土で、厚み0.6ｍを測る。第１層は旧耕作土である。第２層以下第４層までは粘土層が堆積しており、遺構の検出はなかった。第５層上面（T.P.＋9.0ｍ前後）は土壌化しており、平安時代後期の土坑１基（ＳＫ－301）を検出した。以下第６層はシルト混微粒砂で、約0.3ｍ以上堆積しており、この層は河川の堆積によるものと思われる。

ＳＫ－301

土坑の北側は調査区外に至り平面の形状は不明である。検出した平面形状は三角形で、長径1.15ｍ、短径1.0ｍを測る。断面の形状は底面に凹凸をもつ逆台形で、深さ0.35ｍを測る。埋土は7.5YR3/1黒褐色細砂混粘土で平安時代後期の土師器小皿（５）、須恵器壺（６）、黒色土器椀（７）、瓦器椀（８）が出土した。



第２図　調査地位置図

４区

３区の北側約５ｍの地点の調査区である。現状は道路になっている場所で、現地表面はT.P.＋10.3ｍを測る。第０層は盛土で、層厚0.8ｍを測る。第１層は旧耕作土である。第２層以下第４層までは粘土層が堆積しており、遺構の検出はなかった。第４層からは土師器小皿（９～14）、

土師器中皿（15・16）、瓦器椀（17～20）が出土した。第５層上面（T.P.＋8.9ｍ前後）は土壌化しており、平安時代後期の小穴１個（ＳＰ－401）を検出した。

ＳＰ－401

検出した平面形状は東西方向に長い楕円形で、長径0.6ｍ、短径0.45ｍを測る。断面の形状は皿形で、深さは0.1ｍを測る。埋土は10YR5/1褐灰色細砂混粘土で、平安時代後期頃と思われる平瓦（23）、土師器小皿（21・22）が出土した。

５区

４区の北側約45ｍの地点の調査区である。現状は畑になっている場所で、現地表面はT.P.＋9.3ｍを測る。第０層は現在の畑の耕作土で、層厚0.2ｍを測る。層厚１層以下第３層までは粘土層が堆積しており、遺構の検出はなかった。第４層上面は土壌化しており、上面（T.P.＋8.6ｍ前後）では平安時代後期の溝を１条（ＳＤ－501）を検出した。第５層の細粒シルトは層厚0.2ｍ以上あり、流水堆積層である。

ＳＤ－501

南北方向に伸びる溝で、西側は調査区の外にあり幅は不明である。検出長1.1ｍで、検出した幅は0.7ｍである。断面形状は皿形で、深さ0.3ｍを測る。埋土は10YR4/6褐色シルト混粘土で、平安時代頃の黒色土器椀（24）、須恵器杯（25）が出土した。

６区

１区の東側約14ｍの地点の調査区である。現地表面はT.P.＋9.5ｍを測る。第０層は現在の水田の耕作土で、層厚0.15ｍを測る。第１層以下第４層までは粘土層が堆積しており、遺構の検出はなかった。第５層上面（T.P.＋8.8ｍ前後）で平面精査を行い遺構の検出に努めたが遺構の検出はなかった。周囲の調査の状況から第５層上面は平安時代後期頃に相当すると思われる。以下（T.P.＋8.7～8.1ｍ前後まで）には第６層～第８層が堆積していた。これらの層は粘土で、各層からの遺構の検出はなかった。

７区

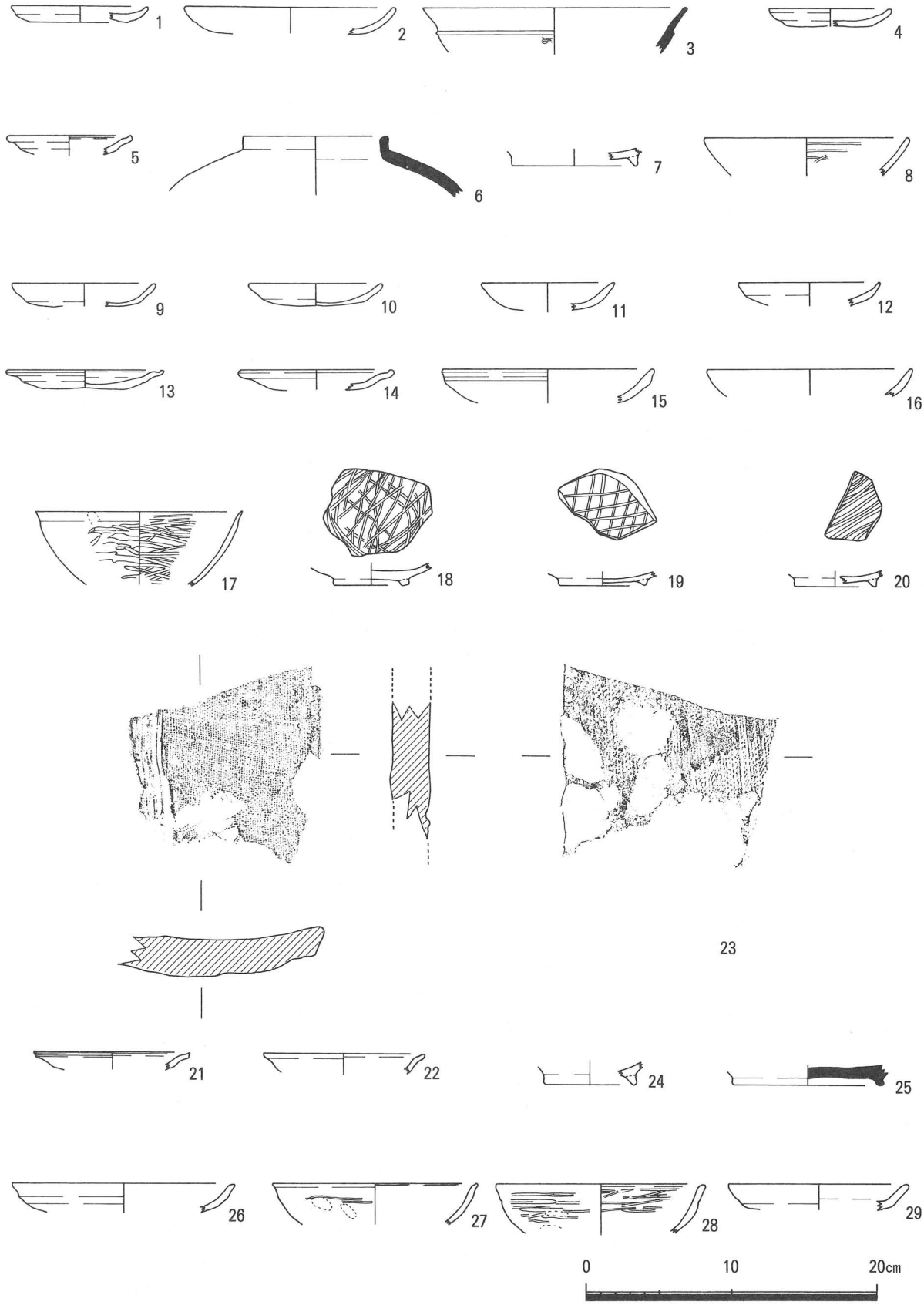
６区の北側約39ｍの地点の調査区である。現地表面はT.P.＋9.4ｍを測る。第０層は現在の水田の耕作土で、層厚0.2ｍを測る。第１層以下第４層までは粘土層が堆積しており、遺構の検出はなかった。第４層内には細かい土器片を多く含んでおり、この層は平安時代後期以後の整地層と思われる。第４層からは土師器小皿（26）、瓦器椀（27）が出土した。第５層上面（T.P.＋8.45ｍ前後）では平安時代後期の小穴を１個（ＳＤ－701）を検出した。第７層の細粒シルトは層厚0.2ｍ以上あり、平安時代後期頃の瓦器椀（28）を含んでいる。この層は河川の堆積層と思われる。

ＳＰ－701

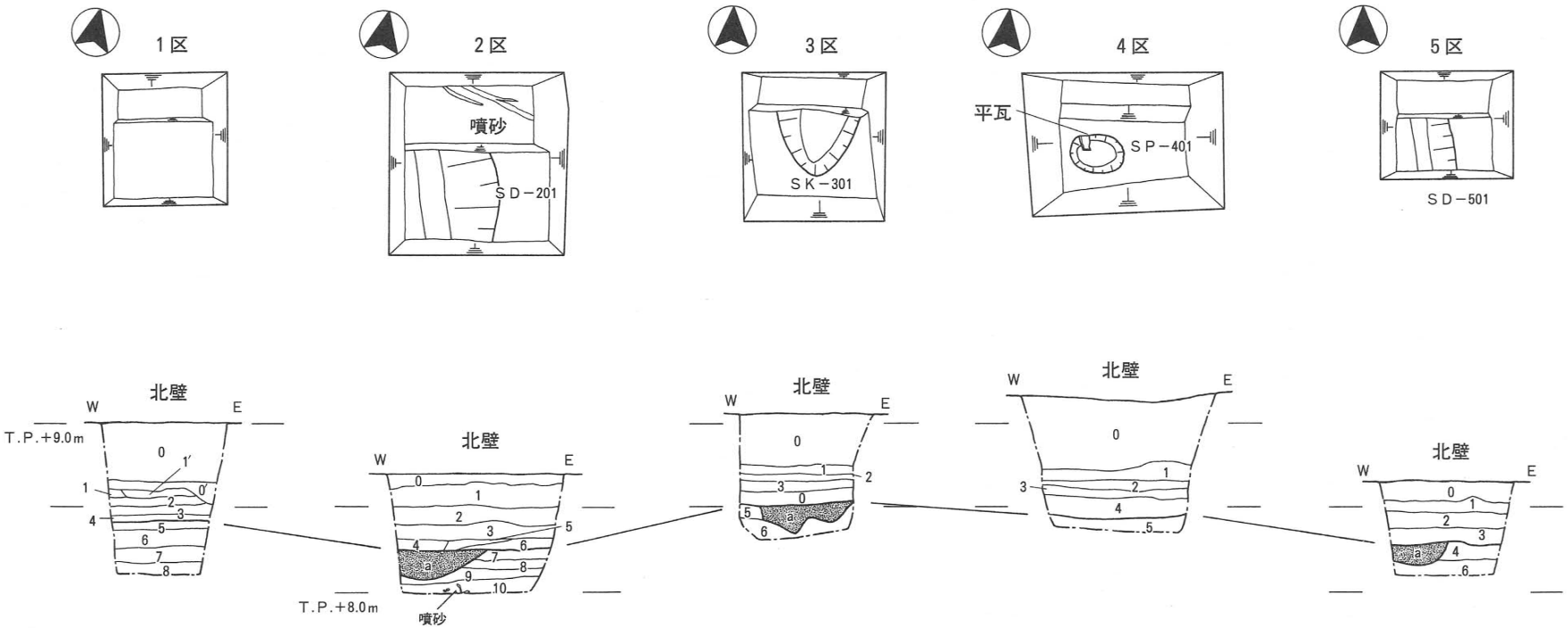
平面の形状は円形で、径0.6ｍを測り、断面の形状は皿形で、深さ0.2ｍを測る。埋土は2.5Y4/1黄灰色細砂混粘土で平安時代後期の土師器中皿（29）が出土した。

８区

７区の北側約40ｍの地点の調査区である。現地表面はT.P.＋10.1ｍを測る。第０層は現在の盛土で、層厚0.55ｍを測る。第１層は旧耕作土で、層厚0.15ｍを測る。第２層以下第４層までは粘土層が堆積しており、遺構の検出はなかった。第４層からは土師器小皿（30）、白磁碗（31）が出土した。第５層上面（T.P.＋8.8ｍ前後）では平安時代後期の溝を１条（ＳＤ－801）を検出し



第３図　２区１層（１～３）、２区ＳＤ－201（４）、３区ＳＫ－301（５～８）、４区４層（９～20）、４区ＳＰ－401（21～23）、５区ＳＤ－501（24・25）、７区４層（26・27）、７区７層（28）、７区ＳＰ－701（29）出土遺物実測図



第４図　１区～５区平断面図

層序
0　盛土
0′　旧耕土
1　10ＹＲ4/2灰黄褐色微砂混粘土
1′　旧耕土床土　N/3灰色細砂混粘土
2　10YR4/1褐灰色微砂混粘土
3　10ＹＲ4/2灰黄褐色細砂混粘土
4　10ＹＲ6/2灰黄褐色微粒シルト混粘土
5　10ＹＲ5/8黄褐色微粒シルト混粘土
上面（T.P.＋8.8m前後）は平安時代後期に相当
6　10Y6/1灰色粘土
7　5B4/1暗青灰色粘土
8　10BG3/1暗青灰色粘土

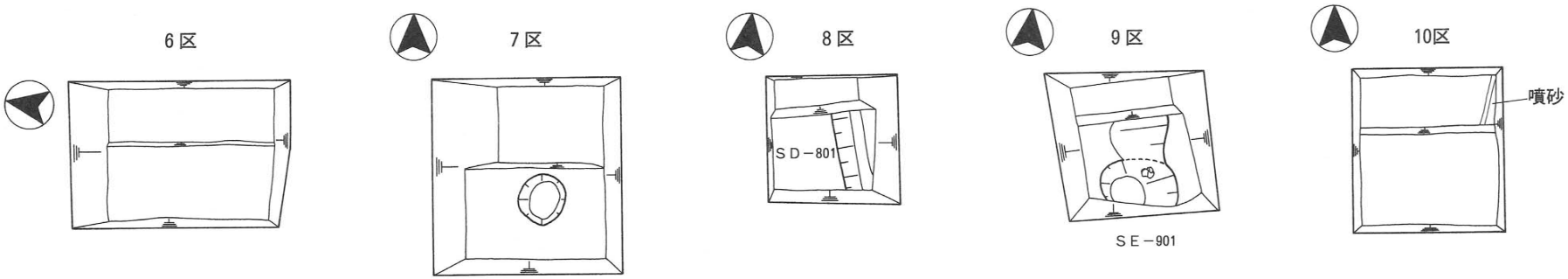
層序
0　N3/暗灰色細砂混粘土　現在の水田土層
1　10ＹＲ4/2灰黄褐色微砂混粘土
2　10ＹＲ4/1褐灰色微砂混粘土
3　10ＹＲ4/2灰黄褐色細砂混粘土
4　10ＹＲ4/1褐灰色中粒シルト混粘土
5　10ＹＲ6/1褐灰色細砂混粘土
6　10ＹＲ5/8黄褐色粗砂混粘土
7　10ＹＲ4/1褐灰色細砂混細粒シルト
上面（T.P.＋8.5m前後）で平安時代後期の溝１条（ＳＤ－201）を検出
8　2.5Y4/1黄灰色細砂混粘土
9　N3/暗灰色粘土
10　5BG6/1青灰色細粒シルト
東西方向の細砂層は噴砂の痕跡
a　10ＹＲ4/4褐色粗砂混粘土（ＳＤ－201埋土）

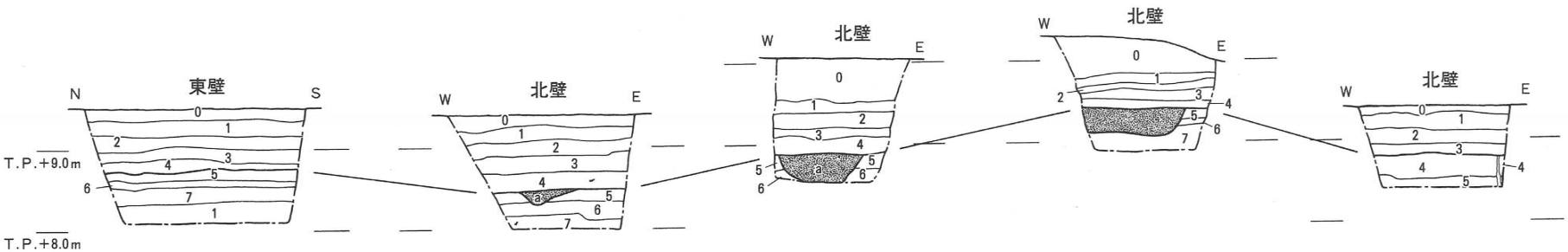
層序
0　盛土
1　旧耕作土10ＹＲ4/1褐色細砂混粘土
2　10ＹＲ5/6黄褐色細砂混粘土
3　10ＹＲ6/1褐灰色細砂混粘土
4　10ＹＲ5/1褐灰色粗粒シルト混粘土
5　10ＹＲ4/1褐灰色細砂混細粒シルト
上面（T.P.＋9.0m前後）で平安時代後期の土坑１基（ＳＫ－301）を検出
6　10ＹＲ6/2灰黄褐色粗粒シルト混微粒砂
a　7.5ＹＲ3/1黒褐色細砂混粘土

層序
0　盛土
1　旧耕作土10ＹＲ4/1褐色細砂混粘土
2　10ＹＲ5/6黄褐色細砂混粘土
3　10ＹＲ6/1褐灰色細砂混粘土
4　10ＹＲ5/1褐灰色粗粒シルト混粘土
5　10ＹＲ4/1褐灰色細砂混細粒シルト
上面（T.P.＋8.9m前後）で平安時代後期の小穴１個（ＳＰ－401）を検出

層序
0　現在の耕作土　N3/暗灰色細砂混粘土
1　2.5Y6/6明黄褐色シルト混粘土
2　10ＹＲ4/6褐色細砂混粘土
3　10ＹＲ4/2灰黄褐色シルト混粘土
4　7.5Y4/1灰色細粒シルト
上面（T.P.＋8.6m前後）で平安時代後期の溝１条（ＳＤ－501）検出

0　2 m





層序
0　現在の耕作土(水田)　N3/暗灰色細砂混粘土
1　10YR4/2灰黄褐色微砂混粘土
2　10YR4/1褐灰色微砂混粘土
3　10YR4/2灰黄褐色細砂混粘土
4　10YR6/2灰黄褐色微粒シルト混粘土
5　10YR5/8黄褐色細粒シルト混粘土
　上面（T.P.+8.8m前後）は平安時代後期に相当
6　10Y6/1灰色粘土
7　5B4/1暗青灰色粘土
8　10BG3/1暗青灰色粘土

層序
0　現在の水田土層　N3/暗灰色細砂混粘土
1　10YR4/2灰黄褐微砂混粘土
2　10YR4/1褐灰微砂混粘土
3　10YR4/2灰黄褐細砂混粘土
4　10YR5/8黄褐粗砂混粘土
5　10YR4/1褐灰細砂混細粒シルト
　上面（T.P.+8.8m前後）で平安時代後期の個小穴1個（SP－701）を検出
6　2.5Y4/1黄灰細砂混粘土
7　5BG6/1青灰色細粒シルト
a　2.5Y4/1黄灰細砂混粘土

層序
0　盛土
1　旧耕作土　10YR4/1褐色細砂混粘土
2　10YR5/6黄褐色細砂混粘土
3　10YR6/1褐灰色細砂混粘土
4　10YR5/1褐灰色粗粒シルト混粘土
5　10YR3/2黒褐色粗砂混粘土
　上面（T.P.+8.8m前後）で平安時代後期の溝1条（SD－801）を検出
6　10YR3/1黒褐色粗砂
a　10YR4/3褐色細砂混粘土　SD－801埋土

層序
0　盛土
1　旧耕作土　10YR4/1褐色細砂混粘土
2　10YR5/6黄褐色細砂混粘土
3　10YR6/1褐灰色細砂混粘土
4　10YR5/1褐灰色粗粒シルト混粘土
5　10YR3/2黒褐色細砂混粘土
　上面（T.P.9.4m前後）で平安時代後期の井戸1基（SE－901）を検出
6　10YR3/1黒褐色粗砂混細砂
7　7.5YR4/1褐灰色粗砂
a　10YR3/1黒褐色細砂混粘土
　SE－901埋土

層序
0　現在の耕作土(水田)
1　2.5Y6/6明黄褐色シルト混粘土
2　10YR4/6褐色細砂混粘土
3　10YR4/2灰黄褐色シルト混粘土
4　5Y5/2灰オリーブ中粒シルト混粘土
　上面（T.P.+8.8m前後）は平安時代後期に相当
5　7.5Y4/1灰色細粒シルト
噴砂　5Y7/2灰白色細砂

0　2m

第5図　6区～10区平断面図

た。第６層の粗砂は層厚0.15ｍ以上あり、この層は河川の堆積層と思われる。

溝（ＳＤ）

ＳＤ－801

南北方向に伸びる溝で、東肩は調査区外にあるため幅は不明であるが、調査地内の北側でやや西に曲がっている。検出長1.3ｍで、検出した幅は1.0ｍを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.35ｍを測る。埋土は10YR4/3褐色細砂混粘土で奈良時代～平安時代後期の須恵器杯蓋（32）、黒色土器椀（33）が出土した。

９区

８区の北側約４ｍの地点の調査区である。現地表面はT.P.＋10.1ｍを測る。第０層は現在の盛土で、層厚0.5ｍを測る。第１層は旧耕作土で、層厚0.15ｍを測る。第２層以下第４層までは粘土層が堆積しており、遺構の検出はなかった。第５層上面（T.P.＋9.4ｍ前後）では平安時代後期の井戸１基（ＳＥ－901）を検出した。第６層と第７層は細砂と粗砂で、この層は河川の堆積層と思われる。

井戸（ＳＥ）

ＳＥ－901

平面の形状は東西方向に長い楕円形で、長径0.95ｍ、短径0.55ｍを測る。断面の形状は逆台形で、深さ0.6ｍを測る。埋土は上からⅠ層10YR3/1黒褐色細砂混粘土、Ⅱ層10YR3/2黒褐色微砂混粘土、Ⅲ層N3/暗灰色粘土で、Ⅰ層内からは平安時代後期の土師器小皿（34～38）、土師器皿（39・40）、黒色土器椀（41）、瓦器椀（42・43）が出土した。

10区

９区の北側約39ｍの地点の調査区である。現地表面はT.P.＋9.4ｍを測る。第０層は現在の畑の耕作土で、層厚0.1ｍを測る。第１層以下第４層までは粘土層が堆積しており、第３層内からは土師器中皿（44）が出土した。第４層上面で調査を行ったが遺構の検出はなかつた。第５層はシルトで、この層は河川の堆積層と思われる。第５層と第４層を貫き、第４層上面まで達している南北方向に伸びる細砂層（5Y7/2灰白色細砂）を確認した。この細砂は、地震の際の噴砂と推定される。時期の決定は難しいが、この噴砂方向は２区で検出したものと異なっている。時期の決定は難しいがこの噴砂も平安時代以前に起こった地震によるものと思われる。

11区

10区の北側約45ｍ地点の調査区である。現地表面はT.P.＋10.2ｍを測る。第０層は盛土で、層厚1.0ｍを測る。第１層以下第４層までは粘土層が堆積しており、第１層～第３層上面には遺構はなかった。第４層上面で調査を行い上面で平安時代後期の小穴１個（ＳＰ－1101）検出した。

小穴（ＳＰ）

ＳＰ－1101

遺構の西側と北側は調査区外にあり平面の形状は不明であるが、検出した平面の形状は隅丸方形で、長径0.4ｍ以上、短径0.3ｍ以上を測る。断面の形状は逆台形で、深さ0.3ｍを測る。埋土は5YR4/1褐灰色細砂混粘土で、平安時代後期頃と思われる土師器の甕の破片が出土した。

12区

３区の東側約３ｍ地点の調査区である。現地表面はT.P.＋10.6ｍを測る。第０層は盛土で、層

厚0.5ｍを測る。第１層以下第４層までは粘土層が堆積しており、第３層からは土師器中皿（45）、土師器羽釜（46）、瓦質三足釜（47）が出土した。第４層上面（T.P.＋9.0ｍ前後）で調査を行い平安時代後期の土坑１基（ＳＫ－1201）、小穴１個（ＳＰ－1201）検出した。第５層は厚さ約3.0ｍで、平安時代以前の河川の堆積層である。第６層は粘土層で、植物遺体を含む沼地の堆積と思われる。以下第７層と第８層も粘土で、遺構の検出はなかった。

土坑（ＳＫ）

ＳＫ－1201

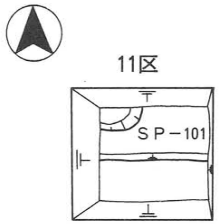
平面の形状は円形で、径1.0ｍを測る。断面の形状は逆台形で、深さ0.15ｍを測る。埋土は10YR3/4暗褐色細砂混粘土で、平安時代後期の土師器小皿（48・49）、土師器杯（50）および黒色土器が出土した。黒色土器は両黒で、器種は不明であるが平安時代後期のものと思われる。

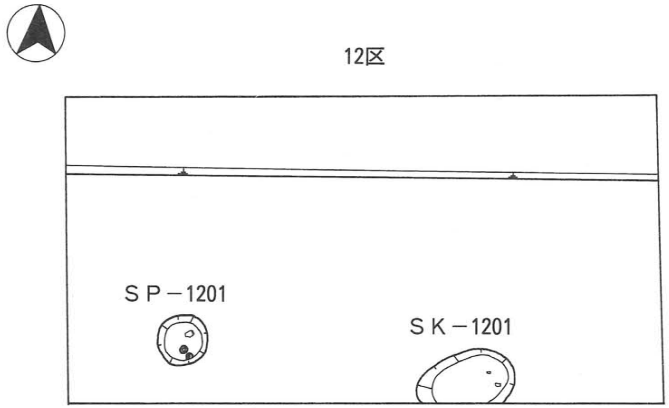
ＳＰ－1201

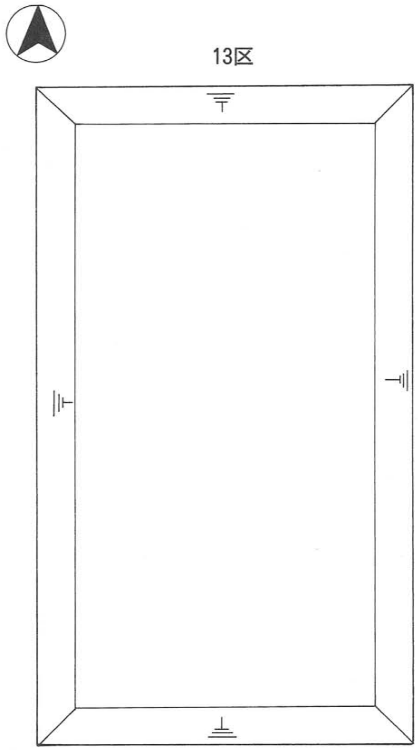
平面の形状は円形で、径0.5ｍを測る。断面の形状は逆台形で、深さ0.2ｍを測る。埋土は10YR4/2　灰黄褐色粗粒シルト混粘土で、平安時代後期の土師器の破片や瓦器椀の破片が出土した。破片で図化できなかったが、瓦器椀は器壁が厚く、内外面にヘラミガキを施しているなどの特徴から平安時代後期に比定できる。

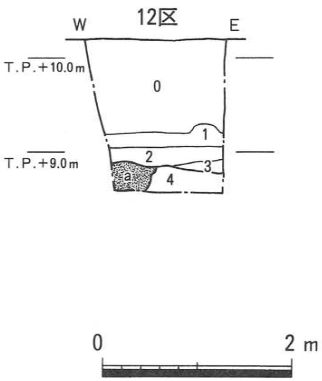
13区

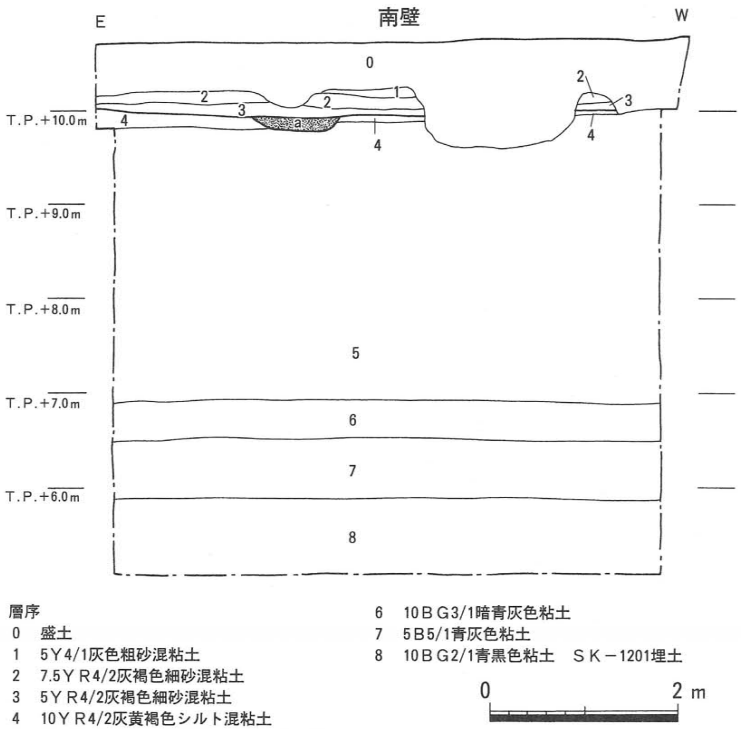
11区の西側約３ｍ地点の調査区である。現地表面はT.P.＋10.2ｍを測る。第０層は盛土で、層厚1.0ｍを測る。第１層以下第４層までは粘土層が堆積しており、第２層からは瓦器椀（51）が出土した。瓦器椀はやや薄い器壁で外面にヘラミガキを施していないもので、12世紀後半～13世紀代と思われる。第４層上面（T.P.＋8.8ｍ前後）で調査を行ったが、遺構の検出はなかった。第４層上面（T.P.＋8.8ｍ前後）は平安時代後期に相当すると思われる。第11層は粘土層で、植物遺体を含む沼地の堆積と思われる。以下第14層も粘土で、植物遺体を含む沼地の堆積と思われる。

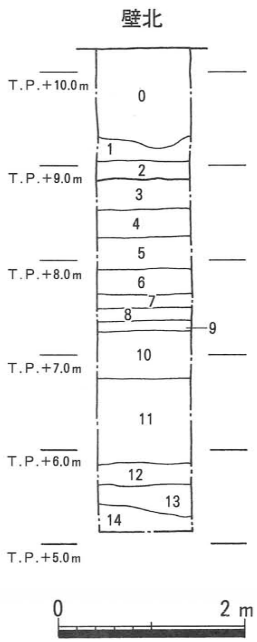








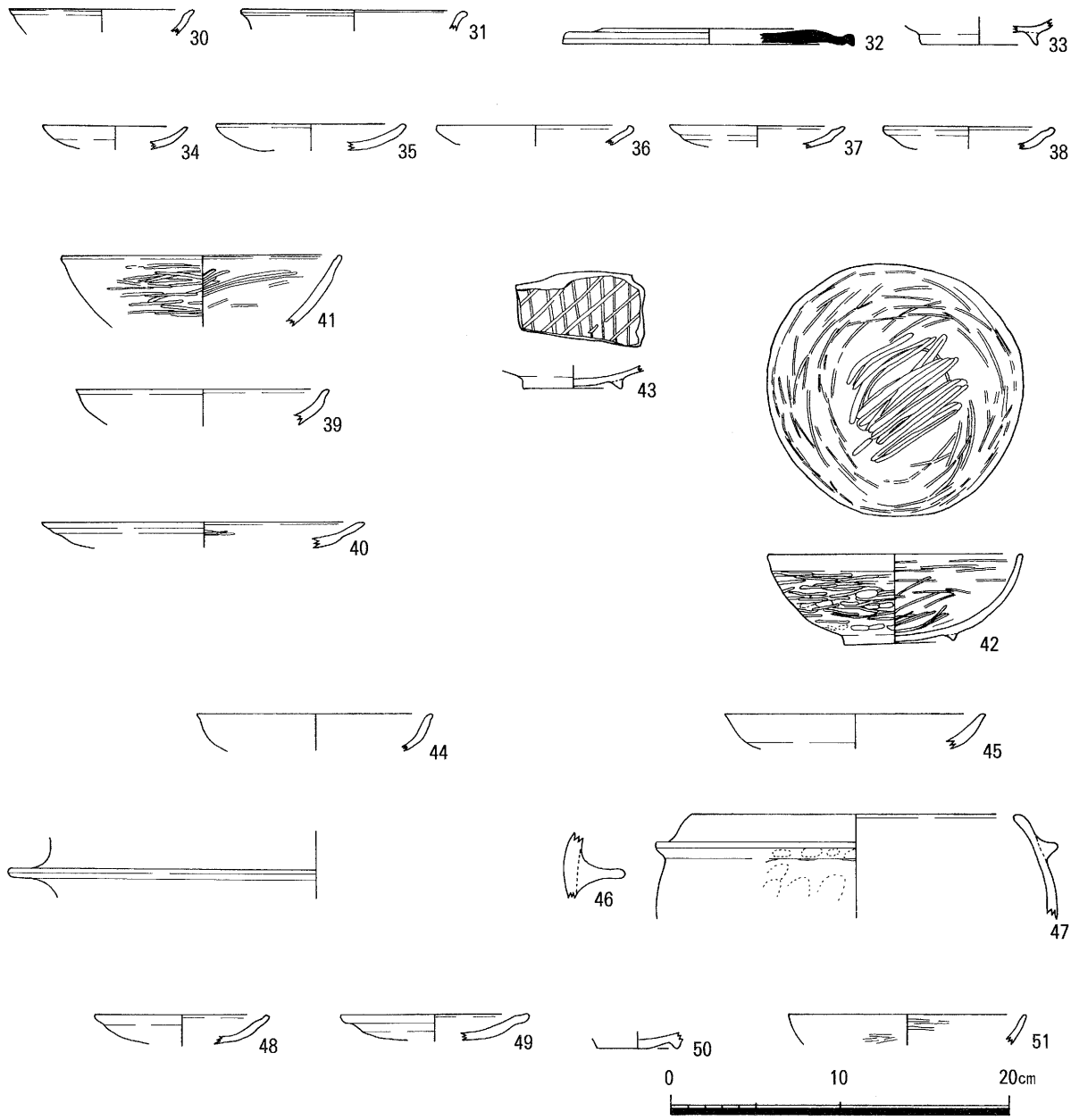




層序
0　盛土
1　10ＢＧ2/1青黒色細砂混粘土
2　5ＢＧ4/1暗青灰色粗砂混粘土
3　10ＹＲ4/1褐灰色細砂混粘土
4　10ＹＲ4/2灰黄褐色シルト混粘土
　上面で平安時代後期の小穴１個
　（ＳＰ－1101）検出
a　5ＹＲ4/1　褐灰色砂混粘土
　ＳＰ－1101埋土

層序
0　盛土
1　5Ｙ4/1灰色粗砂混粘土
2　7.5ＹＲ4/2灰褐色細砂混粘土
3　5ＹＲ4/2灰褐色細砂混粘土
4　10ＹＲ4/2灰黄褐色シルト混粘土
　上面（T.P.＋9.0m前後）で土坑１基
　（ＳＰ－1201）小穴１個（ＳＰ－1201）
　検出
5　10Ｙ4/1灰色粗砂混細砂　層厚約3.0m前後
　平安時代以前の河道の堆積土である。
6　10ＢＧ3/1暗青灰色粘土
7　5Ｂ5/1青灰色粘土
8　10ＢＧ2/1青黒色粘土　ＳＫ－1201埋土

層序
0　盛土
1　2.5Ｙ5/3黄褐細砂混粘土
2　10ＹＲ5/6黄褐粗粒シルト混粘土
3　10ＹＲ4/6褐粗粒シルト混粘土
4　N4/灰　粘土
　上面（T.P.＋8.8m前後）は
　平安時代後期に相当
5　5Ｂ4/1暗青灰中粒シルト混粘土
6　N4/灰粗粒シルト混粘土
7　5Ｂ4/1暗青灰粘土
8　10ＢＧ4/1暗青灰微砂細粒シルト
9　N3/暗灰粘土
10　5Ｂ5/1青灰微砂と細粒シルトの互層
11　5Ｂ3/1暗青灰粘土
12　10ＢＧ5/1青灰色シルト混細砂
13　5Ｂ4/1暗青灰色微砂混粘土
14　5ＰＢ2/1青黒色粘土



第７図　８区４層（30・31）、８区ＳＤ－801（32・33）、９区ＳＥ－901（34・43）、10区３層（44）、12区３層（45～47）、12区ＳＫ－1201（48～50）、13区２層（51）出土遺物実測図

第３節　出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器　種 出土位置	法量（cm）	調整・技法の特徴	色　調	胎　土	焼成	備　考
1	土師器 小皿 ２区１層	口径　9.2	上げ底の体部から上外方に開く口縁部。内外面ナデ。	外　にぶい黄橙色(10YR7/4) 内　にぶい黄橙色(10YR7/4) 断　にぶい黄橙色(10YR7/4)	精良	良好	
2	土師器 中皿 ２区１層	口径　14.2	やや内湾しながら上外方へ開く口縁部。端部は丸く終わる。内外面ナデ。	外　浅黄橙色(7.5YR8/6) 内　浅黄橙色(7.5YR8/4) 断　浅黄橙色(7.5YR8/4)	1㎜以下の砂粒を含む	良好	
3 三	須恵器 高杯 ２区１層	口径　18.2	外反気味に開く口縁部。外面に段がある。内外面回転ナデ。段より下に波状文を施す。	外　灰色(N5/) 内　灰色(N6/) 断　灰色(N6/)	密	良好	
4	土師器 皿 ２区SD－201	口径　8.2	平らな底部からゆるやかに内湾し開く口縁部。端部は尖り気味に終わる。内外面ともにナデ。	外　灰黄色(2.5Y6/2) 内　灰黄色(2.5Y6/2) 断　灰黄色(2.5Y6/2)	粗	良好	
5 三	土師器 小皿 ３区SK－301	口径　8.4	口縁部は外反し、端部を肥厚させる。口縁部内外面ナデ。	外　浅黄橙色(7.5YR8/3) 内　浅黄橙色(7.5YR8/4) 断　浅黄橙色(7.5YR8/3)	精良	良好	
6 三	須恵器 壺 ３区SK－301	口径　9.8	内湾する体部から直立する口縁部。内外面回転ナデ。	外　青灰色(5PB6/1) 内　暗青灰色(5PB4/1) 断　青灰色(5PB5/1)	精良	良好	
7 三	黒色土器 椀 ３区SK－301	高台径　8.4 高台高　0.7	ハの字に開く高台部。高台の断面形状は台形。内外面ナデ。	外　にぶい黄橙色(10YR7/3) 内　橙色(7.5YR7/6) 断　にぶい黄橙色(10YR7/3)	精良	良好	
8 三	瓦器 椀 ３区SK－301	口径　14.0	上外方へ内湾気味に開く口縁部。端部は丸く終わる。内面ヘラミガキ。外面ナデ。	外　灰色(N5/) 内　灰色(N5/) 断　灰白色(5Y8/1)	3㎜の砂粒含む	良好	
9 四	土師器 小皿 ４区４層	口径　9.8	内湾気味に開く口縁部。端部は丸い。内外面ナデ。	外　橙色(5YR7/6) 内　橙色(2.5YR7/8) 断　橙色(5YR7/6)	精良	良好	
10 四	土師器 小皿 ４区４層	口径　9.0 器高　1.6	内湾気味に開く口縁部。端部は丸い。内外面ナデ。	外　橙色(5YR7/6) 内　橙色(5YR7/6) 断　橙色(5YR7/6)	２㎜以下の砂粒を含む	良好	
11 四	土師器 小皿 ４区４層	口径　9.0	外反気味に開く口縁部。端部は尖り気味に終わる。内外面ナデ。	外　橙色(7.5YR6/6) 内　橙色(2.5YR6/8) 断　赤橙色(10R6/8)	２㎜以下の砂粒を含む	良好	
12 四	土師器 小皿 ４区４層	口径　9.6	体部から屈曲し上外方へ開く口縁部。端部は丸く終わる。内外面ナデ。	外　にぶい橙色(7.5YR7/4) 内　にぶい橙色(7.5YR7/4) 断　にぶい橙色(7.5YR7/4)	２㎜以下の砂粒を含む	良好	
13 四	土師器 小皿 ４区４層	口径　10.6 器高　1.2	口縁部は外反し、端部を肥厚させる。口縁部内外面ナデ。	外　灰白色(10YR8/2) 内　灰白色(10YR8/2) 断　灰白色(10YR8/2)	粗	良好	
14 四	土師器 小皿 ４区４層	口径　10.2	口縁部は外反し、端部を肥厚させる。口縁部内外面ナデ。	外　浅黄橙色(7.5YR8/3) 内　浅黄橙色(7.5YR8/3) 断　浅黄橙色(7.5YR8/3)	精良	良好	
15 四	土師器 中皿 ４区４層	口径　14.4	やや内湾気味に開く口縁部。端部は丸く終わる。口縁端部外面には幅広の凹線状にくぼむ部分がある。内外面ともにナデ。	外　にぶい黄橙色(10YR7/4) 内　にぶい黄橙色(10YR7/4) 断　にぶい黄橙色(10YR7/4)	２㎜以下の砂粒を含む	良好	
16 四	土師器 中皿 ４区４層	口径　14.0	内湾する口縁部。端部は尖り気味に終わる。内外面ともにナデ。	外　にぶい黄橙色(10YR7/4) 内　にぶい橙色(7.5YR7/4) 断　浅黄橙色(10YR8/3)	１㎜以下の砂粒を含む	良好	
17	瓦器 椀 ４区４層	口径　14.2	やや内湾気味に体部から少しだけ外反する口縁部。端部は尖り気味に終わる。内面ヘラミガキ。外面ナデ後ヘラミガキ。	外　灰色(N4/) 内　灰色(N5/) 断　灰白色(2.5Y7/1)	粗	良好	
18 四	瓦器 椀 ４区４層	高台径　5.0 高台高　0.4	ハの字に開く高台部。高台の断面形状は台形。外面ナデ。見込みは格子のヘラミガキ。	外　灰色(N4/) 内　青黒色(5PB1.7/1) 断　灰白色(10YR8/2)	３㎜以下の砂粒を含む	良好	
19 四	瓦器 椀 ４区４層	高台径　5.8 高台高　0.5	ハの字に開く高台部。高台の断面形状は三角形。外面ナデ。見込みは格子のヘラミガキ。	外　灰色(N4/) 内　暗灰色(N3/) 断　灰白色(2.5Y8/1)	精良	良好	

遺物番号 図版番号	器　種 出土位置	法量（cm）	調整・技法の特徴	色　調	胎　土	焼成	備　考
20 四	瓦器 椀 ４区４層	高台径 5.4 高台高 0.6	ハの字に開く高台部。高台の断面形状は三角形。外面ナデ。見込みは平行のヘラミガキ。	外　灰色(N4/) 内　灰色(N4/) 断　灰白色(2.5Y7/1)	精良	良好	
21	土師器 小皿 ４区SP－401	口径　10.2	外反する口縁部。端部はやや横へつまみ出し、口縁端部には凹線状の窪みがある。内外面ナデ。	外　浅黄橙色(10YR8/3) 内　浅黄橙色(10YR8/4) 断　浅黄橙色(10YR8/3)	精良	良好	
22	土師器 小皿 ４区SP－401	口径　11.0	内湾気味に開く体部から外反しややつまみ上げ、丸く終わる口縁部。内外面ナデ。	外　浅黄橙色(10YR8/3) 内　灰白色(10YR8/2) 断　灰白色(10YR8/1)	精良	良好	
23 四	平瓦 ４区SP－401	厚み　2.8	凹面布目。一部布目の後ナデたため布目が消えている部分がある。凸面縄目。側面ナデ。	外　灰色(N5/) 内　灰色(N5/) 断　灰白色(N7/)	３㎜以下の砂粒を含む	良好	
24	黒色土器 椀 ５区SD－501	高台径 6.0 高台高 0.7	内黒の黒色土器。ハの字に開く高台部。内外面ナデ。	外　赤橙色(10R6/8) 内　灰色(7.5Y4/1) 断　浅黄色(2.5Y7/4)	精良	良好	
25	須恵器 杯身 ５区SD－501	高台径 10.2 高台高 0.5	ハの字に開く高台部。高台の断面形状は台形である。内外面回転ナデ。	外　灰色(N7/) 内　灰色(7.5Y5/1) 断　灰色(7.5Y5/1)	精良	良好	
26	土師器 中皿 ７区４層	口径　15.2	外反する口縁部。端部は丸い。内外面ともにナデ。	外　浅黄橙色(7.5YR8/4) 内　浅黄橙色(7.5YR8/4) 断　浅黄橙色(7.5YR8/4)	３㎜以下の砂粒を含む	良好	
27	瓦器 椀 ７区４層	口径　14.0	内湾気味に外へ開く。口縁端部内面は沈線のようなくぼみがある。内面ヘラミガキと思われるが磨耗のため不明。外面ナデ後ヘラミガキ。	外　暗灰色(N3/) 内　暗灰色(N3/) 断　灰白色(2.5Y8/1)	２㎜以下の砂粒を含む	良好	
28	瓦器 椀 ７区７層	口径　14.2	内面横方向のヘラミガキ。外面指ナデ後横方向のヘラミガキ。	外　暗灰色(N3/) 内　オリーブ黒色(5Y3/1) 断　灰白書幾(5Y8/1)	精良	良好	
29	土師器 中皿 ７区SP－701	口径　12.2	体部から屈曲し、やや外反気味に開く口縁部。内外面ともにナデ。	外　灰白色(2.5Y8/2) 内　灰白色(2.5Y8/2) 断　灰白色(2.5Y8/2)	３㎜以下の砂粒を含む	良好	
30 四	土師器 小皿 ８区４層	口径　11.0	外反する口縁部。端部は尖り気味に終わる。内外面ともにナデ。	外　浅黄橙色(7.5YR8/4) 内　浅黄橙色(7.5YR8/4) 断　浅黄橙色(7.5YR8/4)	粗	良好	
31 四	青磁 碗 ８区４層	口径　13.0	外反気味に開く口縁部。端部は外側に肥厚させ丸く終わる。内外面ともにナデ。	外　灰白色(10Y7/1) 内　灰白色(10Y7/1) 断　灰白色(5Y8/1)	精良（内外面ともに釉薬を塗る）	良好	
32 五	須恵器 杯蓋 ８区SD－801	口径　17.2	平らな蓋で、口縁端部は尖り気味に終わる。内外面ともに回転ナデ。	外　灰色(N4/) 内　灰色(N4/) 断　青灰色(5B5/1)	密	良好	
33 五	黒色土器 椀 ８区SD－801	高台径 6.8 高台高 0.7	ハの字に開く高台部。高台部端面は丸い。内外面ナデ。内黒の黒色土器。	外　橙色(5YR6/6) 内　黒色(10Y2/1) 断　橙色(5YR7/8)	粗	良好	
34	土師器 小皿 ９区SE－901	口径　8.6	体部から屈曲し口縁部はやや外反ぎみの口縁部である。端部は尖り気味に終わる。口縁部内外面ナデ。	外　浅黄橙色(7.5YR8/4) 内　浅黄橙色(7.5YR8/4) 断　浅黄橙色(7.5YR8/4)	粗	良好	
35	土師器 小皿 ９区SE－901	口径　11.4	口縁部は内湾し、端部は丸く終わる。口縁部内外面ナデ。	外　浅黄橙色(10YR8/3) 内　浅黄橙色(10YR8/3) 断　淡赤橙色(2.5YR7/4)	粗	良好	
36	土師器 小皿 ９区SE－901	口径　11.8	口縁端部を肥厚させる。口縁部内外面ナデ。	外　浅黄橙色(10YR8/3) 内　浅黄橙色(10YR8/3) 断　灰白色(10YR8/2)	粗	良好	
37	土師器 小皿 ９区SE－901	口径　10.4	口縁部は外反し、端部を肥厚させる。口縁部内外面ナデ。	外　浅黄橙色(7.5YR8/3) 内　浅黄橙色(7.5YR8/3) 断　灰白色(7.5YR8/2)	粗	良好	
38	土師器 小皿 ９区SE－901	口径　10.2	口縁部は外反し、端部を肥厚させる。口縁部内外面ナデ。	外　浅黄橙色(7.5YR8/3) 内　浅黄橙色(7.5YR8/4) 断　浅黄橙色(7.5YR8/3)	粗	良好	

遺物番号 図版番号	器　種 出土位置	法量（cm）	調整・技法の特徴	色　調	胎　土	焼成	備　考
39	土師器 皿 9区SE－901	口径　15.0	口縁部はやや外反し、端部は尖り気味に終わる。口縁部内外面ナデ。	外　浅黄橙色(7.5YR8／4) 内　浅黄橙色(7.5YR8/4) 断　浅黄橙色(7.5YR8/4)	粗	良好	
40	土師器 皿 9区SE－901	口径　19.2	口縁部は上外方に直線に伸び、端部は尖り気味に終わる。口縁部内外面ナデ。	外　浅黄橙色(10YR8/3) 内　浅黄橙色(10YR8/3) 断　浅黄橙色(10YR8/3)	粗	良好	
41 五	瓦器 椀 9区SE－901	口径　16.4	内湾気味の体部からやや外反する口縁部。端部は丸く終わる。内外面ともにヘラミガキ。口縁端部内面は沈線状にくぼむ。	外　暗灰色(N3/) 内　暗灰色(N3/) 断　黄灰色(2.5Y4/1)	精良	良好	
42 五	瓦器 椀 9区SE－901	口径　14.8 高台径　6.4 器高　5.4	内湾気味の体部。口縁端部は丸く終わる。口縁部外面はヨコナデ。体部内面ヘラミガキ。外面指なで後ヘラミガキ。高台部はナデ。見込みに平行の暗文を施す。	外　暗灰色～灰色(N3/～N4/) 内　灰色～灰白色(N4/～N8/) 断　灰白色(N8/)	精良	良好	
43 五	瓦器 椀 9区SE－901	高台径　5.7 高台高　0.6	ハの字に開く高台部。外面はナデ。見込みに平行の暗文を施す。	外　灰色(N4/) 内　暗灰色(N3/) 断　灰白色(N8/)	精良	良好	
44	土師器 中皿 10区3層	口径　14.0	口縁部は体部から屈曲し、外反気味に立ち上がる。端部は尖り気味に終わる。口縁部内外面ナデ。	外　橙色(5YR7/6) 内　にぶい橙色(5YR7/4) 断　にぶい橙色(5YR7/4)	粗	良好	
45	土師器 中皿 12区3層	口径　15.4	口縁部は外反気味に開き、端部は尖り気味に終わる。口縁部内外面ナデ。	外　明褐灰色(7.5YR7/2) 内　浅黄橙色(7.5YR8/3) 断　灰白色(7.5YR8/2)	粗	良好	
46	土師器 羽釜 12区3層	鍔径　36.8	ほぼ水平方向に付く鍔。端部は丸く終わる。内面指ナデの痕跡が残る。外面ナデ。	外　明赤灰色(2.5YR5/6) 内　灰褐色(7.5YR4/2) 断　明赤褐色(5YR5/6)	粗	良好	
47	瓦質 三足釜 12区3層	口径　19.2	内湾して伸び体部から口縁部に至る。やや丸みのある断面台形の鍔が付く。体部外面ナデで、指なでの痕跡が残る。内面、鍔部はヨコナデ。	外　灰色(N4/) 内　灰色(N4/) 断　灰白色(2.5Y7/1)	密	良好	
48 五	土師器 小皿 12区 SK－1201	口径　10.2	口縁部は外反し、端部は内側に若干肥厚させる。口縁部内外面ナデ。	外　灰白色(2.5Y8/2) 内　浅黄橙色(10YR8/3) 断　灰白色(2.5Y8/2)	精良	良好	
49 五	土師器 小皿 12区 SK－1201	口径　11.0	口縁部は外反し、端部は内側に若干肥厚させる。口縁部内外面ナデ。	外　浅黄橙色(7.5YR8/3) 内　浅黄橙色(7.5YR8/3) 断　灰白色(7.5Y8/2)	精良	良好	
50 五	土師器 杯 12区 SK－1201	高台径　4.8 高台高　0.6	高台部の断面は3角形。内外面ナデ。	外　橙色(5YR6/6) 内　橙色(5YR6/6) 断　橙色(2.5YR6/8)	2㎜以下の砂粒を含む	良好	
51	瓦器 椀 13区2層	口径　14.0	内湾する体部。口縁部はやや外反し、端部は尖り気味に終わる。内外面は粗雑なヘラミガキ。	外　暗灰色(N3/) 内　暗灰色(N3/) 断　灰白色(2.5Y8/1)	精良	良好	

第３章　まとめ

今回の調査では、ほぼ調査地の全域で平安時代の包含層を検出した。また、４区や12区では小穴を検出し、さらに９区では井戸を検出していることから当時の集落が存在していた可能性が考えられる。

今回の調査地での２区と10区では平安時代後期以前に起こったと推定される地震の痕跡（噴砂）を検出した。同じ頃に起きたと推定される地震の痕跡（噴砂）は、今回の調査地の北約1.1kmでの久宝寺遺跡内で行った研究会第23次調査地で検出している。このことから判断すると、今回の調査地周辺では、少なくとも平安時代後期以前に数回は地震があったと推測できる。

註

註１

・岡田清一　1993『太子堂遺跡第１次調査・第２次調査報告書』財団法人八尾市文化財調査研究会報告36

・坪田真一　1993「太子堂遺跡跡（第４次調査）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』　跡部　小阪合　中田　美園　東郷　久宝寺　成法寺　竹渕　植松　太子堂　東弓削　田井中』財団法人八尾市文化財調査研究会報告39

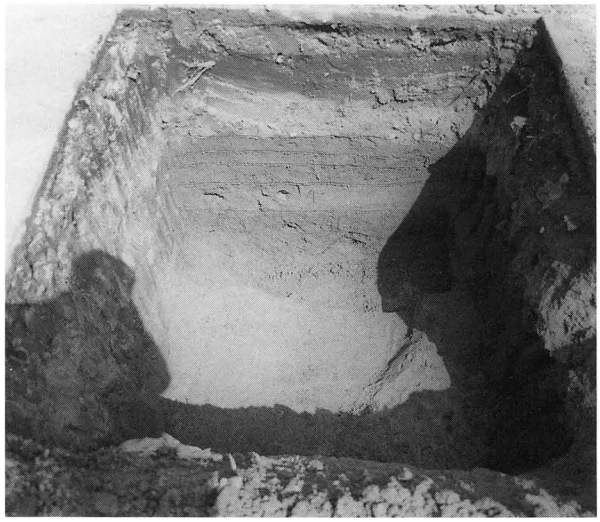
・成海佳子・藤田道子　1997「Ⅶ太子堂遺跡跡（第３次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告58』財団法人八尾市文化財調査研究会報告

・成海佳子　1997「Ⅷ太子堂遺跡跡（第６次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告58』財団法人八尾市文化財調査研究会報告

図　　版

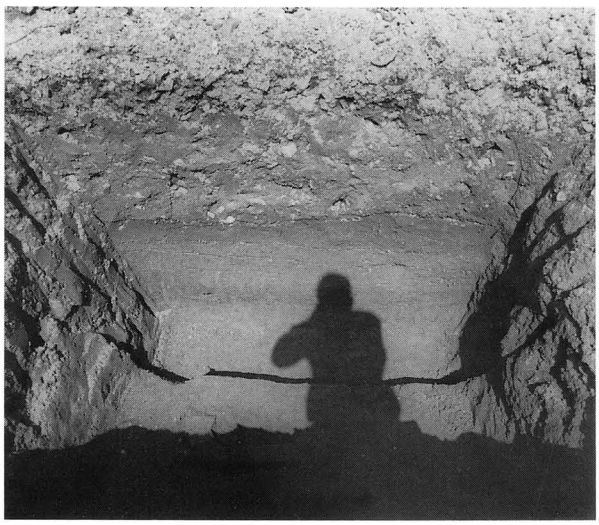
1区全景（南から）

2区全景（南から）



3区調査状況（南から）

3区全景（南から）



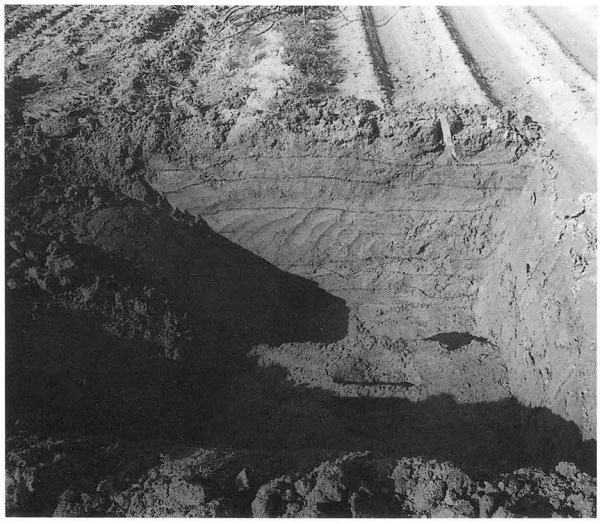
4区全景（南から）

5区全景（南から）

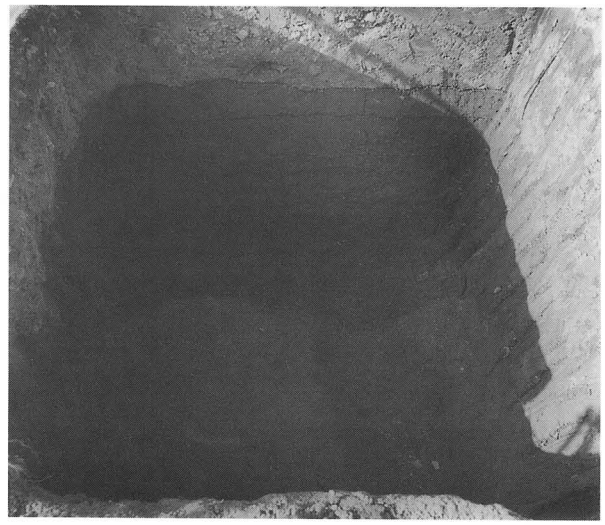
図版二

調査地周辺および６区掘削状況（南から）

６区全景（西から）

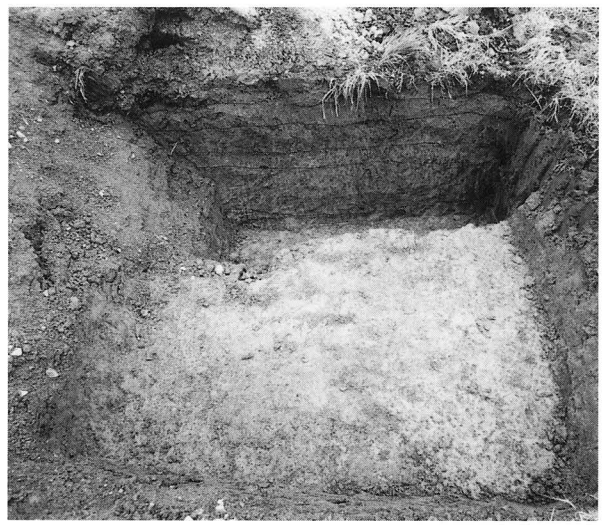


７区全景（南から）



８区全景（南から）

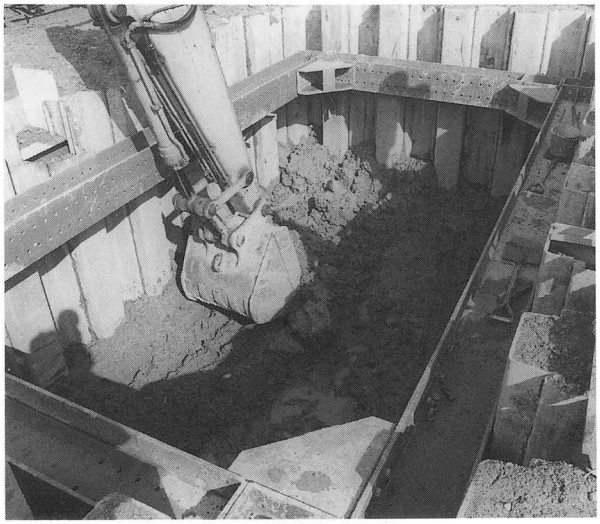
９区全景およびＳＥ－901内遺物出土状況（南から）



10区全景（南から）

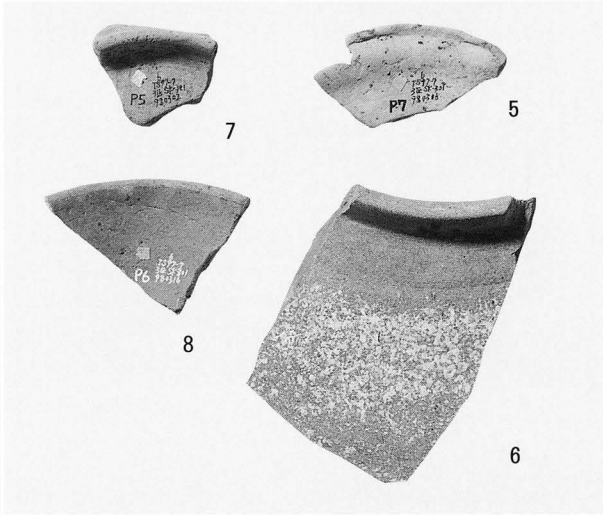
11区全景（南から）

12区全景（南から）

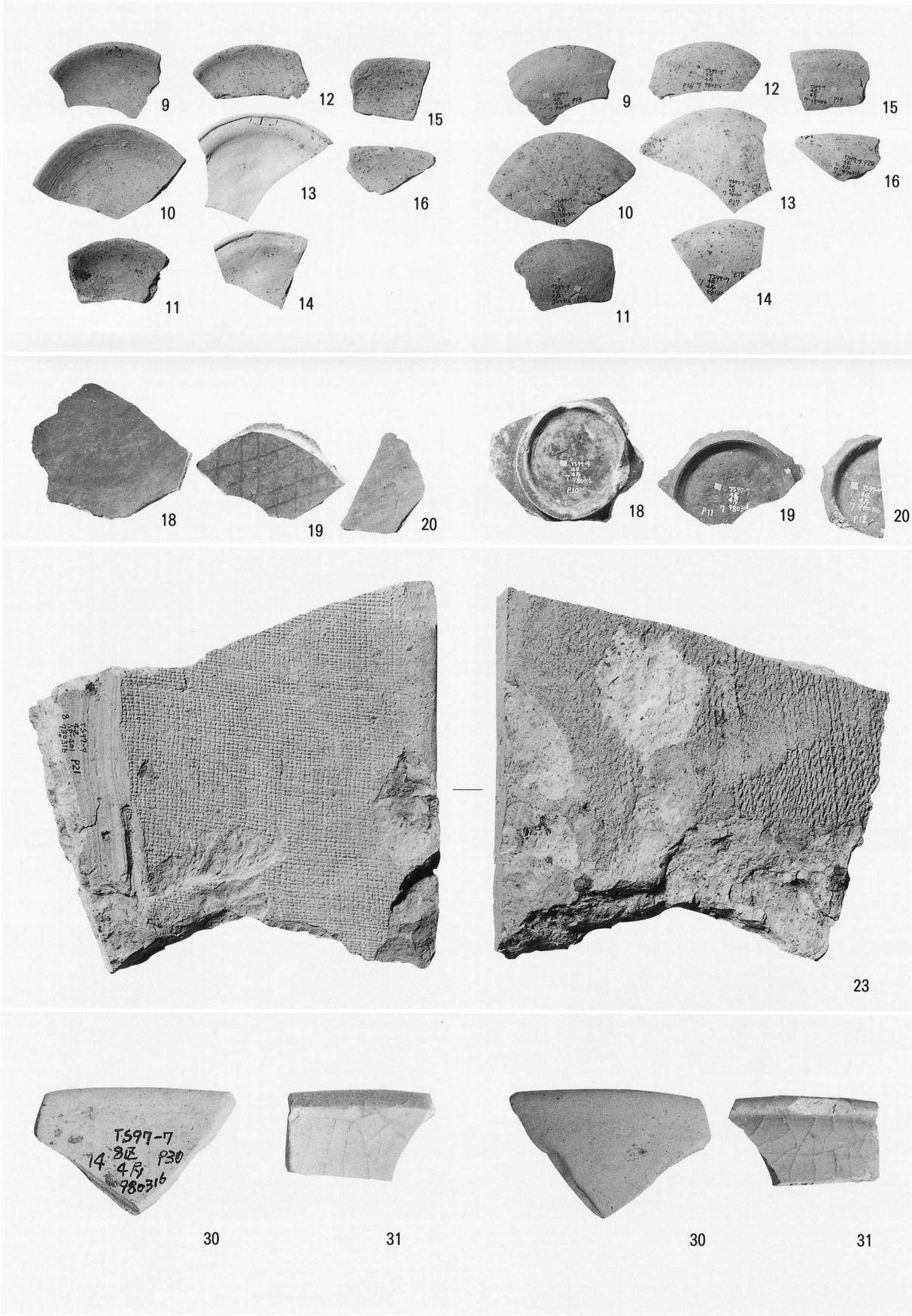


13区全景（南から）

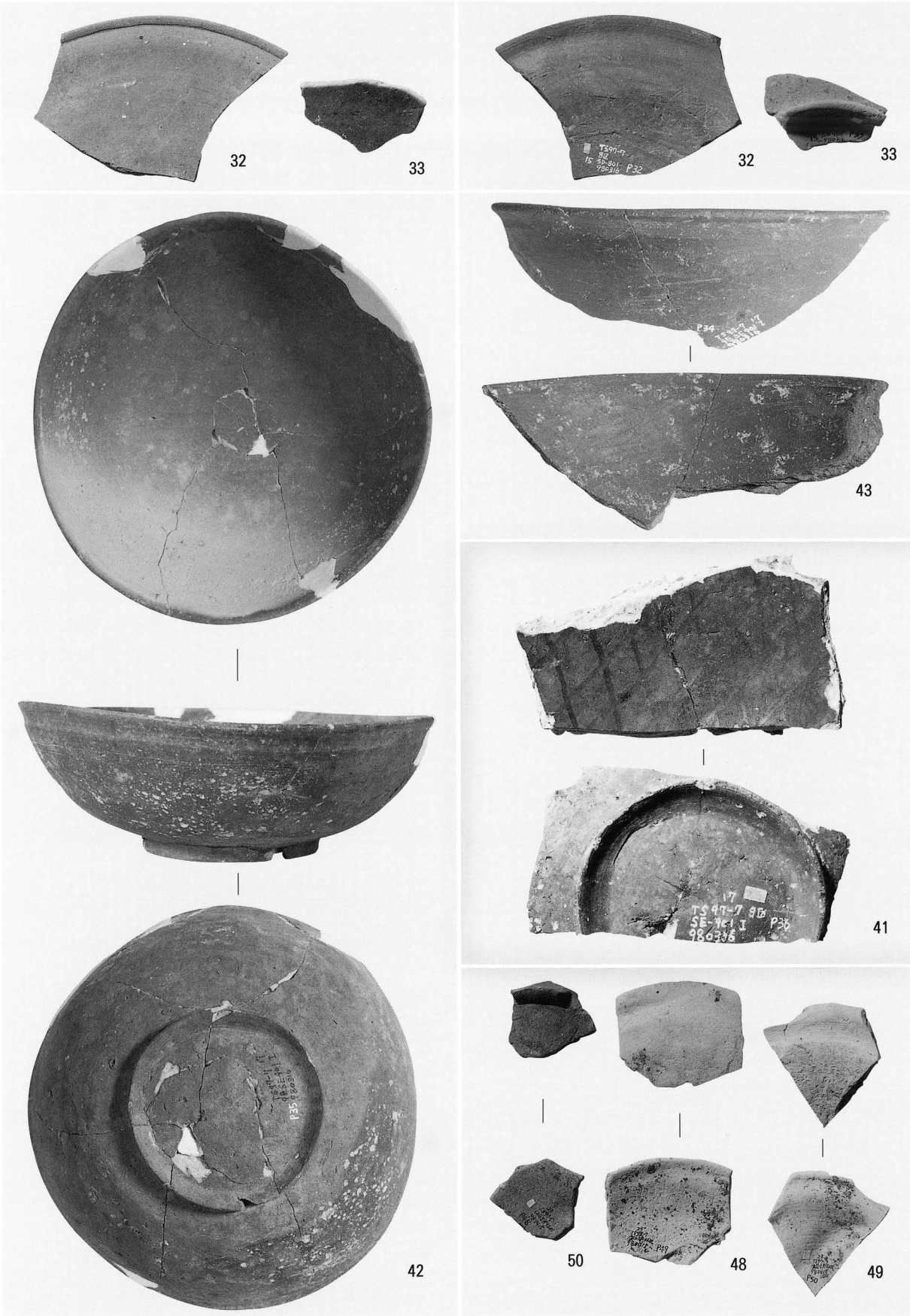
13区下層掘削状況（南東から）



2区1層（3）3区ＳＫ－301（5～8）出土遺物



4区4層（9～16・18～20）4区ＳＰ－401（21）8区4層（30・31）出土遺物



8区ＳＤ－801（32・33）9区ＳＥ－901（41～43）12区ＳＫ－1201（48～50）出土遺物

Ⅵ　太子堂遺跡第８次調査（ＴＳ98－８）

例　　言

1．本書は大阪府八尾市太子堂１丁目地内で実施した道路築造工事に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する太子堂遺跡第８次調査（ＴＳ98－８）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第564号　平成11年１月５日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成10年１月11日から２月５日（実働19日）にかけて、高萩千秋を担当者として実施した。調査面積は384㎡を測る。なお、調査においては中西明美・西岡千恵子・市森千恵子・河本　清が参加した。

1．本書に関わる業務は、遺物実測・図面レイアウト・トレース－田島和恵・沢村妙子が行った。

1．第７次調査地と第８次調査地は近接して調査を行っているため、調査地周辺図は第７次調査報告に記載し、第８次調査報告では省略した。

1．本書の執筆・編集は高萩が行った。

本　文　目　次

第１章　調査概要……75
　第１節　調査の方法と経過……75
　第２節　基本層序……75
　第３節　検出遺構と出土遺物……78
　第４節　出土遺物観察表……89
第２章　まとめ……93

挿　図　目　次

第１図　調査区位置図及び区割り図……75
第２図　調査地断面柱状図……76
第３図　調査区遺構平面図……77
第４図　ＳＥ－２平断面図……78
第５図　１区Ａ～Ｃ平断面図……80
第６図　１区ＳＥ－２・ＳＤ－５・ＳＤ－10・ＳＯ－１出土遺物実測図……81
第７図　１区遺構に伴わない出土遺物実測図……81
第８図　２区Ａ～Ｃ平断面図……83
第９図　２区ＳＤ－21・25・28・30出土遺物実測図……84

第10図　２区遺構に伴わない出土遺物実測図……84
第11図　１Ｊ区断面図……85
第12図　３区遺構に伴わない出土遺物実測図……86
第13図　４区ＳＤ－29・30平断面図……87
第14図　ＳＤ－29出土遺物実測図……87
第15図　４区遺構に伴わない出土遺物実測図……88

表　目　次

第１表　１区溝一覧表……79
第２表　２区小穴一覧表……82
第３表　２区溝一覧表……83

図　版　目　次

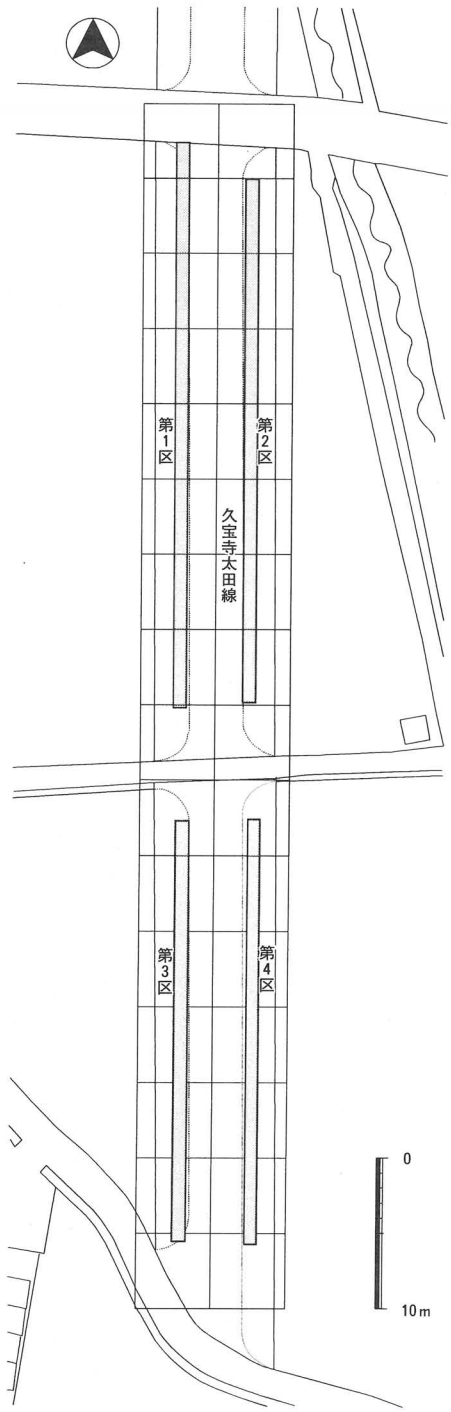
図版　一　１区全景（南から）　１区ＳＯ－１（南から）　１区ＳＥ－１（東から）
１区ＳＥ－２（東から）　１区ＳＫ－２（東から）　１区ＳＤ－２・３（南から）
１区ＳＤ－６（東から）　１区ＳＤ－５（南から）
図版　二　１区ＳＤ－１（東から）　１区ＳＤ－11（東から）　２区全景（南から）
２区北部全景（北から）　２区ＳＤ－18（西から）　２区ＳＫ－３（東から）
２区ＳＰ－３（西から）　２区ＳＰ－３断面（西から）
図版　三　２区ＳＤ－16・17（東から）　２区ＳＤ－18（東から）　２区ＳＤ－25（南から）
２区ＳＤ－20・21（東から）　２区ＳＤ－26（東から）　２区ＳＤ－27（北から）
３区全景（北から）　３区全景（南から）
図版　四　４区全景（北から）　４区北部（北から）　４区ＳＤ－30（南から）
４区ＳＤ－29（南から）
図版　五　出土遺物
４　ＳＤ－３　５　ＳＯ－１
７・９・10・13　１区遺構に伴わない出土遺物
22　ＳＤ－27
25・26・29・30・31　１区遺構に伴わない出土遺物
35　２区遺構に伴わない出土遺物
図版　六　38・44　４区ＳＤ－29
46～52・54・56・59・61・63　４区遺構に伴わない出土遺物

第１章　調査概要

第１節　調査の方法と経過

今回の調査は道路建設（久宝寺太田線の一部）工事に伴うものである。平成10年12月25日、八尾市教育委員会より、「現在、太子堂１丁目地内で道路建設の工事を中断させている。緊急に発掘調査を実施してほしい」との連絡があった。道路予定地ではすでに道路の基礎部分が地盤改良され（遺跡埋没深度上面まで）、バラスが敷詰められている。道路境界の両端側はコンクリート壁、その内側沿いでは下水道管路が埋設されており、市教委では道路敷と下水管路埋設の間を対象に調査区を設定した発掘調査を指示した。当調査研究会ではその指示書をもとに道路課と協議を行い、平成11年１月11日から発掘調査を実施することになった。調査地では現存する３本の道路が道路建設予定地を横断している。既設の道路下水道の管路部分と道路敷との間に上面幅1.5ｍ前後の南北方向のトレンチを４本設定した（第２図）。それぞれの長さは第１区－約75ｍ、第２区－約70ｍ、第３区－約56ｍ、第４区－約56ｍを測る。掘削の方法は市教委の遺構確認調査の結果および全掲第７次調査（ＴＳ97－７）の調査成果を参考に、現地表（T.P.＋9.6ｍ）下約0.5～1.2ｍまでを機械掘削、以下0.2～0.5ｍを人力掘削として調査した。

地区割りについては、道路センターの№８～№15を基準点とし、調査区範囲を包括できる南北200ｍ、東西20ｍに10ｍ角の方眼を作成した。区名は北西角より南北軸は東へ１～２、東西軸は南へＡ～Ｐを付称（凡例１Ａ区）して遺構や遺物の取り上げなどの記録保存を行った。



第１図　調査区位置図および地区割り図

第２節　基本層序

調査区は南北に長いトレンチであった。それらの地層で普遍的にみられる土層を抽出して基本層序とした。以下、各層について記す。

第１層　盛土（層厚20～60㎝）。上面は道路工事による土盛りで、マサ土やバラスなどである。道路中心部は土壌改良により堅くしまっている。現地表面は（T.P.＋）9.6ｍ前後を測る。

第２層　耕土（層厚０～15㎝）。直前までの耕作土である。一部では削平されている部分がみられる。

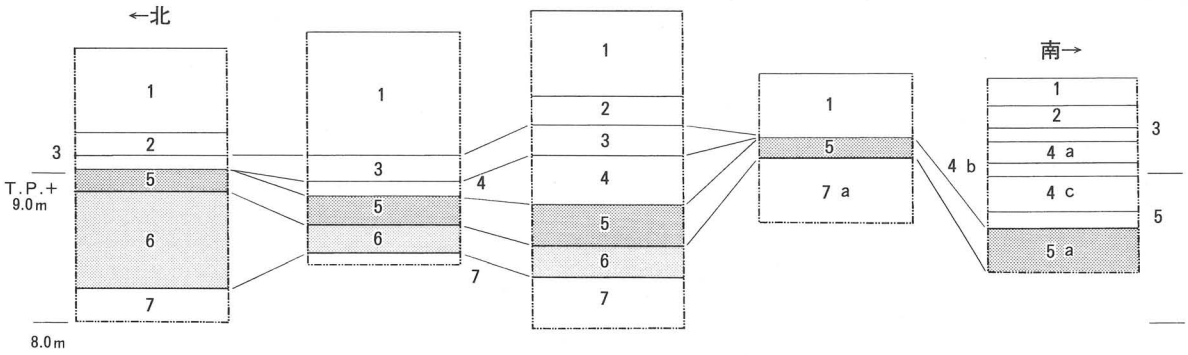
第３層　淡灰茶色粘質シルト（層厚０～20㎝）。耕作土の床土である。

第４層　淡灰茶色粗砂混シルト質土（層厚20～40㎝）。平安時代末～鎌倉時代の土層と考えられる。よくしまっており、整地層と思われる。第３区・第４区の南部で第4a 層乳橙灰色シルト混微砂・第4b 層淡灰褐色粘質シルト・第4c 層灰褐色粘質土に分かれる。

第５層　暗褐灰色礫混シルト質土（層厚10～20㎝）。第5a 層淡灰茶色細砂は調査区南部の水田土層上面付近に堆積する。

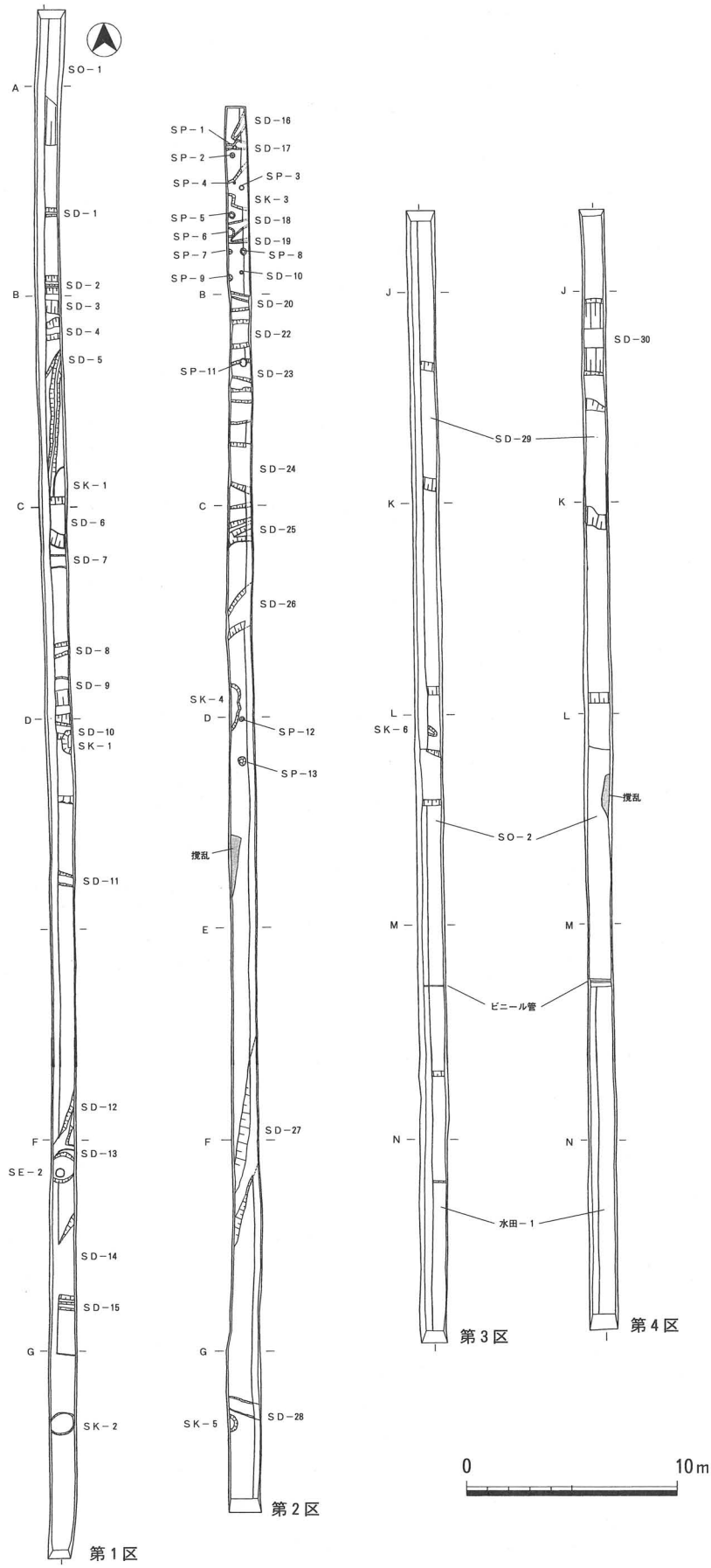
第６層　乳緑灰色～淡黄灰色シルト（層厚30㎝）。褐色の斑点が多数みられる。奈良時代～平安時代前期の遺物を少量含む。

第７層　黄茶灰色粘質シルト～淡灰茶色シルト混細砂（層厚30㎝以上）。奈良時代～平安時代前期のベース面と思われる。第7a 層（砂礫を含む細砂）は調査区中央付近にみられる。



1	盛土	5	暗褐灰色礫混じりシルト質土
2	耕土	5 a	５より砂礫が多い淡灰茶色細砂
3	床土（淡灰茶色粘質シルト）	6	暗灰色シルト質土
4	淡灰茶色粗砂混シルト質土	7	淡緑灰色～淡黄灰色シルト～粗砂
4 a	乳橙灰色シルト混微砂	7 a	砂礫を含む細砂
4 b	淡灰褐色粘質シルト		
4 c	灰褐色粘質土		

第２図　調査地断面模式図



第３図　調査区遺構平面図

第３節　検出遺構と出土遺物

調査の結果、現地表下約0.5～1.5ｍ（標高8.5～9.1ｍ）の第４～６層で奈良時代～鎌倉時代の遺構・遺物を検出した。検出遺構は第１区－井戸２基（ＳＥ－１・ＳＥ－２）、土坑１基（ＳＫ－１・ＳＫ－２）、溝15条（ＳＤ－１～ＳＤ－15）、落込み１箇所（ＳＯ－１）、第２区－土坑３基（ＳＫ－３～ＳＫ－５）、小穴14個（ＳＰ－１～ＳＰ－13）、溝13条（ＳＤ－16～ＳＤ－28）、第３区－溝１条（ＳＤ－29）、水田遺構１面（水田１）、第４区－溝２条（ＳＤ－30）である。遺物は遺構および包含層内からコンテナにして約８箱分を出土した。以下、検出した遺構について記す。

・第１区

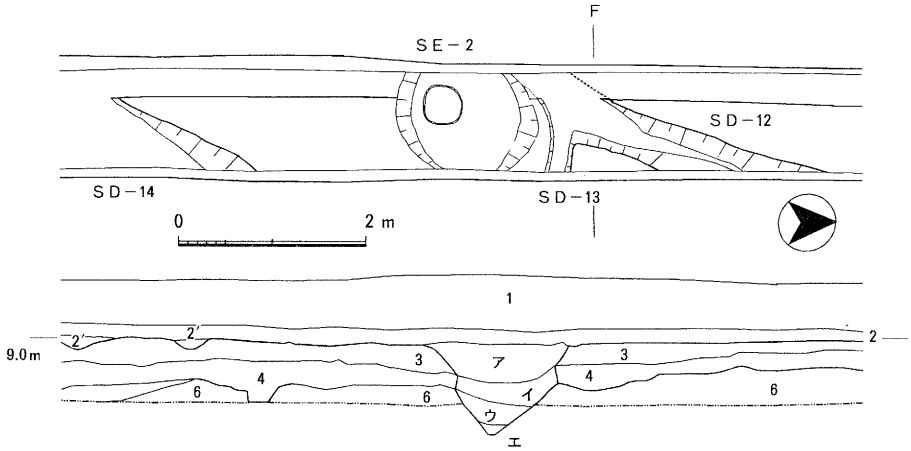
井戸（ＳＥ）

ＳＥ－１

調査区中央付近（１Ｅ区）の東部で検出した。掘形の平面形状は検出部で半円形を呈し、径1.2ｍ・深さ0.35ｍを測り、中央付近で方形に組み合せていると思われる井戸側の南半部を検出した。井戸側は板材（幅10㎝・長さ60㎝・厚み0.8㎝）１段で、一辺（西辺）0.6ｍを測る。埋土は掘形が暗褐色粗砂混粘土、明黄褐色細砂で、井戸側（方形の板枠）内は、暗灰色細砂混粘土である。内部（掘形）からは土師器の小片をごく少量出土しているが、時期を特定する遺物はない。掘り方の切り込まれている層位から考えて平安時代末～鎌倉時代にかけてのものであろう。

ＳＥ－２

調査区南部（１Ｇ区）の北部で検出した。掘形の平面形状は円形で、径1.2ｍ・深さ0.85ｍを測る。南西よりの底付近で井戸側に使用していた曲物（径35㎝・高さ10㎝・厚み0.5㎝）１段を検出した。井戸側の曲物は３～４段を積み重ねていたものと思われるが、井戸廃棄時に上段部の曲物を抜き取ったものと考えられる。埋土は掘形が暗褐色粗砂混粘土、明黄褐色細砂で、井戸側（曲物）内は、暗灰色細砂混粘土である。内部（掘形）からは13世紀後半頃の瓦器椀、土師器小皿などの小片を出土している。図示できたものは井戸内出土の鉢？（１）１点である。鉢は口縁外面に断面台形の鍔が巡る。



1　盛土
2　耕土
2′　２で砂質土
3　床土（淡灰茶色粘質シルト）
4　淡灰茶色粗砂混シルト質土
5　暗褐灰色礫混じりシルト質土
6　暗灰色シルト質土
ア　灰褐色細砂混粘質土
イ　暗灰褐色砂混粘質土
ウ　暗青灰色粘土
エ　暗青灰色粘土と淡黄灰色細砂のブロック

第４図　ＳＥ－２平断面図

土坑（ＳＫ）

ＳＫ－１

１Ｃ区の南で検出した。径1.2ｍで平面ほぼ円形を呈する。深さは15㎝前後で比較的浅いものである。埋土は暗灰褐色砂質土である。遺物は平安時代初頭ごろの土師器の小片をごく少量出土した。

ＳＫ－２

１Ｈ区で検出した。径1.2ｍで平面ほぼ円形を呈し、深さは15㎝前後を測る。埋土は焼土や炭を多く含む暗灰色砂質土である。遺物は平安時代後期以降の土師器・瓦器と西端で用途不明の鉄製品１点を検出した。

溝（ＳＤ）

ＳＤ－１～ＳＤ－15

15条を検出した。南北方向に伸びる溝２条（ＳＤ－５・ＳＤ－12）以外はほぼ東西方向の溝である。遺物は土師器の小片がごく少量出土している。図示できたものはＳＤ－10内から平安時代初頭の土師器の鉢（２）、ＳＤ－３内から平安時代前期以降の土師器の杯（３）と小皿（４）を２点である。２は椀状の体部で、内面はヘラミガキを施している。各溝については下表に示した。

第１表　第１区溝一覧表　　**※単位はｍ**

遺構番号	区　名	方 向	幅	深さ	断面形	堆　積　土	備　　考
ＳＤ－１	１Ｂ	東－西	0.4～0.5	0.30	逆台形	乳褐灰色シルト	
ＳＤ－２	１Ｂ	東－西	0.5	0.30	〃	灰褐色微砂混シルト	
ＳＤ－３	１Ｃ	東－西	1.2～1.3	0.30	〃	〃	
ＳＤ－４	１Ｃ	東－西	0.8～1.0	0.30	〃	〃	
ＳＤ－５	１Ｃ	南－北	0.3～0.5	0.50	〃	〃	ＳＤ－６に切られる
ＳＤ－６	１Ｃ・Ｄ	東－西	2.2～2.4	0.40	〃	〃	中世
ＳＤ－７	１Ｄ	東－西	0.6	0.15	〃	〃	
ＳＤ－８	１Ｄ	東－西	0.6～0.7	0.25	〃	〃	
ＳＤ－９	１ＤＥ	東－西	1.6～1.8	0.25	〃	〃	
ＳＤ－10	１Ｅ	東－西	0.8	0.30	〃	〃	ＳＥ－１に切られる
ＳＤ－11	１Ｅ	東－西	0.5～0.6	0.20	〃	〃	
ＳＤ－12	１Ｆ・Ｇ	南－北	0.5	0.20	〃	暗灰色粘質土	ＳＤ－13と合流
ＳＤ－13	１Ｇ	東－西	0.12	0.20	〃	〃	ＳＤ－12と合流
ＳＤ－14	１Ｇ	東－西	2.0～4.0	0.20	〃	淡茶灰色砂礫混シルト質土	
ＳＤ－15	１Ｇ	東－西	0.5	0.20	〃	暗緑灰色砂礫混シルト質土	中世

落込み（ＳＯ）

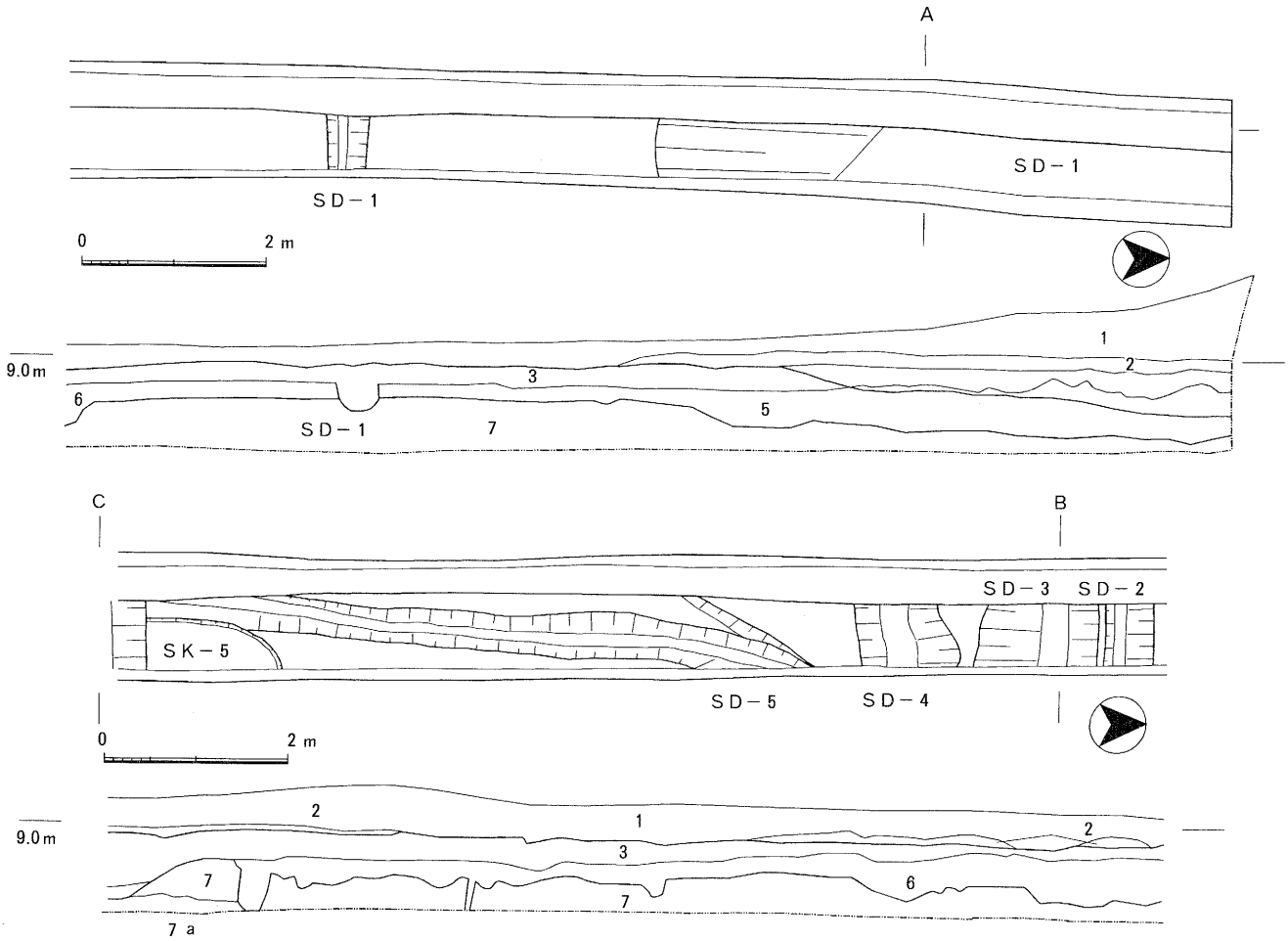
ＳＯ－１

北部（１Ａ・Ｂ区）で検出した。北側へ行くにつれ低くなっている。東西ともに調査区外に至る。検出長６ｍ以上、深さは深い所で約0.4ｍを測る。堆積土は暗緑灰色砂礫混シルト質土で古墳～平安時代前期の遺物を含む層である。出土量はごく少量で、図示できたものは２点（５・６）である（第７図）。（５）は外反する口縁部の特徴をもつ７世紀代の土師器の羽釜、（６）は古墳時代前期に比定される土師器の甕で、讃岐地方の特徴をもつ。

遺構に伴わない出土遺物

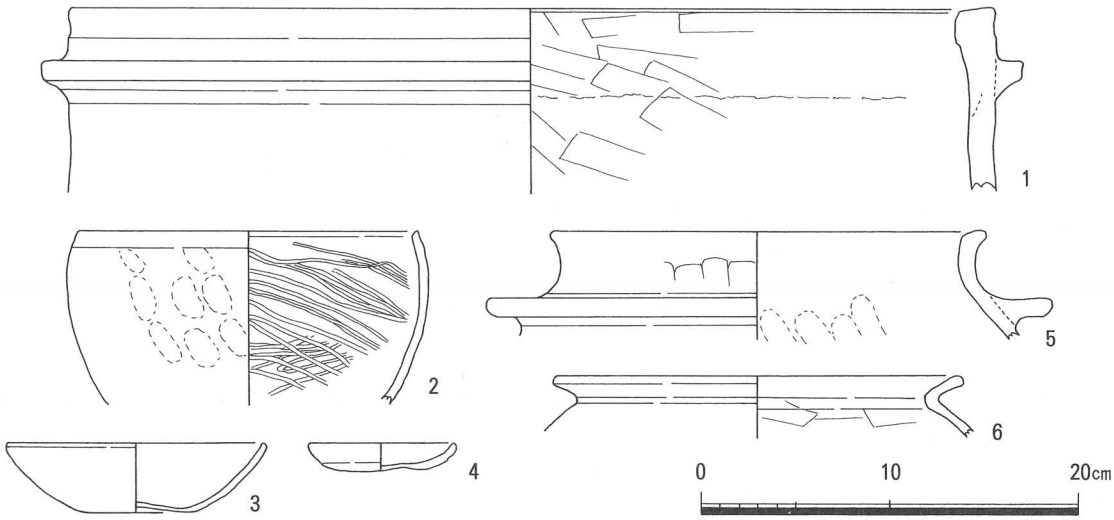
第５・６層で古墳時代前期～平安時代にかけての土器類を少量出土している。図示できたもの

は9点（7～15）である（第8図）。（7）は円筒埴輪の破片である。しっかりとした断面台形のダカをもち、外面にはヨコハケが施されている。特徴から古墳時代中期前半ごろと思われる。（8）は須恵器の甕で、上外方へ直線的に伸びる口縁に面をもつ端部で、体部外面には平行タタキとカキ目か施されている。（9～12）は古墳時代後期の須恵器の甕である。（9）は体部片で外面には格子状のタタキがみられる。（10）は口縁部片でつまみ出しの端部に平らな面をもつ。（11）は外反する口縁で、端部はつまみ上げている。（12）は直線的に外方する口縁にやや肥厚気味の端部をもつものである。（13～15）は7～8世紀のもので、（13）は底部にしっかりとした断面逆台形の高台がつく須恵器の杯。（14）は断面皿状の比較的浅い土師器の杯である。（15）は移動式竈の焚き口の一部分で胎土内の砂粒の鉱物からみて生駒西麓産のものであろう。

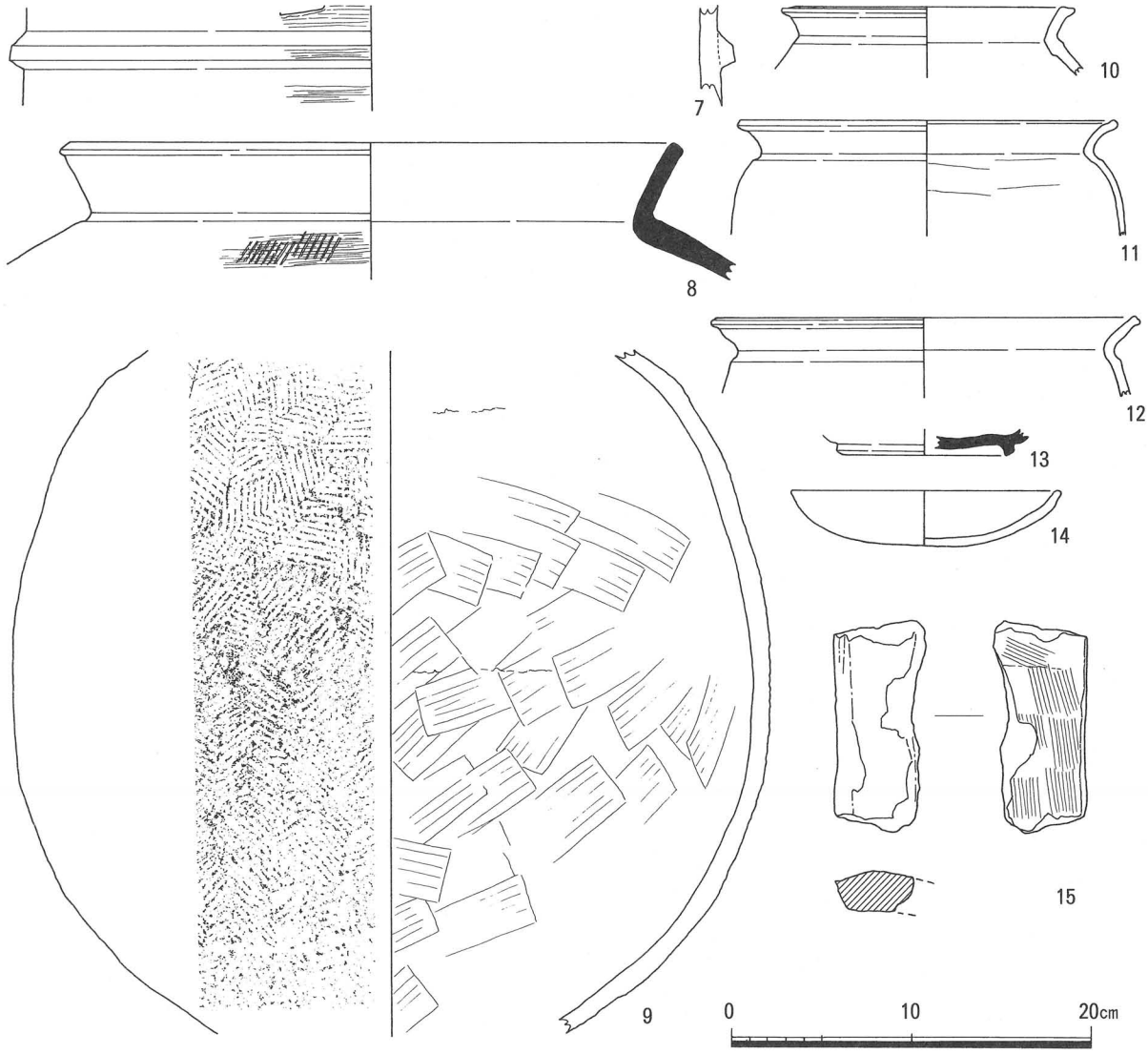


1　盛土
2　耕土
3　床土（淡灰茶色粘質シルト）
4　淡灰茶色粗砂混シルト質土
5　暗褐灰色礫混じりシルト質土
6　暗灰色シルト質土
7　淡緑灰色～淡黄灰色シルト粗砂

第5図　1区A～C平断面図



第６図　１区ＳＥ－１・ＳＤ－５・ＳＤ－10・ＳＯ－１出土遺物実測図



第７図　１区遺構に伴わない出土遺物実測図

・第２区

土坑（ＳＫ）

ＳＫ－３

２Ｂ区で検出した。南北2.0ｍ、東西1.0ｍ以上で東に広がりをもって調査区外に至る。深さは15㎝前後で比較的浅いものである。埋土は焼土や炭を含む暗灰色砂質土で、基底面で２個の小穴（ＳＰ－２・３）を検出しており、そのうちのＳＰ－３の埋土には多量の焼土・炭が含まれていた。遺物は土師器・須恵器の小片がごく少量出土した。

ＳＫ－４

２Ｃ・Ｄ区の西壁付近で検出した。南北2.25ｍで、西部の調査区外に至る。深さは0.1ｍ前後で比較的浅いものである。埋土は暗灰色砂質土である。遺物は土師器の小片がごく少量出土した。

ＳＫ－５

２Ｈの西壁付近で検出した。南北0.8ｍで、西部の調査区外に至る。深さは12㎝前後である。埋土は炭を含む暗灰色砂礫混砂質土である。遺物は土師器の小片がごく少量出土した。

小穴（ＳＰ）

ＳＰ－１～ＳＰ－13

第２区から14個を検出した。その大部分は北部（２Ｂ・Ｃ区）からである。平面形状はほぼ円形を呈するもので径0.15～0.4ｍを測る。深さは８～15㎝で比較的浅いものが多いが、中には32㎝前後の深いものもあった。特筆すべきものとしてはＳＫ－３内より検出したＳＰ－３は焼土や炭を多く含む埋土である。出土遺物では一部の小穴の埋土に土師器の小片がごく少量含まれる程度である。各小穴については下表に示した。

第２表　第２区小穴一覧表　　※単位はｍ

遺構番号	区名	径	深さ	平面形	断面形	堆積土	備考
ＳＰ－１	２ｂ	0.18	0.15	円形	逆台形	暗灰褐色シルト質土	
ＳＰ－２	２Ｂ	0.22	0.15	〃	〃	〃	
ＳＰ－３	２Ｂ	0.10	0.08	〃	〃	〃	ＳＫ－３底より
ＳＰ－４	２Ｂ	0.23	0.25	〃	〃	〃	ＳＫ－３底より
ＳＰ－５	２Ｂ	0.30	0.10	〃	〃	〃	
ＳＰ－６	２Ｂ	0.49	0.12	〃	〃	〃	ＳＤ－18底より
ＳＰ－７	２Ｂ	0.26	0.22	－	〃	〃	
ＳＰ－８	２Ｂ	0.30	0.19	〃	〃	〃	
ＳＰ－９	２Ｂ	0.38	0.32	－	〃	〃	
ＳＰ－10	２Ｂ	0.16	0.20	〃	〃	〃	
ＳＰ－11	２Ｃ	0.38	0.10	〃	〃	〃	ＳＤ－22底より
ＳＰ－12	２Ｅ	0.26	0.08	〃	〃	〃	
ＳＰ－13	２Ｅ	0.38	0.14	〃	〃	〃	

溝（ＳＤ）

ＳＤ－16～ＳＰ－28

12条を検出した。調査区の北部で検出した東西方向に伸びる溝である。東西ともに調査区外に至る。幅約0.4～0.5ｍ、深さ約0.1ｍを測る。堆積土は灰褐色粘質シルトで、断面皿状形を呈する。遺物は平安時代末～鎌倉時代のものがごく少量出土した。図示できたものは７点（16～22）であ

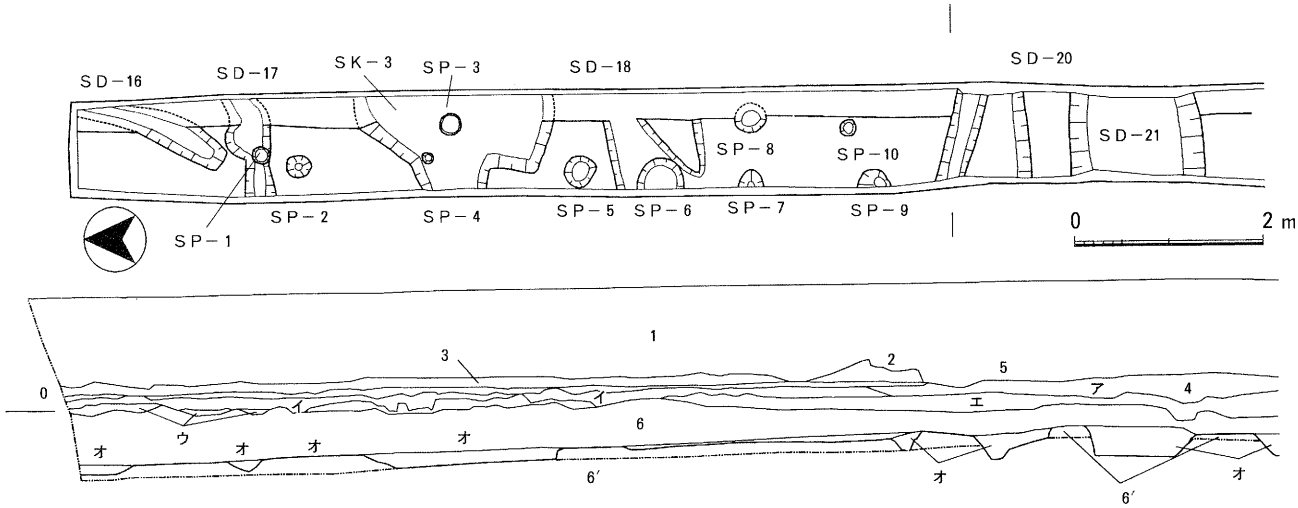
る。ＳＤ－21から土師器の甕（16）、ＳＤ－25から土師器の甕（17）・平瓦（20）、ＳＤ－28から土師器の小皿（18）、瓦器の椀（19）、ＳＤ－27から土師器の甕（21）・瓦質の羽釜（22）が出土した。

第３表　第２区溝一覧表　　※単位はｍ

遺構番号	区　名	方 向	幅	深さ	断面形	堆　積　土	備　　考
ＳＤ－16	２Ｂ	東－西	0.40	0.15	逆台形	暗黄灰色粘質シルト	
ＳＤ－17	２Ｂ	東－西	0.20～0.45	0.12	〃	〃	
ＳＤ－18	２Ｂ	東－西	0.40～0.80	0.20	〃	〃	ＳＤ－18と合流
ＳＤ－19	２Ｂ	東－西	0.20	0.20	〃	〃	
ＳＤ－20	２Ｂ	東－西	0.30	0.20	〃	〃	
ＳＤ－21	２Ｂ	東－西	1.40	0.30	〃	〃	
ＳＤ－22	２Ｃ	東－西	0.70～1.10	0.20	〃	〃	
ＳＤ－23	２Ｃ	東－西	0.70	0.30	〃	〃	
ＳＤ－24	２Ｃ	東－西	2.00～2.40	0.35	〃	〃	
ＳＤ－25	２Ｄ	東－西	1.80～2.00	0.30	〃	暗灰色粘質シルト	
ＳＤ－26	２Ｄ	東－西	1.40～2.00	0.25	〃	〃	
ＳＤ－27	２Ｆ・Ｇ	東－西	1.40～2.00	0.25	〃	〃	
ＳＤ－28	２Ｈ	東－西	1.40～2.00	0.25	〃	〃	

遺構に伴わない出土遺物

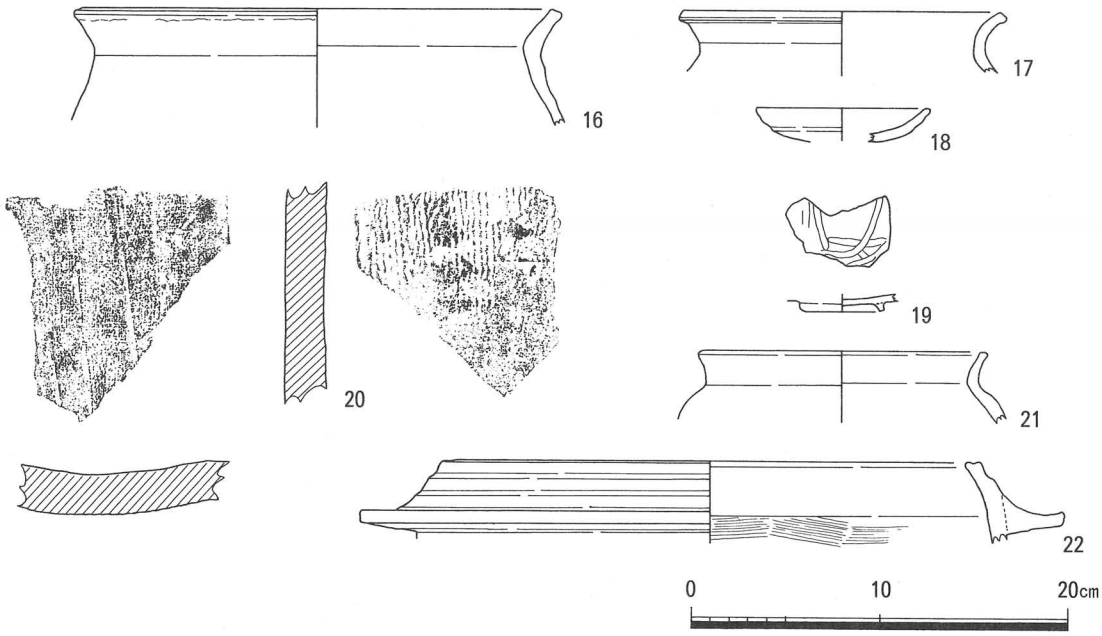
第６層内で古墳時代中期～鎌倉時代にかけての土器類を少量出土している。図示できたものは９点（23～31）である（第11図）。（23）は土師器の皿である。口縁端部内面に沈線があり、その特徴から奈良時代前半ごろのものと思われる。（24）は土師器の杯で、（23）より新しい時期のものであろう。（25～27）は平安時代末～鎌倉時代の土師器の小皿である。（28・29）は瓦器の椀である。（28）はやや深めの椀で底部に断面逆三角形の高台が付き、内面の見込みに斜格子の暗文



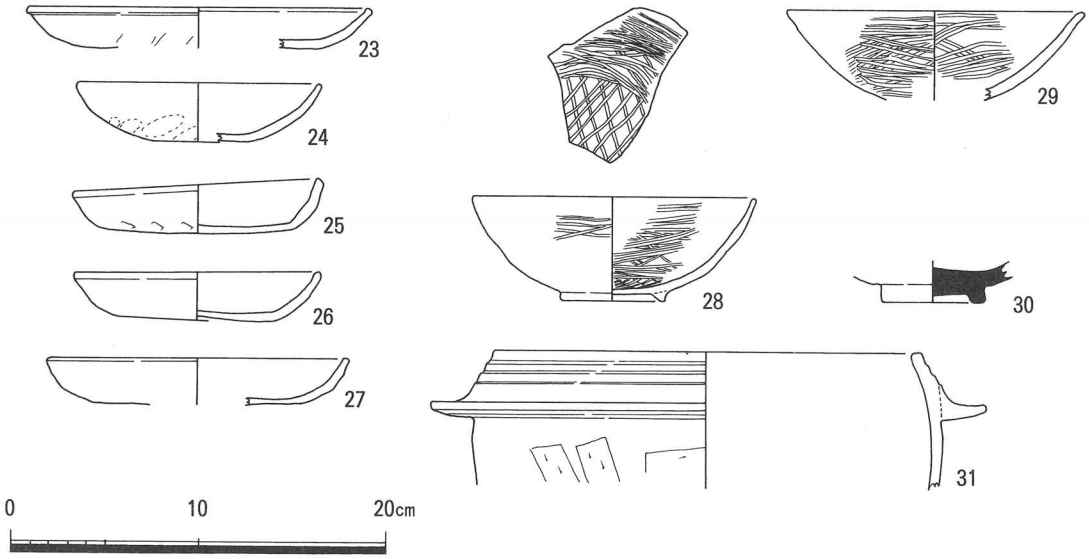
1　盛土
2　耕土
3　床土（淡灰茶色粘質シルト）
4　淡灰茶色粗砂混シルト質土
5　暗褐灰色礫混じりシルト質土
6　暗灰色シルト質土
6′　淡灰色シルト混細砂
7　淡緑灰色～淡黄灰色シルト～粗砂
ア　灰黄褐色礫混じりシルト質土
イ　灰黄褐色礫混じりシルト質土
ウ　橙灰色シルト
エ　淡黄褐灰色シルト
オ　暗褐色粘質シルト
カ　暗黄灰色粘質シルト

第８図　２区Ａ～Ｃ平断面図

が施されている。これらは和泉型と言われる特徴を持つ平安時代末の瓦器椀であろう。（30）は陶磁器の底部の破片で断面台形の高台が付く。内面に花柄文様を施している。（31）は瓦質の羽釜である。（30・31）は室町時代前半に比定されるものである。



第９図　２区ＳＤ－21・ＳＤ－25・ＳＤ－28・ＳＤ－30出土遺物実測図



第10図　２区　遺構に伴わない出土遺物実測図

・第３区

土坑（ＳＫ）

ＳＫ－６

１Ｍ区で検出した。南北0.5ｍで平面楕円形を呈する。深さは0.3ｍ前後である。埋土は淡灰色細砂である。遺物はなかった。

溝（ＳＤ）

ＳＤ－29

１Ｋ区で検出した東西方向に伸びる溝で、東西ともに調査区外に至る。幅約5.0ｍ前後、深さ約0.4ｍ前後を測る。底面はフラットで、植物遺体が多量に含まれる粘土層がレンズ状に堆積している。この溝は第４区ＳＤ－29と同じ堆積土を呈しており、同一のものと思われ、長さ15ｍを測る。遺物は平安時代後期～鎌倉時代の土師器・瓦器・瓦片がごく少量出土した。

落込み（ＳＯ）

ＳＯ－２

１Ｍ・Ｎ区で検出した落込み状遺構である。東西ともに調査区外に至る。深さ約0.4～0.5ｍを測る。堆積土は砂礫を多く含む細砂に粘土がブロック状に入るもので、平安時代後期～鎌倉時代の土師器・瓦器などを少量含んでいる。東部の第４区へ続いている。

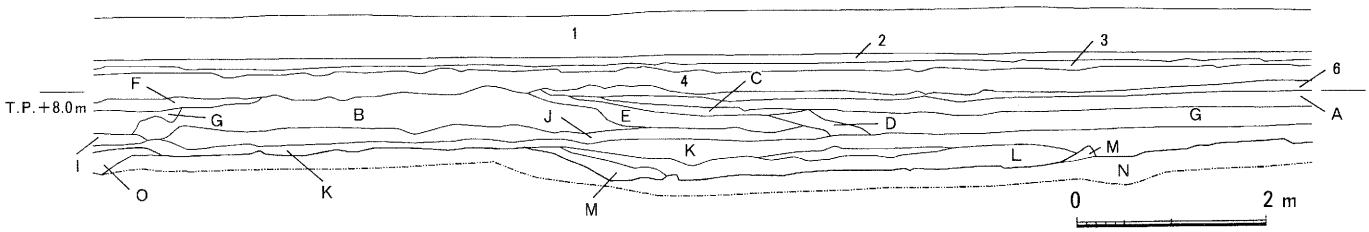
水田

水田－１

１Ｏ区で確認した。上面が細砂～微砂層で覆われた状態で粘着性のある粘土を検出した。粘土上面には畦畔や足跡状の痕跡はみられなかったが、調査区周辺の状況から水田土層と考えられる。東部の第４区でも同様に確認した。

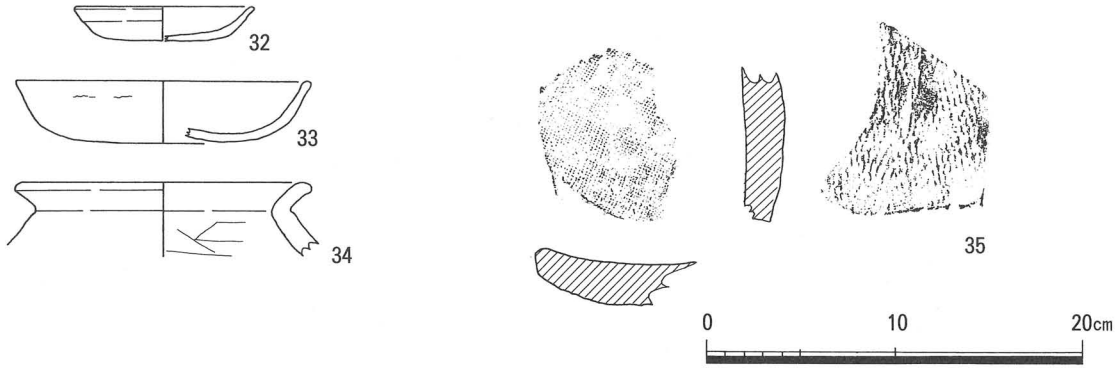
遺構に伴わない出土遺物

第６層内で古墳時代前期～平安時代にかけての土器類を少量出土している。図示できたものは４点（32～35）である（第13図）。（32～34）は土師器である。（32）は小皿、（33）は中皿、（34）は甕である。（35）は平瓦で、凹面に布目、凸面に縄目がみられる。これらはすべて平安時代末～鎌倉時代初頭のものである。



1	盛土	B	灰褐色粘質土	I	明褐灰色細砂混シルト
2	耕土	C	褐灰色礫混じり粘質土	J	暗茶褐色シルト
3	床土（淡灰茶色粘質シルト）	D	暗褐灰色粘質土	K	淡灰色シルト
4	淡灰茶色粗砂混シルト質土	E	灰褐茶色シルト	L	暗灰色粘質土
5	暗褐灰色礫混じりシルト質土	F	橙灰褐色粗砂粗砂シルト	M	暗灰色細砂混じり粘質土
6	暗灰色シルト質土	G	灰橙褐色細砂混シルト	N	乳白灰色細砂
A	淡灰褐色粘質シルト	H	淡灰茶色微砂～細砂	O	淡灰茶色シルト混じり粘土

第11図　１Ｊ区断面図



第12図　3区　遺構に伴わない出土遺物実測図

・第4区

溝（SD）

SD－29

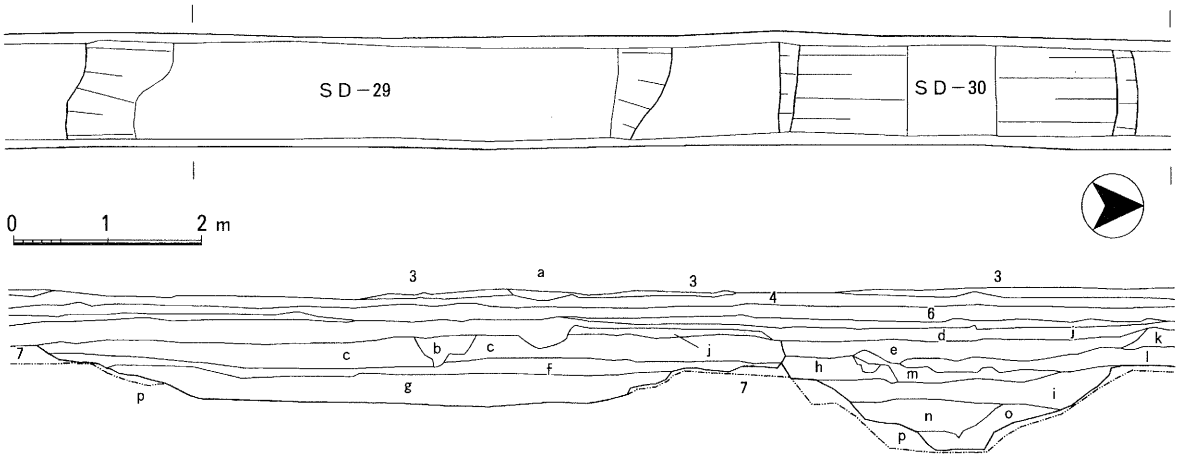
調査区北部（2K区）で検出した東西方向に伸びる溝で、東西ともに調査区外に至る。幅約約5.0m前後、深さ約0.4m前後を測る。底面はフラットで、植物遺体が多量に含まれる粘土層がレンズ状に堆積している。この溝は第3区SD－29と同じ堆積土を呈しており、同一のものと思われる。遺物は平安時代後期～鎌倉時代の土師器・瓦器・瓦片をごく少量出土した。図示できたものは10点（36～45）である。（36～39）は土師器小皿である。（36～38）は口縁「て」字状を呈する特徴をもつ平安時代後期のものである。（40）は杯で口縁部で屈曲外反している。（41・42）は土師器皿で、（41）は平安時代前半の時期の特徴をもつ。（43～45）は瓦器椀である。（43・44）は底部のみの破片で、（43）は高台断面が逆三角形、（44）は断面逆台形を呈するもので、杯部内面にヘラミガキがみられる。（45）は杯部1/4の破片で、やや深めの椀である。

SD－30

SD－29の北部（2K区）で検出した東西方向に伸びる溝で、東西ともに調査区外に至る。幅約4.0～4.5m、深さ約1.0mを測る。断面形状はすり鉢形を呈する。埋土は粘土と細砂のブロック土で、人為的に埋められているようである。溝の中層に縄目・布目がみられる平瓦の破片が少量含まれていた。

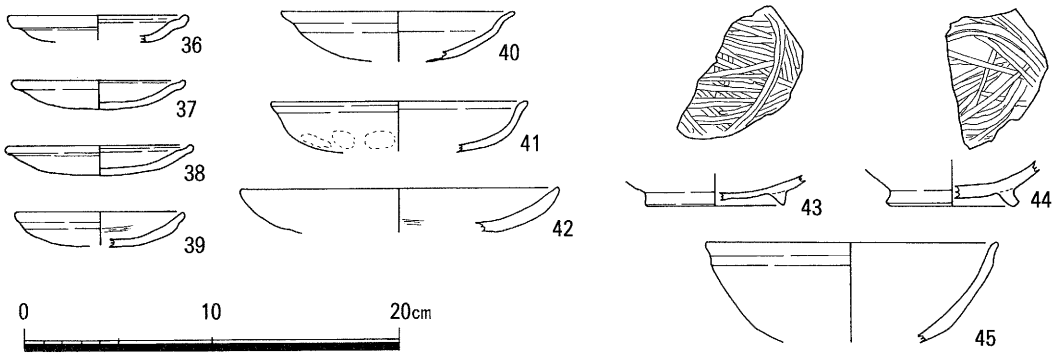
遺構に伴わない出土遺物

第6層内で古墳時代前期～平安時代にかけての土器類を少量出土している。図示できたものは15点である（第6図）。（46）は須恵器の杯で断面台形の高台が付く。（47～56）は土師器で、（47～54）は小皿、（55・56）は中皿である。（47）は平安時代中期～後期の形態的特徴がみられる小皿である。（57）は土師質の羽釜で、口縁部が「く」の字を呈しており、鎌倉時代前期のものであろう。（58～60）は丸瓦、（61～64）は平瓦で、凹面には布目、凸面には縄目がみられ、（63）は格子タタキのちハケを施している。これらはすべて平安時代末～鎌倉時代初頭のものである。

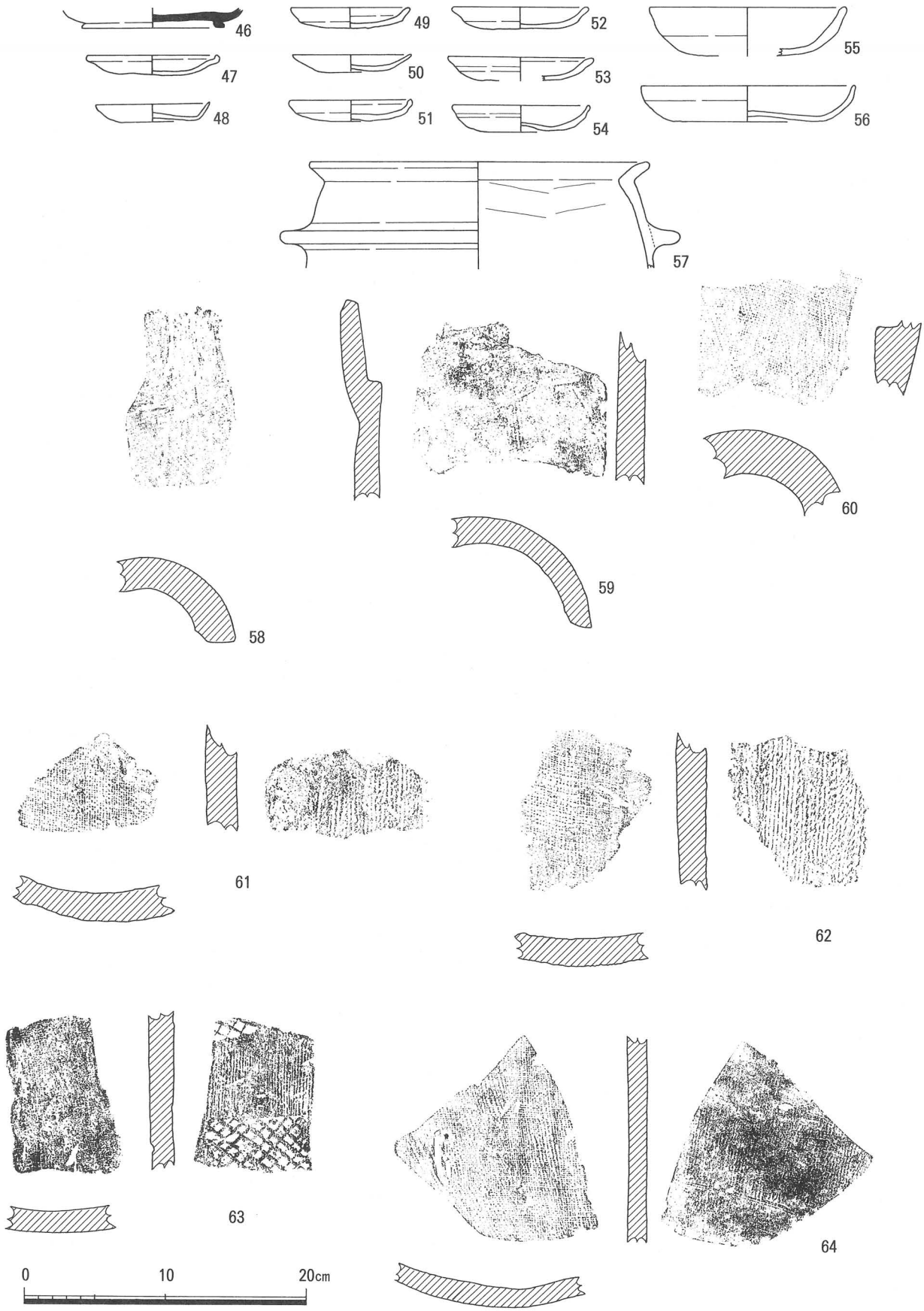


2	耕土	d	乳茶灰色礫混じりシルト質土	k	淡灰茶色微砂～細砂
3	床土（淡灰茶色粘質シルト）	e	淡茶褐色粘質シルト	l	淡灰褐色微砂混じり粘質土
4	淡灰茶色粗砂混シルト質土	f	淡灰色シルト	m	明灰色粘土混砂質土
6	暗灰色シルト質土	g	暗灰色粘質土	n	青灰色粘土
a	暗灰色細砂	h	褐灰色粘土混じり細砂	o	青灰色粗砂混じり粘土
b	暗褐灰色粘土混じりシルト	i	淡灰色粘質土		
c	褐灰茶色シルト混微砂	j	淡褐灰色シルト混じり細砂		

第13図　４区ＳＤ－29・30平断面図



第14図　ＳＤ－29出土遺物実測図



第15図　4区　遺構に伴わない出土遺物実測図

第４節　出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器　種 出土地点	法量（cm） 口径　器高	調整・技法等の特徴	色　調	胎　土	焼成	遺存状況	備　考
1	土師器鉢 第１区 ＳＥ－２	口径　49.2	外面：ヨコナデ、断面台形の凸帯巡る 内面：ヘラナデ、接合痕残存	淡茶赤色	やや粗（３㎜の砂粒を含む）	良好	口縁1/7	
2	土師器鉢 第１区 ＳＤ－10	口径　18.2	外面：ヨコナデ、指頭圧痕残存 内面：ヘラミガキ	外　淡茶橙色 内　灰黒色	密（１㎜以下の砂粒を含む）	良好	口縁1/4	
3	土師器杯 第１区 ＳＤ－３	口径　13.8 器高　3.7	外面：ヘラミガキ、底部ヘラミガキ 内面：ヘラナデ	茶色	密（１㎜以下の砂粒を含む）	良好	1/8	
4	土師器小皿 第１区 ＳＤ－３	口径　7.9 器高　1.4	外面：ヨコナデ、ナデ 内面：ナデ	淡茶灰色	密（１㎜以下の砂粒を含む）	良好	完形	
5	土師器羽釜 第１区 ＳＤ－１	口径　24.2 鍔径　31.2	外面：口縁部ヨコナデ、鍔ヨコナデ、ヘラナデ 内面：ヨコナデ、指ナデ	茶褐色	密（1.5㎜以下の砂粒を含む）	良好	口縁1/5	
6	土師器甕 第１区 ＳＤ－１	口径　21.4	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ	茶灰色	密（１㎜以下の砂粒を含む）	良好	口縁1/8	
7	円筒埴輪 第１区 包含層	径　38.6 タガ径　52.6	外面：ヨコハケ、タガヨコナデ 内面：ナデ	橙茶色	やや粗（1.5㎜の砂粒を含む）	良好	小片	
8	須恵器甕 第１区 包含層	口径　33.9	外面：回転ナデ、体部外面タタキ、回転カキ目 内面：回転ナデ	灰色	1.5㎜以下の砂粒を含む	良好	小片	
9	同　上	最大径　42.2	外面：タタキ 内面：ヘラナデ	黄橙色	密	良好	体部1/3	
10	土師器甕 第１区 包含層	口径　16.3	外面：口縁部ナデ、体部ヘラケズリ 内面：ナデ、下部ヘラナデ	茶褐色	１㎜以下の砂粒を含む	良好		
11	同　上	口径　21.0	外面：ヨコナデ 内面：ナデ	茶色	密（１㎜以下の砂粒を含む）	良好	口縁1/6	
12	同　上	口径　23.5	外面：ヨコナデ 内面：ナデ	外　茶色 内　茶色	１㎜以下の砂粒を含む	良好	小片	
13	須恵器杯身 第１区 包含層	底径　10.0	内外面：回転ナデ、底部外面ヘラケズリ	灰色	密（１㎜以下の砂粒を含む）	良好	底部1/2	
14	土師器杯 第１区 包含層	口径　15.1 器高　3.0	内外面：ヨコナデ、ナデ	淡茶灰色	0.5㎜以下の砂粒を含む	良好	ほぼ完形	
15	土師器竈 第１区 包含層	厚さ　2.3	外面：ハケナデ 内面：ナデ	茶褐色	密（２㎜以下の砂粒を含む）	良好	小片	
16	土師器甕 第２区 ＳＤ－21	口径　26.0	内外面：ヨコナデ、ナデ	茶灰色	密（2.5㎜以下の砂粒を含む）	良好	口縁1/10	
17	土師器甕 第２区 ＳＤ－25	口径　16.8	内外面：ヨコナデ、ナデ	外　褐茶色 内　褐黒色	0.5㎜以下の砂粒を少量含む	良好	口縁1/7	
18	土師器小皿 第２区 ＳＤ－28	口径　9.3 器高　1.8	外面：ヨコナデ、ナデ 内面：ナデ	淡茶灰色	0.5㎜以下の砂粒を微量に含む	良好	1/2	

遺物番号 図版番号	器　種 出土地点	法量（cm） 口径　器高	調整・技法等の特徴	色　調	胎　土	焼成	遺存状況	備　考
19	瓦器椀 第２区 ＳＤ－29	底径　4.5	外面：ナデ 内面：ナデ、ヘラミガキ	外　乳灰色 内　灰色	密（１㎜以下の砂粒を含む）	良好	底部1/2	
20	平瓦 第２区 ＳＤ－28	厚み　2.8	凸面：縄目 凹面：布目	淡灰茶色	精良	良好		
21	土師器甕 第２区 ＳＤ－27	口径　10.4	外面：ヨコナデ、ナデ 内面：ナデ	茶橙色	密（１㎜以下の砂粒を微量に含む）	良好	口縁1/6	
22	瓦質羽釜 第２区 ＳＤ－27	口径　28.6 鍔径　37.5	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	淡橙茶灰色	２㎜以下の砂粒を微量に含む	良好		
23	土師器皿 第２区 包含層	口径　18.4	内外面：ヨコナデ、ナデ	茶橙色	密（１㎜以下の砂粒を含む）	良好	口縁1/8	
24	土師器杯 第２区 包含層	口径　13.0 器高　3.1	内外面：ヨコナデ、ナデ、指ナデ	茶橙色	密（１㎜以下の砂粒を微量に含む）	良好	1/5	
25	土師器皿 第２区 包含層	口径　13.3 器高　2.6	外面：ヨコナデ、ヘラナデ 内面：ナデ	淡灰茶色	１㎜以下の砂粒を含む	良好	3./2	
26	同　上	口径　13.2 器高　2.3	内外面：ヨコナデ、ナデ	淡茶灰色	１㎜以下の砂粒を含む	良好	口縁4/1	
27	同　上	口径　16.2	内外面：ヨコナデ、ナデ	淡茶灰色	密（0.5㎜以下の砂礫を含む）	良好	1/6	
28	瓦器椀 第２区 包含層	口径　15.2 器高　5.5 底径　5.6	外面：ヨコナデ、ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	淡灰色	密（0.1㎜以下の砂粒を含む）	良好	1/10	
29	同　上	口径　15.8	内外面：ヨコナデ、ヘラミガキ	灰黒色	密（１㎜以下の砂粒を微量に含む）	良好	口縁1/10	
30	磁器椀 第２区 包含層	底径　5.5	内外面：回転ナデ、釉、内面に絵柄	淡緑灰色	密（１㎜以下の砂粒を微量に含む）	良好	小片	
31	瓦質羽釜 第２区 包含層	口径　22.7 鍔径　29.4	外面：回転ナデ、ヘラケズリ 内面：回転ナデ	灰色	やや密（１㎜以下の砂粒を微量に含む）	良好	口縁1/6	
32	土師器小皿 第３区 包含層	口径　9.6 器高　1.9	内外面：ヨコナデ、ナデ	淡茶橙色	密（1.5㎜以下の砂粒を微量に含む）	良好	1/4	
33	土師器中皿 第３区 包含層	口径　15.7 器高　3.3	同　上	灰白色	密	良好	1/5	
34	土師器甕 第３区 包含層	口径　15.8	同　上	外　黒褐色 内　淡茶褐色	密（２㎜以下の砂粒を微量に含む）	良好	口縁1/6	
35	平瓦 第３区 包含層	厚み　2.0	凸面：縄目 凹面：布目	灰白色～黒色	密（２㎜以下の砂粒を微量に含む）	良好	小片	
36	土師器小皿 第４区 ＳＤ－29	口径　9.7	内外面：ヨコナデ、ナデ	乳茶灰色	密（１㎜以下の砂粒を微量に含む）	良好	口縁1/2	

遺物番号 図版番号	器　種 出土地点	法量（cm） 口径　器高	調整・技法等の特徴	色　調	胎　土	焼成	遺存状況	備　考
37	土師器小皿 第４区 ＳＤ－29	口径　9.3 器高　1.5	内外面：ヨコナデ、ナデ	乳茶灰色	密（1.5㎜以下の砂粒を微量に含む）	良好	1/4	
38	同　上	口径　9.7 器高　1.6	内外面：ヨコナデ、ナデ	乳茶灰色	密（１㎜以下の砂粒を微量に含む）	良好	1/3	
39	同　上	口径　9.1 器高　1.8	内外面：ヨコナデ、ナデ	灰褐色	密（１㎜以下の砂粒を微量に含む）	良好	1/2	
40	土師器杯 第４区 ＳＤ－29	口径　12.4	内外面：ヨコナデ、ナデ	乳茶灰色	密	良好	口縁1/6	
41	土師器皿 第４区 ＳＤ－29	口径　14.8 器高　3.0	内外面：ヨコナデ、ナデ	乳橙灰茶色	１㎜以下の砂粒を微量に含む	良好		
42	同　上	口径　16.0 器高　2.4	内外面：ヨコナデ、ナデ	淡灰茶色	１㎜以下の砂粒を微量に含む	良好		
43	瓦器椀 第４区 ＳＤ－29	底径　7.4	外面：ヨコナデ、ナデ 内面：ヘラミガキ	外　淡灰褐色 内　黒灰色	密（１㎜以下の砂粒を微量に含む）	良好	底部1/2	
44	同　上	底径　7.0	外面：ヨコナデ、ナデ 内面：ヘラミガキ	外　淡褐灰色 内　黒灰色	密（0.5㎜以下の砂粒を微量に含む）	良好	底部1/2	
45	同　上	口径　6.6	外面：ヨコナデ、ナデ 内面：磨耗のため調整不明瞭	外　乳灰色～淡緑灰色 内　淡緑灰色	精良	良好		
46	須恵器杯身 第４区 包含層	底径　10.0	内外面：回転ナデ	灰色	密	良好	底部2/3	
47	土師器小皿 第４区 包含層	口径　9.5 器高　1.4	内外面：ヨコナデ、ナデ	浅黄橙色	密	良好	完形	
48	同　上	口径　8.1 器高　1.4	内外面：ヨコナデ、ナデ	灰白色	密	良好	ほぼ完形	
49	同　上	口径　8.5 器高　1.4	内外面：ヨコナデ、ナデ	浅黄橙色	密	良好	4/5	
50	同　上	口径　8.4 器高　1.2	内外面：ヨコナデ、ナデ	灰白色	密	良好	完形	
51	同　上	口径　16.0 器高　2.4	内外面：ヨコナデ、ナデ	凹面　灰色 凸面　暗灰色	１～４㎜の砂粒を含む	良好		
52	同　上	口径　9.7 器高　1.5	内外面：ヨコナデ、ナデ	灰白色	密	良好	2/3	
53	土師器中皿 第４区 包含層	口径　10.3	内外面：ヨコナデ、ナデ	浅黄橙色	密	良好	1/3	
54	同　上	口径　9.7 器高　1.9	内外面：ヨコナデ、ナデ	浅黄橙色	密	良好	1/3	

遺物番号 図版番号	器　種 出土地点	法量（cm） 口径　器高	調整・技法等の特徴	色　調	胎　土	焼成	遺存状況	備　考
55	同　上	口径　13.9	内外面：ヨコナデ、ナデ	灰白色	密	良好	1/4	
56	同　上	口径　15.1 器高　2.5	内外面：ヨコナデ、ナデ	浅黄橙色	密	良好	4/5	
57	土師器羽釜 第４区 包含層	口径　23.7 鍔径　28.3	外面：ヨコナデ、ナデ 内面：ヨコナデ、ヘラナデ	淡茶褐色	やや粗（1.5㎜の砂粒を含む）	良好	口縁1/3	
58	丸瓦 第４区 包含層	厚さ1.5～3.0	凹面：布目 凸面：縄目	灰白～黒色	１～４㎜の砂粒を含む	良好	破片	
59	同　上	厚さ　2.0	凹面：布目 凸面：縄目	灰白～黒色	１～２㎜の砂粒を含む	良好	破片	
60	同　上	厚さ　3.0	凹面：布目 凸面：縄目	灰色	１～４㎜の砂粒を含む	良好	破片	
61	平瓦 第４区 包含層	厚さ　2.2	凹面：布目 凸面：縄目	灰白色	密	良好	破片	
62	同　上	厚さ　2.0	凹面：布目 凸面：縄目	凹面　黒色 凸面　灰白色	密	良好	破片	
63	同　上	厚さ　1.7	凹面：布目 凸面：縄目、格子目	橙色	密	良好	破片	
64	同　上	厚さ　1.4	凹面：布目 凸面：縄目	灰白色	密	良好	破片	

第２章　まとめ

今回の調査は、南北に細長いトレンチ状の調査区で平面的な調査はできなかったが、北部で古墳時代～平安時代前期の遺構・遺物を主に、中央付近から南部にかけては平安時代後期～鎌倉時代にかけての遺構・遺物を検出することができた。

調査地では、平成10年度市教委の遺構確認調査、当調査研究会が実施した公共下水道工事に伴う第７次調査（ＴＳ98－７）で平安時代末～鎌倉時代にかけての集落遺構および遺物包含層を検出している。さらに北東部（約150ｍ）の大阪市域にあたる区画整理事業に伴う発掘調査では古墳時代後期～飛鳥時代の建物跡などの集落遺構が検出されており、大阪市域側では飛鳥時代の集落域の存在が想定されている。

今回の調査区では第１区・第２区の北部で奈良時代～平安時代前期の遺構・遺物を確認している。検出した遺構には柱穴跡と思われる小穴、焼土・炭を多量に含む小穴を検出しており、住居に関連する遺構が想定される。

上層では削平を受けている部分がみられるが、比較的浅いところから平安時代末～鎌倉時代に整地したと思われる土層を確認している。また生産域と思われる水田耕土は、調査区の南側（大阪市）へ広がっていることがわかった。

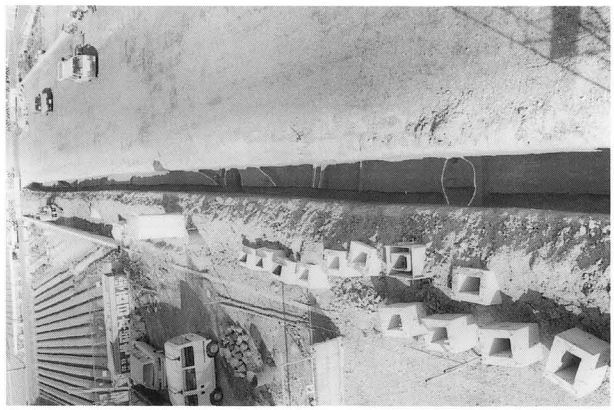
また包含層中より古墳時代中期ごろの円筒埴輪片が１点出土しており、近接周辺に古墳の存在が考えられる。調査地南部の大阪市域側に六反山古墳の推定場所が想定されており、その古墳との関連性が想定されるが、破片１点のみの出土であり詳細なことはわからない。

以上、調査の成果である。

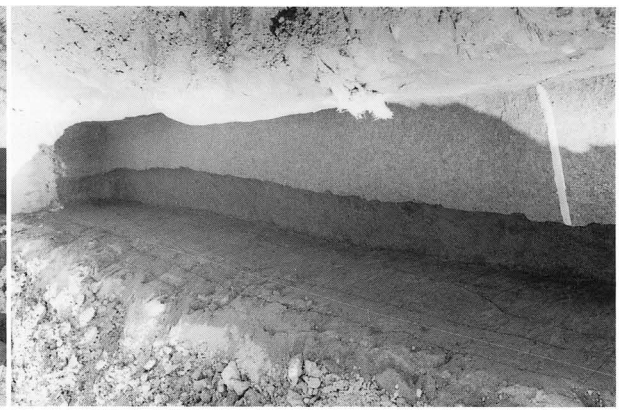
参考文献

・岡田清一　1993『太子堂遺跡第１次調査・第２次調査報告書』財団法人八尾市文化財調査研究会報告36　財団法人八尾市文化財調査研究会報告
・坪田真一　1993「太子堂遺跡（第４次調査）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』財団法人八尾市文化財調査研究会報告39　財団法人八尾市文化財調査研究会報告
・成海佳子・藤田道子　1997「Ⅶ　太子堂遺跡（第３次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告58』財団法人八尾市文化財調査研究会報告
・成海佳子　1997「Ⅷ　太子堂遺跡（第６次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告58』財団法人八尾市文化財調査研究会報告
・中西靖人・宮崎泰史・西村尋文他　1984『亀井』－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－（財）大阪文化財センター
・中西靖人・国乗和雄・宮崎泰史・西村尋文・岸本道昭他　1985『亀井遺跡』－寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－（財）大阪文化財センター

図　　版



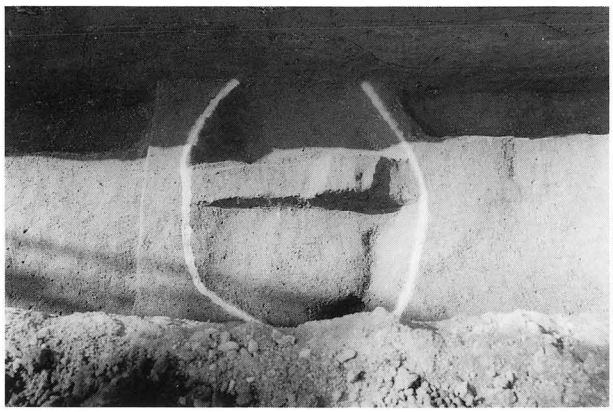
1区全景（南から）



1区ＳＯ－１（南から）

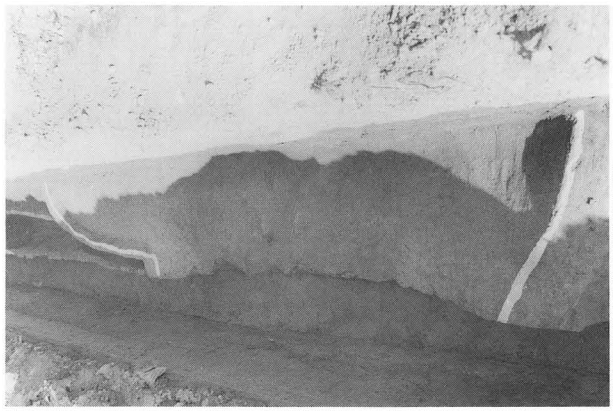
1区ＳＥ－１（東から）

1区ＳＥ－２（東から）



1区ＳＫ－２（東から）

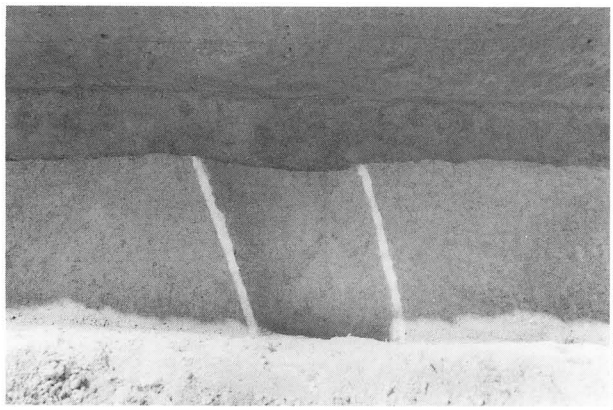
1区ＳＤ－２・３（南から）



1区ＳＤ－６（東から）

1区ＳＤ－５（南から）

図版二

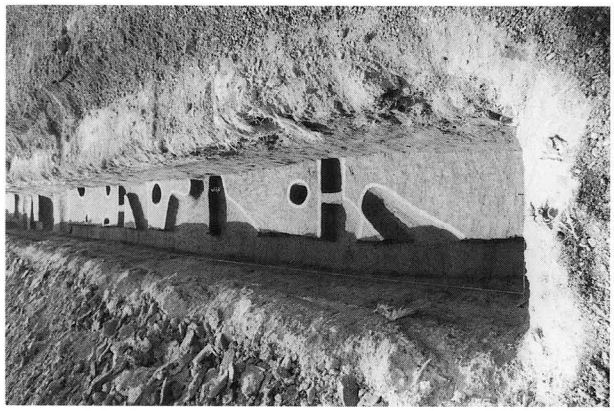


第１区ＳＤ－８（東から）

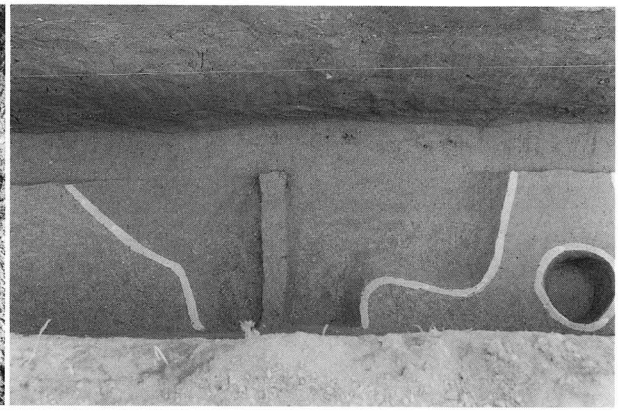
第１区ＳＤ11（東から）

第２区全景（南から）

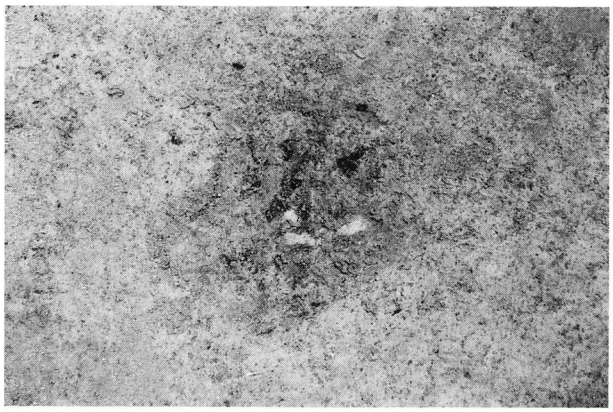
第２区



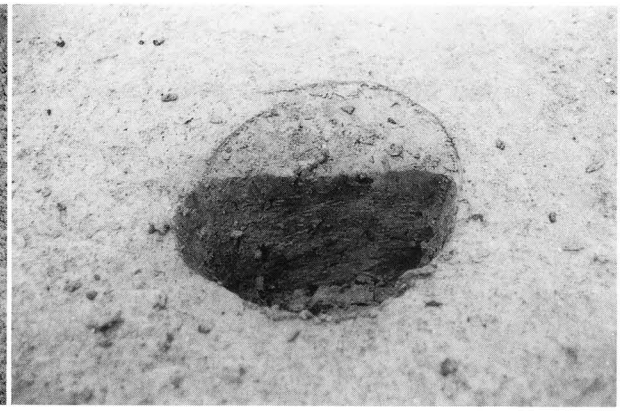
第２区全景（北から）



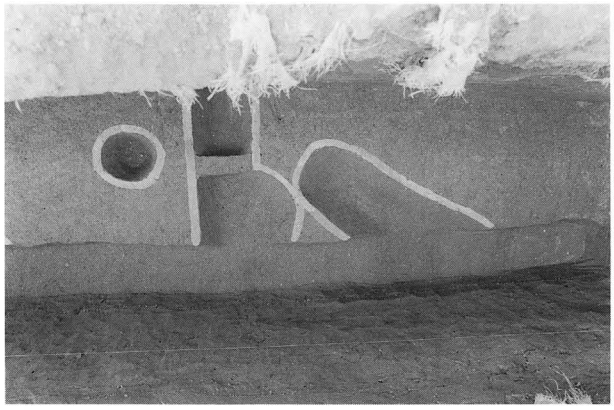
第２区ＳＫ－３（東から）



第２区ＳＰ－３（南から）



第２区ＳＰ－３断面（南から）

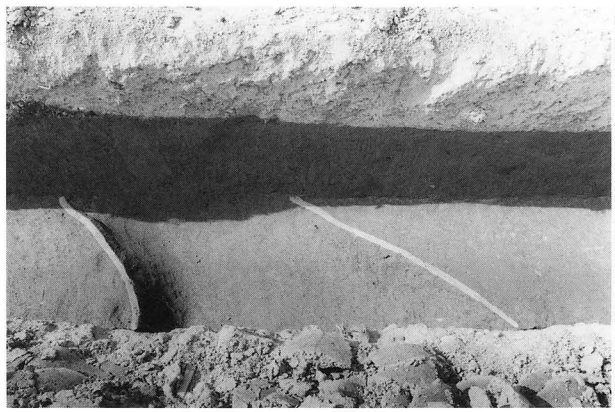


第２区ＳＤ－16・17（東から）

第２区（西から）

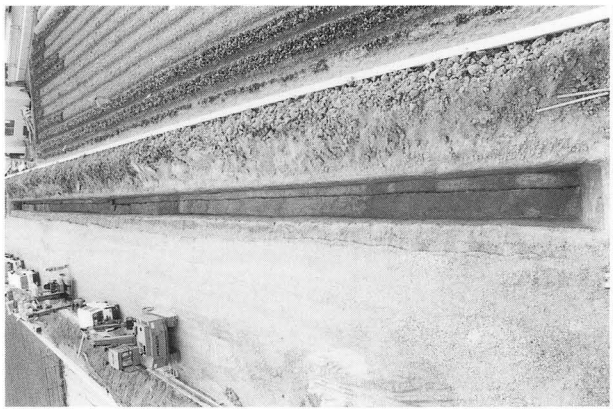
第２区ＳＤ－25（南から）

第２区ＳＤ－20・21（東から）



第２区ＳＤ－26（東から）

第２区（北から）



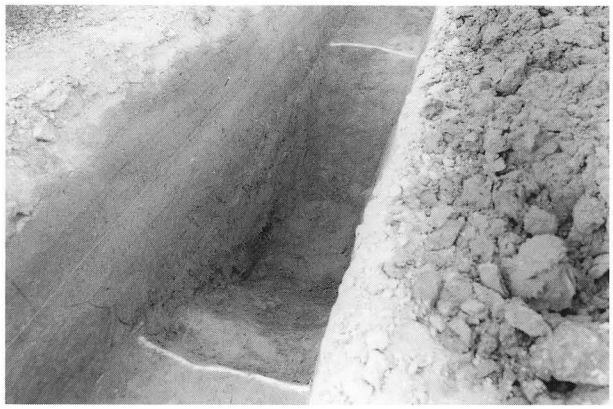
第３区全景（北から）

第３区全景（南から）

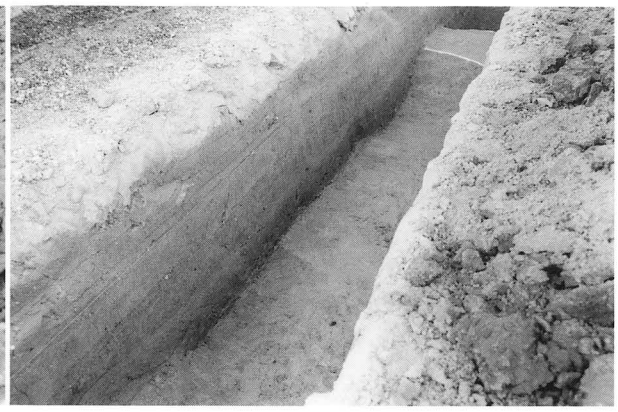
図版四

第４区（北から）

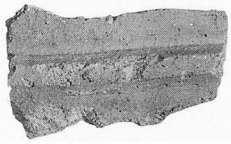
第４区（北から）



第４区ＳＤ－30（南から）



第４区（南から）


2

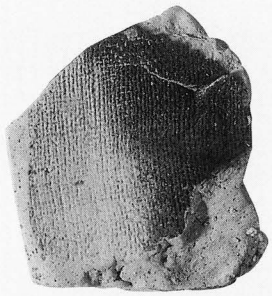
4

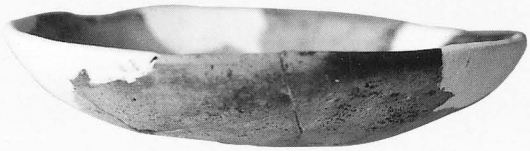
5

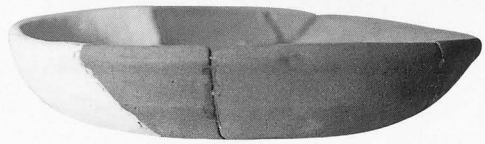
9

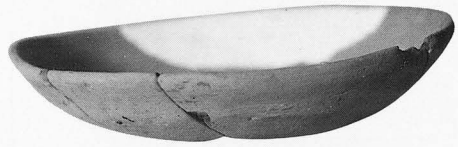
10

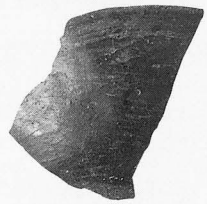
13


35


22


25

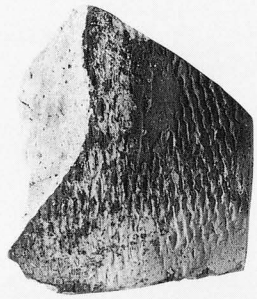

26


29

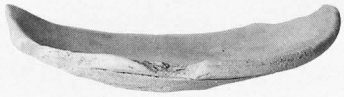
30

31

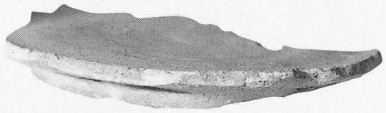
34

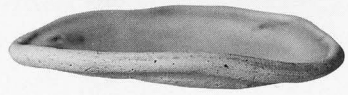

35

図版六


38

44

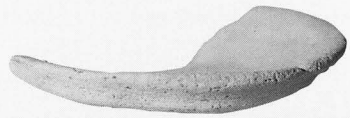

46


47

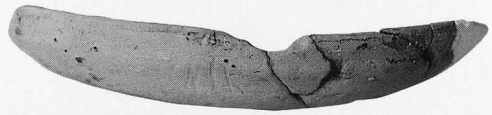
48

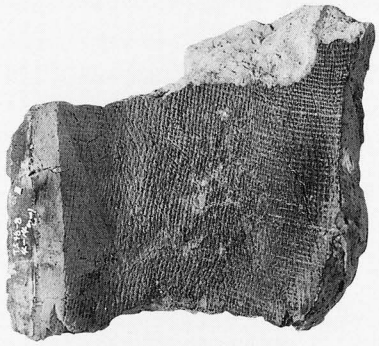
49

50

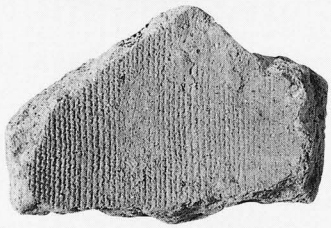

52

54


56


59

59


61

61

63

63

Ⅶ　東郷遺跡第54次調査（ＴＧ97－54）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市北本町２丁目216番地内で実施した防火水槽設置工事に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する東郷遺跡第54次調査（ＴＧ97－54）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第687－３号　平成９年２月28日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成９年６月16日～６月19日（実働４日間）にかけて、樋口　薫を調査担当者として実施した。調査面積は約64㎡である。

1．現地調査にあたっては、岩沢玲子、垣内洋平、岸田靖子、中西明美、西岡千恵子、西村和子の参加を得た。

1．内業整理は、現地調査終了後、随時実施し、平成11年８月31日に完了した。

1．本書に関わる業務は、遺物実測－市森千恵子、岸田、坂田典彦（現東大阪市教育委員会嘱託）、西岡、図面トレース－市森、岸田、西岡、本書の執筆・写真撮影及び編集－樋口が担当した。

凡　　例

1．遺構番号は、３桁の数字で表記した。上１桁については遺構検出面を示し、以下の桁は遺構の検出番号を表す。

1．本書で使用している土器の器種分類や編年および年代は下記の文献に拠っている。本文中では煩雑さを避けるため、これら引用・参考文献をそのつど提示することは割愛した。

弥生土器－寺沢　薫・森岡秀人編著　1989『弥生土器の様式と編年－近畿編Ｉ－』木耳社

土師器　－古代の土器研究会　1992『古代の土器１　都城の土器集成』
横田洋三　1981「付論　出土土師皿編年試案」『平安京跡研究調査報告第５輯』

須恵器　－田辺昭三　1966『陶邑古窯址群Ｉ』平安学園考古学クラブ
古代の土器研究会　1992『古代の土器１　都城の土器集成』

瓦　器　－百瀬正恒・近江俊秀・尾上　実・森島康夫　1995「各地の土器様相７．近畿」「土器・陶磁器６．瓦器椀」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会

本　文　目　次

第１章　はじめに……95
第２章　調査概要……98
　第１節　調査方法と経過……98
　第２節　基本層序……99
　第３節　検出遺構と出土遺物
　　（１）検出遺構 ……102
　　（２）出土遺物
　　１、遺構内出土遺物 ……105
　　２、地層内出土遺物 ……108
第３章　まとめ ……108

挿　図　目　次

第１図　調査地周辺図（Ｓ＝１/5000） ……95
第２図　調査区位置図（Ｓ＝１/400）……98
第３図　調査区西壁・北壁地層断面図（Ｓ＝１/40）……100
第４図　調査区東壁地層断面図（Ｓ＝１/40）……101
第５図　第１面平面図（Ｓ＝１/80）……102
第６図　第２面平面図（Ｓ＝１/80）……103
第７図　ＳＥ201平面図・断面図（Ｓ＝１/40） ……104
第８図　ＳＫ201平面図・断面図（Ｓ＝１/20） ……105
第９図　ＳＤ101・ＳＯ101出土遺物（Ｓ＝１/４・１/２） ……106
第10図　ＳＥ201・ＳＫ201・ＳＫ202出土遺物（Ｓ＝１/４） ……107
第11図　ＳＥ201出土耳環（Ｓ＝１/１） ……107
第12図　地層内出土遺物（Ｓ＝１/４）……108

表　目　次

表１　調査地一覧表 ……95

図　版　目　次

図版一　調査地周辺状況（北から）　機械掘削状況（東から）
西壁地層堆積状況（南東から）　北壁地層堆積状況（南東から）
東壁地層堆積状況（南西から）　東壁地層堆積状況（T.P.＋5.5～7.4m）
図版二　第１面全景（北から）　第２面全景（北から）
図版三　ＳＥ201（南東から）　ＳＫ201（東から）
図版四　ＳＤ101（南から）　ＳＥ201埋土断面（東から）
ＳＥ201　耳環出土状況（南西から）　ＳＫ202 土器出土状況（西から）
調査参加者
図版五　ＳＤ101・ＳＯ101・ＳＥ201 出土遺物
図版六　ＳＥ201・ＳＫ201・ＳＫ202 出土遺物

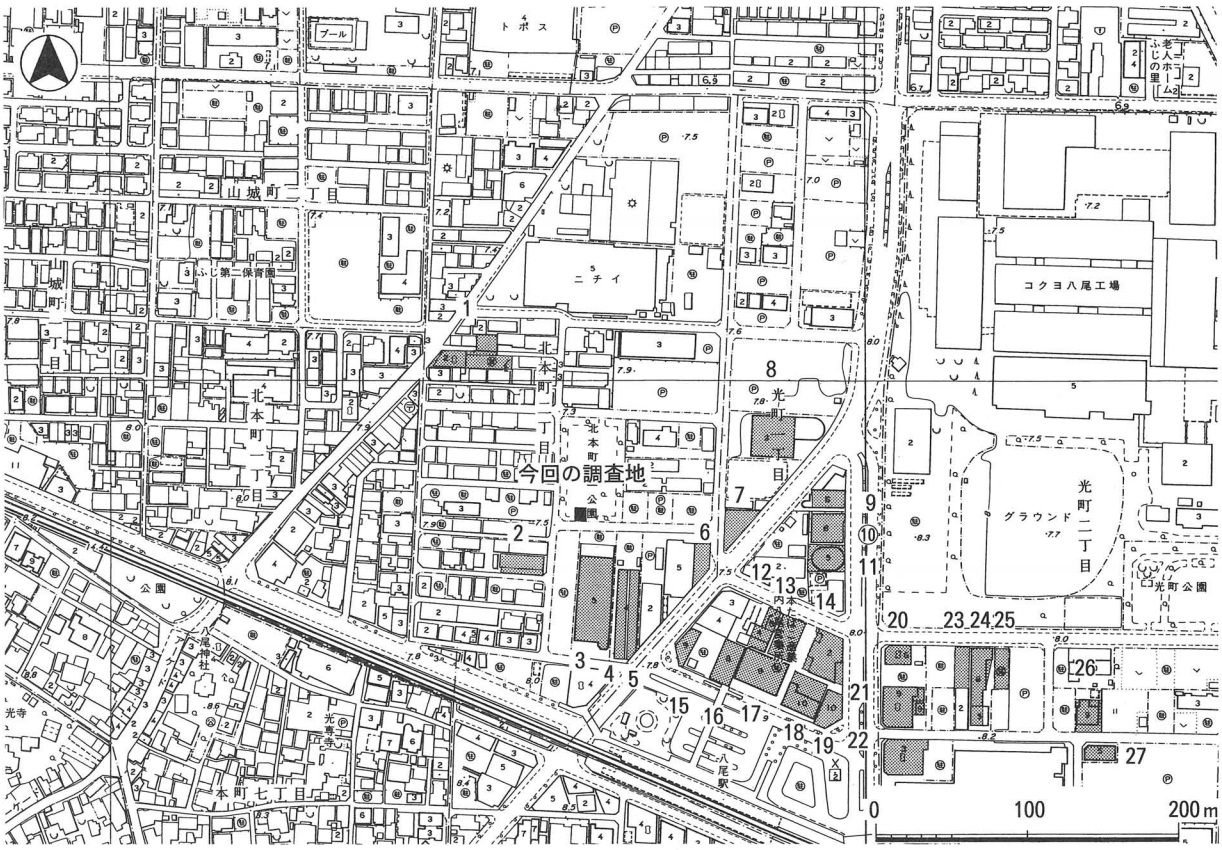
写　真　目　次

写真１　ＳＥ201出土耳環（Ｓ＝１／１）

第１章　はじめに

大阪府の東部、現在の大和川と石川の合流する付近から北西方向に広がる河内平野は、東を生駒山地、西を上町台地、北を淀川、南を羽曳野丘陵に区画されている。この河内平野は、旧大和川の分流がもたらす沖積作用によって形成されている。今回報告する東郷遺跡は、この大平野の東部に位置する八尾市のほぼ中央、現在の行政区画では、本町１・７丁目、東本町１～５丁目、北本町２丁目、光町１～２丁目、桜ヶ丘１～４丁目、荘内町１・２丁目の東西約1.1km、南北約0.9kmがその範囲と推定されている。この地域は、そのほぼ中央に近鉄八尾駅が位置し、この駅を中心にその北側には八尾市域最大の一大商業エリアが形成されている。一方駅の南側は、八尾市役所を中心とした公共施設が集まる本町１丁目付近以外は閑静な住宅街が広がっており、まったく異なった街並みを見せている。

さて、当遺跡は、昭和46年に八尾市東本町２丁目で水道管敷設工事が行われた際、現地表下約1.5ｍで墨書人面土器等が発見され（西岡1977）、その存在が確認された。その後、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会による多次にわたる調査の結果、弥生時代中期～近世に至る複合遺跡として認識されている。特筆すべき成果については、既刊の『東郷遺跡第44次調査』（坪田1998）に詳細が述べられているため、ここでは、これから報告を行う本調査地を含む遺跡の西部地域について概観していく。この地域におけるもっとも古い時期の遺構は、弥生時代中期



第１図　調査地周辺図（Ｓ＝1/5000）

にまで遡る。第15次調査地（高萩1989）では土坑が２基、第49次調査地（原田1996）では土坑が１基検出されているが、いずれも居住域を形成する遺構かどうかの判断は難しい。この地域では、弥生時代中期以前に埋没したと考えられる砂礫層が必ずといっていいほど認められることからも明らかなように、旧大和川の沖積作用により非常に不安定な環境にあったようで、集落を営むには不向きな地域であったようだ。古墳時代に入ると、沖積作用も安定期に入り、第17次調査地（駒沢1983）や第21次調査地（米田1986）では方形周溝墓が築かれる。これらの墓域を形成した集団の居住域は、墓域の南西部に位置する第４次（高萩1981）、第12次（高萩1982）、第19次（米田・嶋村1985）、第25次（西村1995）が想定されている。第25次調査地では水田も検出されており、ミクロ的にではあるが、居住域・墓域・生産域をセット関係にした集落の存在が見えてきそ

表１　調査地一覧表（地図番号は第１図に対応）

地図番号	調査名	調査地番	調査原因	調査面積（㎡）	調査期間	調査機関
1	ＴＧ93－41	北本町２丁目43－１	共同住宅	120	平成５年８月30日～９月６日	八文研
2	ＴＧ96－53	北本町２丁目67－２、68	共同住宅	100	平成８年12月２日～12月12日	八文研
3	ＴＧ87－25	北本町２丁目240～242	共同住宅	900	昭和62年７月20日～９月17日	八文研
4	ＴＧ81－04	北本町２丁目145－12	貸ビル	125	昭和56年５月13日～５月26日	八文研
5	ＴＧ82－12	北本町２丁目133－１・２、134－３	貸ビル	200	昭和57年８月５日～８月27日	八文研
6	ＴＧ85－19	北本町２丁目232	ビル	207	昭和60年４月１日～４月27日	市教委
7	ＴＧ93－44	光町１丁目39～41	ホテル等	370	平成６年１月10日～２月９日	八文研
8	ＴＧ91－36	光町１丁目37	自動車展示場等	550	平成３年５月20日～６月18日	八文研
9	ＴＧ86－21	光町１丁目43・44	病院		昭和61年10月６日～10月28日	市教委
10	ＴＧ83－17	光町１丁目47－１他	貸ビル	480	昭和58年11月24日～12月15日	八文研
11	ＴＧ88－28	光町１丁目47	ビル	86	昭和63年７月26日～８月11日	八文研
12	ＴＧ83－16	光町１丁目69－２、北本町２丁目145－12	貸ビル	200	昭和58年８月１日～８月13日	八文研
13	ＴＧ93－40	光町１丁目51・52	共同住宅	352	平成５年６月３日～６月25日	八文研
14	ＴＧ82－14	光町１丁目72	店舗	480	昭和58年３月18日～４月21日	八文研
15	ＴＧ83－15	光町１丁目132－２	貸ビル	300	昭和58年５月13日～５月25日	八文研
16	ＴＧ81－３	光町１丁目69－２	貸ビル	64	昭和56年４月13日～４月15日	市教委
17	ＴＧ89－31	光町１丁目61	事務所ビル	660	平成元年５月18日～７月８日	八文研
18	ＴＧ83－18	北本町２丁目141	店舗付住宅	500	昭和59年３月１日～４月10日	八文研
19	ＴＧ81－５	光町1丁目88	貸ビル	196	昭和56年６月８日～７月７日	市教委
20	ＴＧ81－９	光町１丁目47	貸ビル	210	昭和56年12月４日～12月23日	市教委
21	ＴＧ81－８	光町２丁目156	貸ビル	565	昭和56年10月15日～12月４日	市教委
22	ＴＧ81－10	光町２丁目17	貸ビル	621	昭和57年２月１日～３月12日	市教委
23	ＴＧ90－35	光町２丁目19	共同住宅	140	平成３年３月４日～３月19日	八文研
24	ＴＧ82－11	光町２丁目	共同住宅	500	昭和57年５月８日～６月10日	市教委
25	ＴＧ95－49	光町２丁目２番22号	共同住宅	140	平成７年６月14日～６月23日	八文研
26	ＴＧ88－29	光町２丁目28－1他３筆	店舗付共同住宅	220	平成元年３月６日～３月25日	八文研
27	ＴＧ89－32	光町２丁目59	共同住宅	130	平成元年９月25日～10月７日	八文研
今回の調査地	ＴＧ97－54	北本町２丁目216	防火水槽	64	平成９年６月16日～６月19日	八文研

調査機関＝市教委：八尾市教育委員会　八文研：（財）八尾市文化財調査研究会

うである。前期では、第44次調査地において掘立柱建物などで構成される遺構群が検出されていることから、当地域は前代に引き続き安定した生活環境にあったと考えられる。古墳時代中期～平安時代後半にかけては、居住域はほとんど検出されておらず、東部地域に移動する。この間、西部地域がどのように土地利用されていたかはほとんど明らかにされていない。わずかに第25次調査地において水田が検出されているだけである。今後の調査に期待したい。平安時代後期に入ると、西部地域の至るところで井戸を中心とした遺構群が認められ、末期には第25次調査地を中心とした地域で居住域が形成される。同時期の東部地域では、官衙的な公共施設あるいは寺院の存在を想定させる成果も報告されており（渚1995ａ）、当地域とは全く異なる様相を見せている。

当遺跡は、おおむねその流れを北に向ける古玉串川・古楠根川・古長瀬川の沖積作用により形成された自然堤防や後背湿地などの微地形を利用して集落が営まれているが、同地形上にはこれ以外にも多くの遺跡の存在が確認されている。そのうち、当遺跡の周辺に限れば、北に萱振遺跡、南に成法寺遺跡、西に宮町遺跡、八尾寺内町遺跡、南東部に小阪合遺跡などが挙げられる。以下、各遺跡の特筆すべき成果について概説していく。

萱振遺跡　弥生時代中期～近世にかけての複合遺跡である。当遺跡における最古の遺構は、弥生時代中期の水田であるが、遺物については、弥生時代前期の河川から縄文時代晩期に属する土器が出土している（広瀬1989）。弥生時代前期新段階に入ると、当遺跡の北西約２kmに位置する山賀遺跡において水田経営が開始される（生田・小林1982）。当遺跡でも河川から土器が出土し、当該期の集落が存在する可能性が考えられ、河内平野における稲作導入先行地域が、古玉串川・古楠根川・古長瀬川の河口部であったことを可視的に示す貴重な資料を提供している。また中期～後期にかけては、幾度となく引き起こる洪水と戦いながらも水田経営が行われる。一方、古墳時代前期には、直弧紋を刻み、赤く彩色が施された靫形埴輪などを伴う萱振１号墳が築造される（広瀬他1992）。この古墳は、その規模からは想像もつかないほどの豊富な埴輪類が出土しており、これらばかりが注目されがちであるが、それ以上に河内沖積平野に未だ埋没している古墳の存在を知らしめたことも意義深い。

成法寺遺跡　弥生時代中期～近世にかけての複合遺跡である。当遺跡における最古の遺構は、小阪合遺跡や東郷遺跡に隣接する、遺跡の北東部で検出された弥生時代中期の方形周溝墓である（山上1989）。古墳時代に入ると、庄内式期の墓域が、遺跡の西部（高萩他1983）と最北部（福田1986）でそれぞれ検出されている。西部のものは古長瀬川の、最北部のものは古楠根川の自然堤防上に展開するものと思われ、それぞれの墓域を形成する集団は異なると考えられる。特に最北部でその存在が確認された墓域では、他に類例の少ない円形周溝墓となる可能性が高いものも含まれ、その特異性が注目されている。

宮町遺跡　『河内鑑名所記』『和漢三才図会』などの文献に記されている大日山千眼寺に比定される遺跡である。平安時代後期～室町時代にかけての瓦が多量に出土している（原田1983）。

八尾寺内町遺跡　弥生時代中期～近世にかけての複合遺跡である。遺跡名にもあるように1607年以降、東本願寺の掛所としての大信寺御坊を中核とした寺内町が形成されるが、久宝寺寺内町とは、その成立過程は異なる。これまでに３次にわたる調査が実施されているが、寺内町期の顕著な遺構は報告されていない。

小阪合遺跡　弥生時代中期～近世にかけての複合遺跡である。弥生時代中期の遺構は、第18次

調査地（成海1990）の一箇所でしか確認されていない。ここでは居住域の中核を担っていたと思われる井戸などの遺構群を検出している。先述した成法寺遺跡においても同時期の墓域が検出されているが、当遺構群との有機的な関係は不明である。一方、後期になると、この居住域は生産域に変貌を遂げ、居住域は遺跡の北西部に移動するようである。古墳時代以降は旧大和川の沖積作用が安定したためか、各時代の遺構が多量に検出されている。第20次調査地では、古墳時代前期の河川から国内最古の出土例にあたる漆塗木製横櫛が出土した（坪田1993）。遺跡の東部に位置する第４次調査地（高萩1989）では、古墳時代中期に属する埴輪円筒棺が出土したが、この成果は埋没古墳の存在を示しているのかもしれない。古代～中世にかけては、遺跡の南部で居住域を形成する遺構群を検出しているほか、平成10年に遺跡の北部で行われた大阪府文化財調査研究センターの調査では、河川から土器や馬・牛の骨などと共に、57枚もの和銅開珎が出土した。これらの遺物は祭祀に伴うものと考えられるが、当遺跡の南部や遺跡に北接する東郷遺跡など[註1]では墨書人面土器の存在が知られるほか、東郷廃寺遺跡（渚1995ｂ）では、後期難波宮で初めて採用されたものに類似した重圏文軒丸瓦が出土していることなどから勘案して、祭祀を行う特異な居住域、つまり寺院や官衙などの公共施設を想定できないだろうか。当時期の当遺跡と東郷遺跡南東部との有機的な関係を垣間見ることができそうである。

第２章　調査概要

第１節　調査方法と経過

今回の発掘調査は、八尾市北本町２丁目216番地内における防火水槽設置工事に伴うもので、当調査研究会が東郷遺跡内で実施した第54次調査（ＴＧ97－54）にあたる。調査区は一箇所である。事前の協議では、調査区は東西幅約6.5ｍ・南北幅約6.5ｍ、面積約40㎡で設定したが、掘削の都合上、東西幅約８ｍ・南北幅約８ｍ、調査総面積は約64㎡に変更した。調査は、現地表（T.P.＋7.4ｍ前後）下1.0ｍ前後までを機械掘削とし、以下は、現地表下2.0ｍ前後までの1.0ｍを人力掘削と機械掘削を併用して行い、遺構・遺物の検出に努めた。

調査の結果、２面（第１面・第２面）で遺構を検出した。第１面では、現地表下1.0ｍ（T.P.＋6.4ｍ）前後の第５層上面で平安時代後期に比定される溝１条（ＳＤ101）・落ち込み１基（ＳＯ101）を検出した。第２面では、現地表下1.3ｍ（T.P.＋6.1ｍ）前後の第７層上面で、弥生時代後期～古墳時代前期に比定される遺構を検出した。調査期間は、平成９年６月16日～６月19日（実働４日）である。

第２節　基本層序

本調査では、T.P.＋6.0～7.4ｍ前後の間において８層もの地層を確認した。これらの地層は、いずれもほぼ水平な堆積状況を示す。以下、各地層について概説していくと、第０層は整地に伴う客土・盛土である。第１層は、著しく攪拌を受けた層相や既往の調査成果のレベルなどから判断すると、区画整理に伴う整地以前の旧耕土に相当する。以下第２層～第６層までは礫混粘土優勢の粘土層が堆積する。各層とも非常に硬く締まっており、土壌化の影響を受けているものと思

われる。第７層以下は、ラミナ構造が顕著な流水堆積が認められ、当層形成期の当調査地の古環境が河川域であったことを垣間見ることができる。なお、調査においては、第０層～第３層までを機械掘削とし、それ以下は、人力掘削と機械掘削を併用して実施した。

第０層　盛土・撹乱。上面の標高はT.P.＋7.4ｍ前後を測る。

第１層　10Y5/1灰色極粗粒砂混粘土。攪拌を受けた地層である。層厚は約0.1ｍを測る。

第２層　7.5Y6/1灰色中礫混粘土。酸化鉄分やマンガンを含む地層である。層厚約0.2ｍ。

第３層　10Y6/1灰色中礫混粘土（酸化鉄分やマンガンを含む）。層厚は約0.1ｍである。

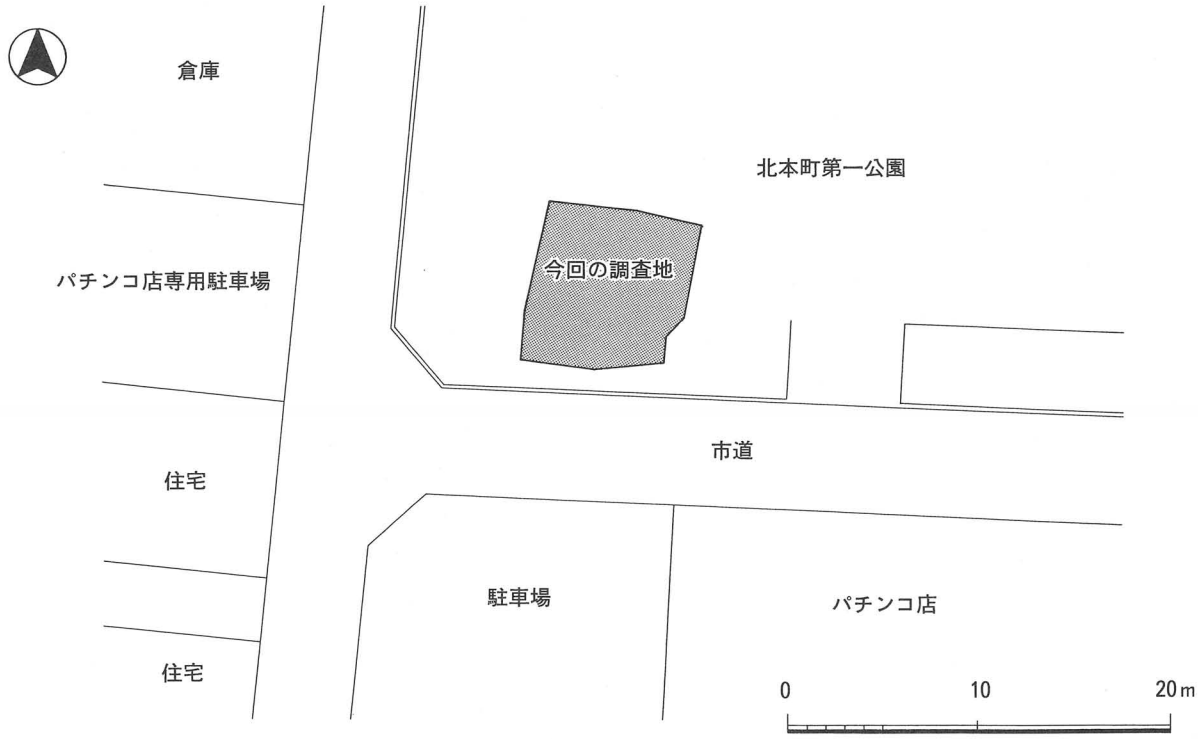
第４層　10Y5/1灰色極粗粒砂混シルト。調査地の北方にのみ存在する地層である。調査地東壁の地層観察では、第５層上面から切り込むラインが認められることから、ＳＯ101の埋土の可能性も考えられるが、本調査では第４層とした。層厚約0.1ｍ。

第５層　7.5YR4/3褐色粗粒砂混粘土。マンガンを多量に含む、非常に硬く締まった地層である。層厚は約0.2ｍを測る。［**上面は第１面**］

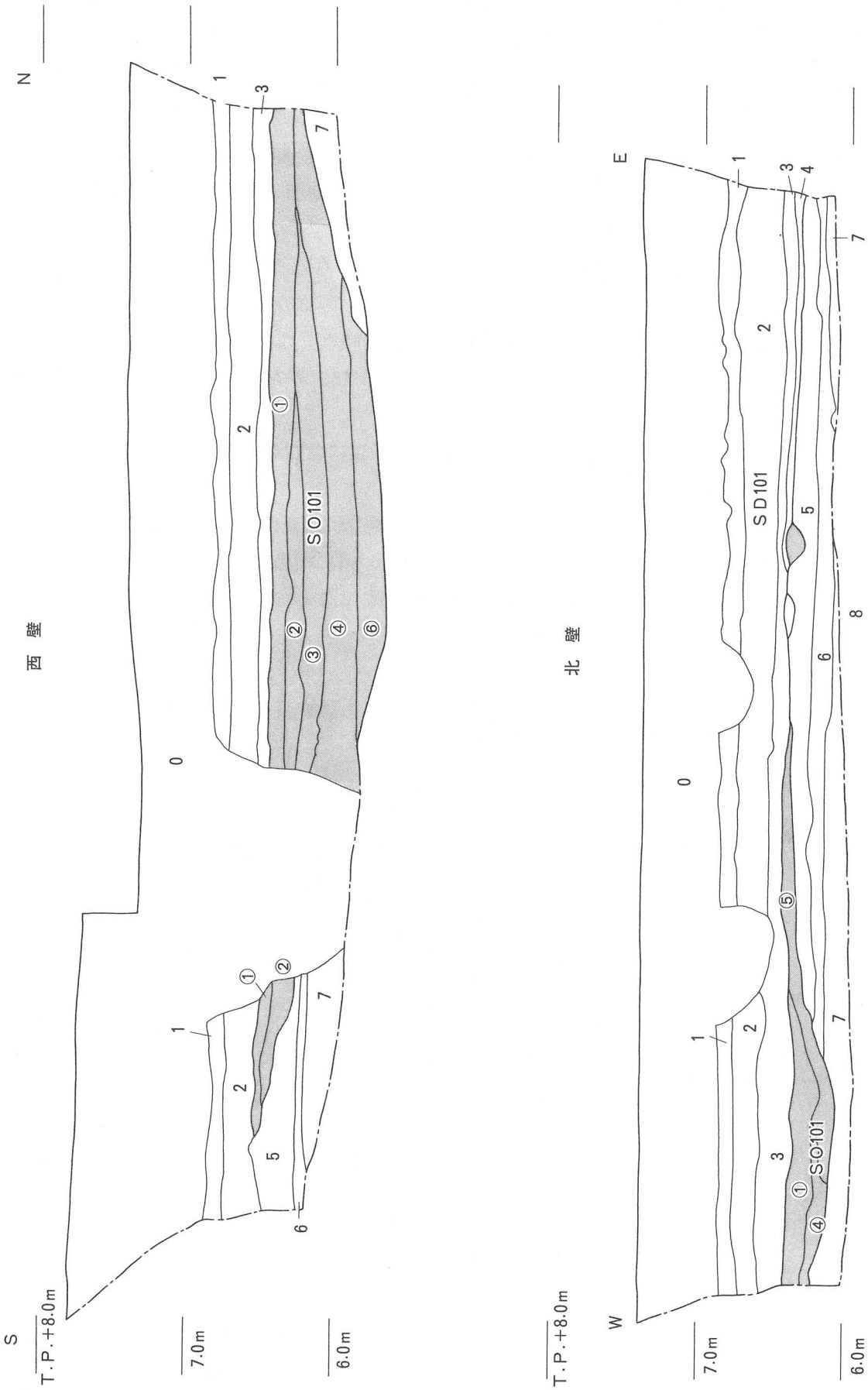
第６層　2.5Y6/4にぶい黄色粗粒砂混粘土。酸化鉄分を多量に含む非常に硬く締まった地層である。層厚約0.1ｍ。［**上面は第２面**］

第７層　2.5Y6/1黄灰色細礫混極粗粒砂。水平なラミナ構造が顕著に認められる流水堆積層である。本調査地での地層観察においては、河川の肩に相当するラインなどは認められなかった。また、その粒度組成が粗粒砂優勢であることなどから、本層形成期の本調査地は、河川の流芯に近い古環境を想定できそうである。層厚は0.5ｍ以上である。［**上面は第２面**］

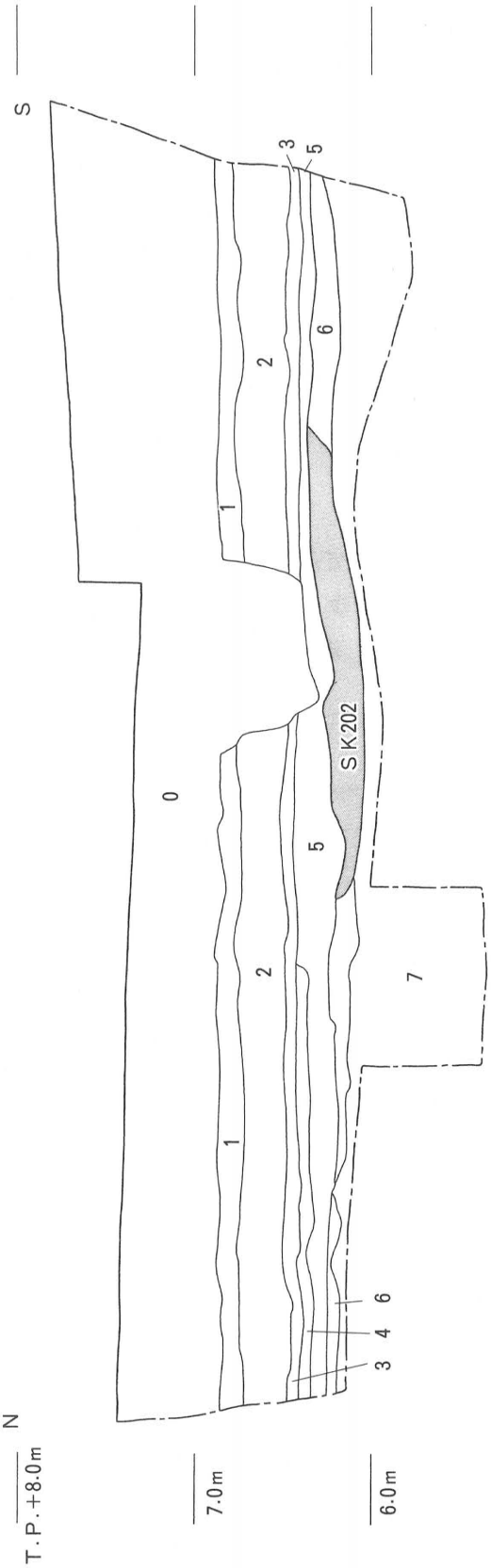
第８層　5Y5/2灰オリーブ色細粒砂混シルト。第５層上面を構築面とする遺構の埋土である。



第２図　調査地位置図（Ｓ＝１/400）



第3図　調査区西壁・北壁地層断面図（S＝1/40）



第0層　盛土・撹乱（上面の標高はＴ.Ｐ.＋7.4ｍ前後）
第1層　10Y5/ 1灰色極粗粒砂混粘土
第2層　7.5Y6/ 1灰色中礫混粘土（酸化鉄分・マンガンを含む）
第3層　10Y6/ 1灰色中礫混粘土（酸化鉄分・マンガンを含む）
第4層　10Y5/ 1灰色極粗粒砂混シルト
第5層　7.5YR4/ 3褐色粗粒砂混粘土（マンガンを多量に含む）。［上面は第1面］
第6層　2.5Y6/ 4にぶい黄色粗粒砂混粘土（酸化鉄分を多量に含む）。［上面は第2面］
第7層　2.5Y6/ 1黄灰色細礫混極粗粒砂。［上面は第2面］
第8層　5Y5/ 2灰オリーブ色細粒砂混シルト。

第4図　調査区東壁地層断面図（S＝1/40）

第３節　検出遺構と出土遺物

（１）検出遺構

［第１面］

現地表下1.0m（T.P.＋6.4m）前後の第５層上面で捉えた遺構面で、溝１条（ＳＤ101）・落ち込み１基（ＳＯ101）を検出した。

溝（ＳＤ）

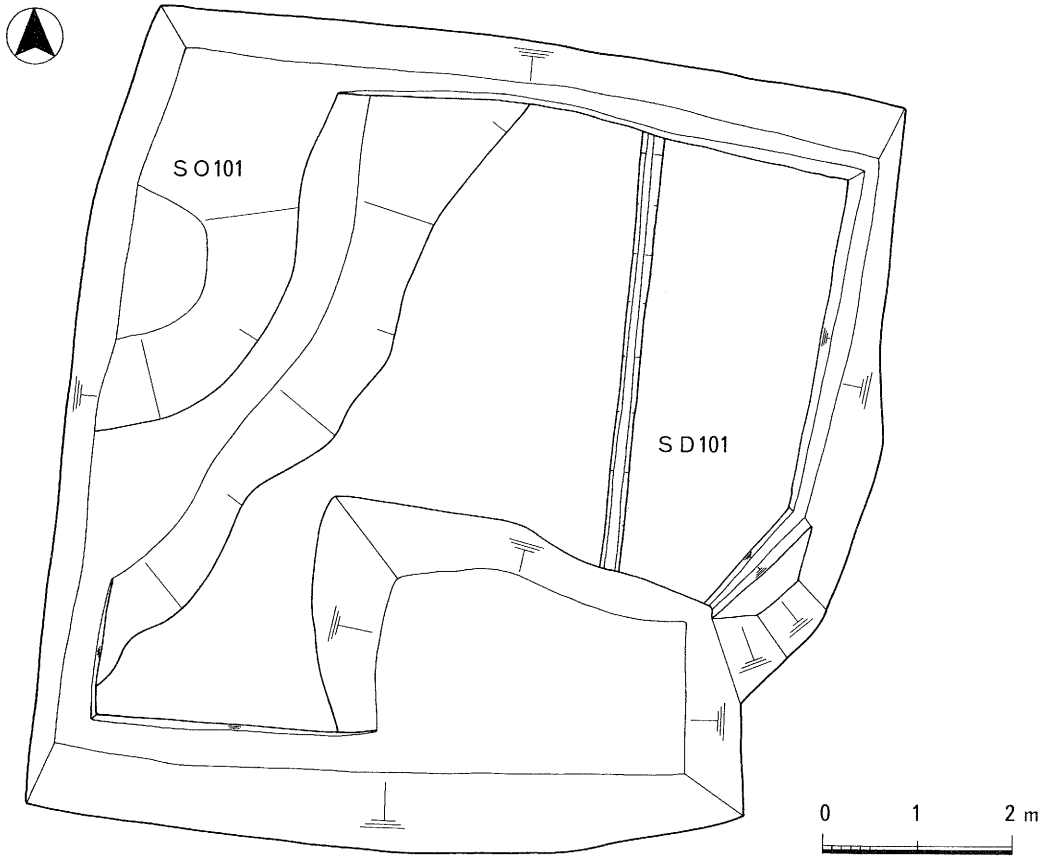
ＳＤ101

調査区中央よりやや東よりの地点で検出した、南－北方向に直線的に伸びる溝である。本遺構は、北部分と南部分がそれぞれ調査区外に続くため全容は不明であるが、検出部分で長さ4.5m以上、幅約0.2mを測る。断面形状はU字状で、深さは約0.1mである。埋土は5Y5/2灰オリーブ色細砂混シルトの単一層である。埋土内からは土師器や須恵器の細片が出土したが、いずれも下層からの混入遺物であり、遺構の時期を決定付けるものではない。

落ち込み（ＳＯ）

ＳＯ101

調査区北西部で検出した。北壁地層断面には西に向かって落ち込む肩が、西壁地層断面には北に向かって落ち込む肩がそれぞれ認められる。平面的には調査区北西外へ拡がる落ち込みであり、全容は不明であるが、検出部分で長辺は7.5m以上を測る。深さは約0.8mである。埋土は、上か



第５図　第１面平面図（Ｓ＝1/80）

ら①2.5Y6/4にぶい黄色極粗粒砂混粘土（酸化鉄分を多量に含む）、②7.5YR4/3褐色中礫混粘土（マンガンを多量に含む）、③10Y5/1灰色中礫混粘土質シルト（酸化鉄分を多量に含む）、④7.5Y5/1灰色シルト（未分解の木片を少量含む）、⑤7.5Y4/1灰色シルト混細礫、⑥2.5Y3/1黒褐色粘土の６層が確認された。遺構内からは６世紀代～12世紀代に比定される土師器・須恵器・瓦器・埴輪の細片が多数出土した。

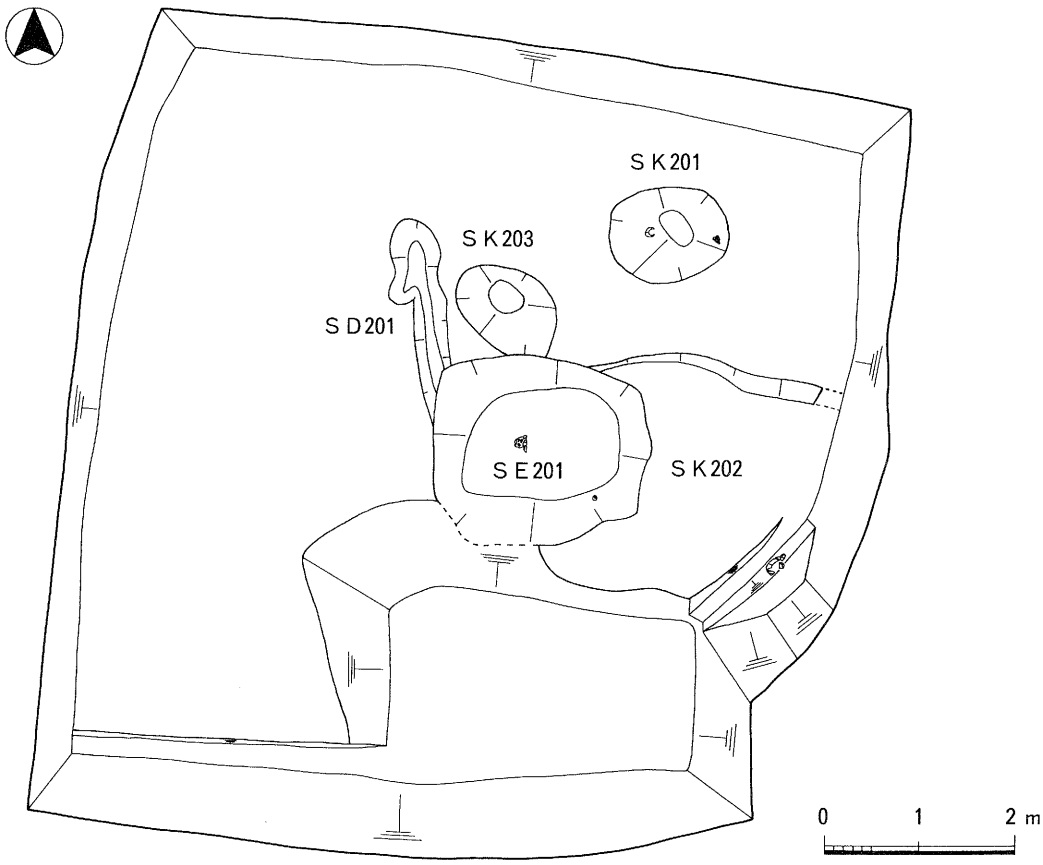
［第２面］

現地表下1.2ｍ（T.P.＋6.2ｍ）前後の第６層上面と、現地表下1.3ｍ（T.P.＋6.1ｍ）前後の第７層上面で捉えた遺構面で、井戸１基（ＳＥ201）・土坑３基（ＳＫ201～ＳＫ203）・溝１条（ＳＤ201）を検出した。この内、ＳＥ201は、本来第１面で検出しなければならなかった遺構である。また、ＳＫ201とＳＫ202は第６層上面構築遺構、ＳＫ203とＳＤ201は第７層上面構築遺構である。以下、各遺構について概説する。

井戸（ＳＥ）

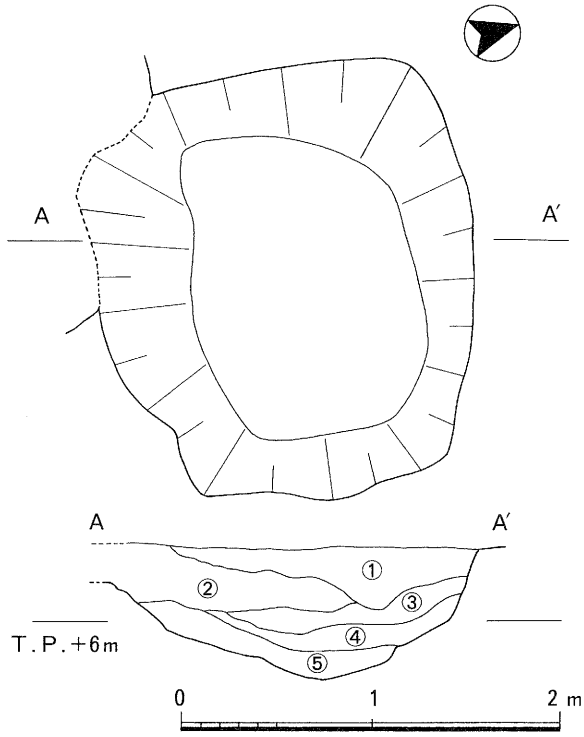
ＳＥ201

調査区中央部で検出した井戸である。本遺構は第５層上面に構築されている。上面の一部はＳＤ101に、また、南部分は撹乱により切られている。平面形状は東西方向に長軸をもつ隅丸方形を呈していたと推測される。検出長は長辺約2.3ｍ・短辺約2.0ｍを測る。断面形状は不定形で、北肩と南肩とでその形状が異なる。深さは約0.7ｍである。北肩は、約70度の角度を保ちながら遺構構築面から下へ約0.4ｍ直線的に掘り、その後、角度を約25度に緩めながら約0.3ｍ掘り下げ



第６図　第２面平面図（Ｓ＝1/80）

ている。一方、南肩はほぼ20度の角度を保ちながら、遺構構築面から下へ0.7m前後掘削している。この両肩ラインの相違は、深くまで掘削しやすいように、片側の傾斜を緩くした結果を反映しているのかもしれない。なお、本遺構内から曲げ物などを利用した井戸側などは検出されていないため素掘り井戸であったと考えられる。埋土は上から①7.5Y5/1灰色極粗粒砂混粘土（酸化鉄分・マンガンがブロック状に混入する）、②7.5Y5/1灰色中礫混極粗粒砂（粘土のブロックを含む）、③10Y4/1灰色極粗砂混粗粒砂、④7.5Y4/1灰色極粗粒砂混粘土、⑤10Y4/1灰色粘土（粗粒砂のブロックを含む）の5層で構成されている。遺構内からは、弥生時代～12世紀代に比定される遺物が多量に出土した。特筆すべき遺物として、①層から出土した耳環、埋土最下層の⑤層から出土した瓦器椀があげられる。前者は、直接本遺構と結びつくものではないが、当調査地周辺に古墳が存在する可能性を示唆する遺物といえる。一方後者は、本遺構の廃絶時に埋置されたものと思われ、この瓦器椀の帰属時期が12世紀中頃であることから、本遺構の廃絶時期もこの頃に求めることができる。



① 7.5Y5/1灰色極粗粒砂混粘土（酸化鉄分・マンガンをブロック状に含む）
② 7.5Y5/1灰色中礫混極粗粒砂（粘土ブロックあり）
③ 10Y4/1灰色極粗砂混粗粒砂
④ 7.5Y4/1灰色極粗粒砂混粘土
⑤ Y4/1灰色粘土（粗粒砂ブロックあり）

第7図　ＳＥ201平面図・断面図（Ｓ＝1/40）

土坑（ＳＫ）

ＳＫ201

調査区北東部で検出した。東西に長軸をもつ楕円形を呈し、その規模は東西径約1.2m、南北径約1.0mを測る。断面形状は、深い皿状を呈し、深さは約0.7mである。埋土は上から①7.5YR4/2灰褐色粘土（マンガンを多量に含む）、②5Y4/1灰色粘土（マンガンを含む）、③5Y4/1灰色極粗粒砂（酸化鉄分を含む。粘土のブロックを含む。）、④5Y4/1灰色極粗粒砂混粘土（マンガンを少量含む）、⑤5Y4/1灰色粘土（酸化鉄分を少量含む）、⑥5Y4/1灰色粘土（炭化物を少量含む）、⑦5Y4/1灰色極粗粒砂である。③層からは6世紀後半～末に比定される須恵器杯身や土師器鍋などが出土した。

ＳＫ202

調査区東部で検出した。遺構の西部をＳＥ101に切られており、さらには、調査区東方に続くため全容は不明である。断面形状は、浅い皿状を呈し、深さは約0.2mを測る。埋土は10YR4/4褐色極粗粒砂混粘土質シルト（マンガンを多量に含む）の単一層である。遺構内からは、古墳時代初頭（庄内式期）に帰属する土師器の壷の一部等が出土した。

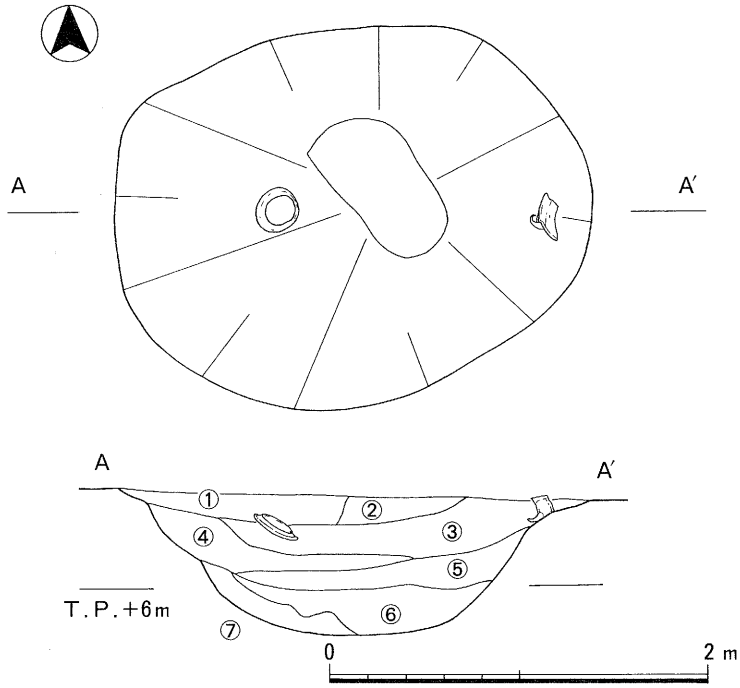
ＳＫ203

調査区中央部やや北の地点で検出した。東西径約1.2ｍ、南北径約0.8ｍの楕円形を呈する。断面形状は浅い皿状で、深さは約0.1ｍを測る。埋土は10Y4/1灰色粗粒砂混粘土（酸化鉄分・マンガンを含む）の単一層である。出土遺物はなかった。

溝（ＳＤ）

ＳＤ201

調査区中央部で検出した、ほぼ南－北方向に伸びる溝である。遺構の南部をＳＥ101に切られているため全容は不明であるが、検出部分の長さは1.5ｍ以上、幅約0.5ｍ、深さ約0.1ｍを測る。埋土は10Y4/1灰色粗粒砂混粘土（酸化鉄分・マンガンを含む）の単一層で、遺構内から弥生時代後期～古墳時代初頭（庄内式期）に比定される土器片が１点出土した。



① 7.5ＹＲ4/2灰褐色粘土（マンガンを多量に含む）
② 5Ｙ4/1灰色粘土（マンガンを含む）
③ 5Ｙ4/1灰色極粗粒砂（酸化鉄分を含む・粘土のブロックを含む）
④ 5Ｙ4/1灰色極粗粒砂混粘土（マンガンを少量含む）
⑤ 5Ｙ4/1灰色粘土（酸化鉄分を少量含む）
⑥ 5Ｙ4/1灰色粘土（炭化物を少量含む）
⑦ 5Ｙ4/1灰色極粗粒砂

第８図　ＳＫ201平面図・断面図（Ｓ＝１/20）

（２）出土遺物

１、遺構内出土遺物

ＳＤ101内出土遺物（１・２）

土師器や須恵器の細片が７点出土した。この内、図化できたものは土師器（１）、須恵器（２）の２点である。１は、土師器の底部で、内・外面ともにナデ調整を施している。胎土は、やや粗で、２㎜以下の砂粒を多く含む。２は小片のため復元は困難であるが、須恵器瑤の口縁部であろうか。口縁端部は内傾する平面を形成する。口縁端部から2.4㎝下の外面には１条の凹線がめぐらされている。内面は回転ナデである。

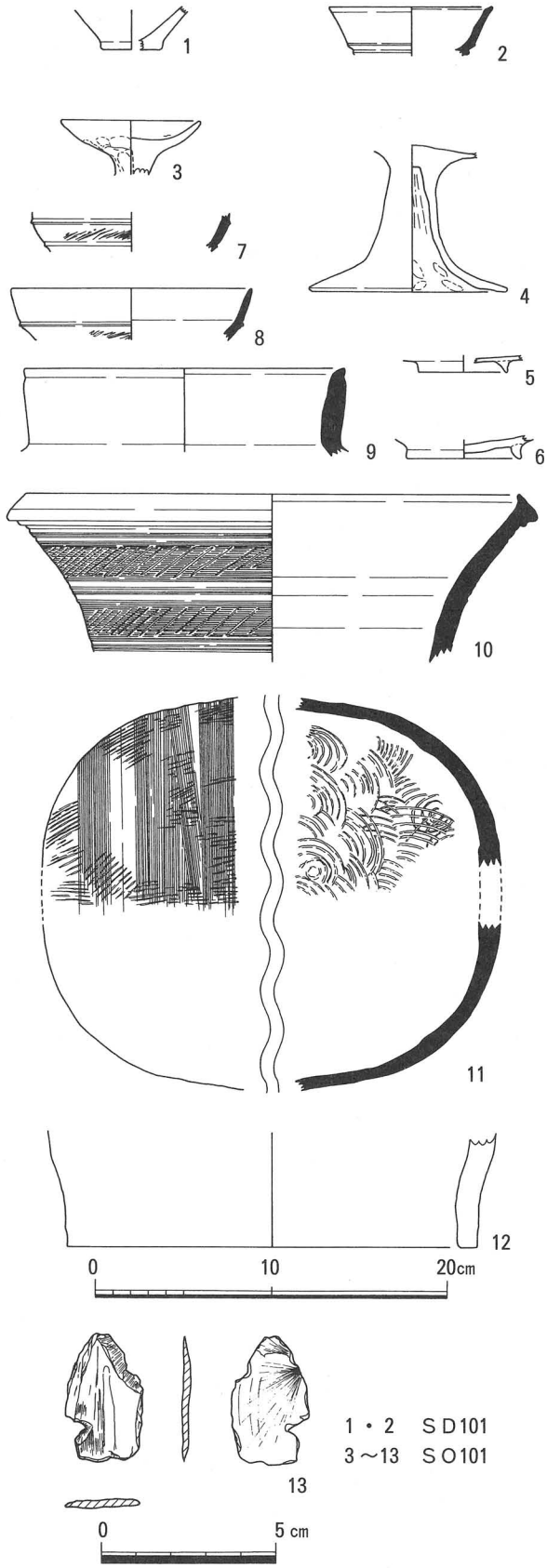
ＳＯ101内出土遺物（３～13）

土師器・須恵器・瓦器・埴輪の細片が66点出土した。この内、図化できたものは土師器高杯（３・４）、土師器高台（５・６）、須恵器高杯（７・８）、須恵器壷（９）、須恵器甕（10）、須恵器横瓶（11）、埴輪（12）、石製品（13）の12点である。３は、手づくねにより成形された小型高杯の杯部～柱状部である。杯部は浅く、杯部は指押えにより作り出されている。柱状部外面は指ナデ調整を行っている。４は柱状部と裾部の屈曲が不明瞭な高杯である。外面は磨耗が激しく調整は不明であるが、柱状部内面にはしぼり目痕が、裾部内面には指ナデが明瞭に残る。裾端部に

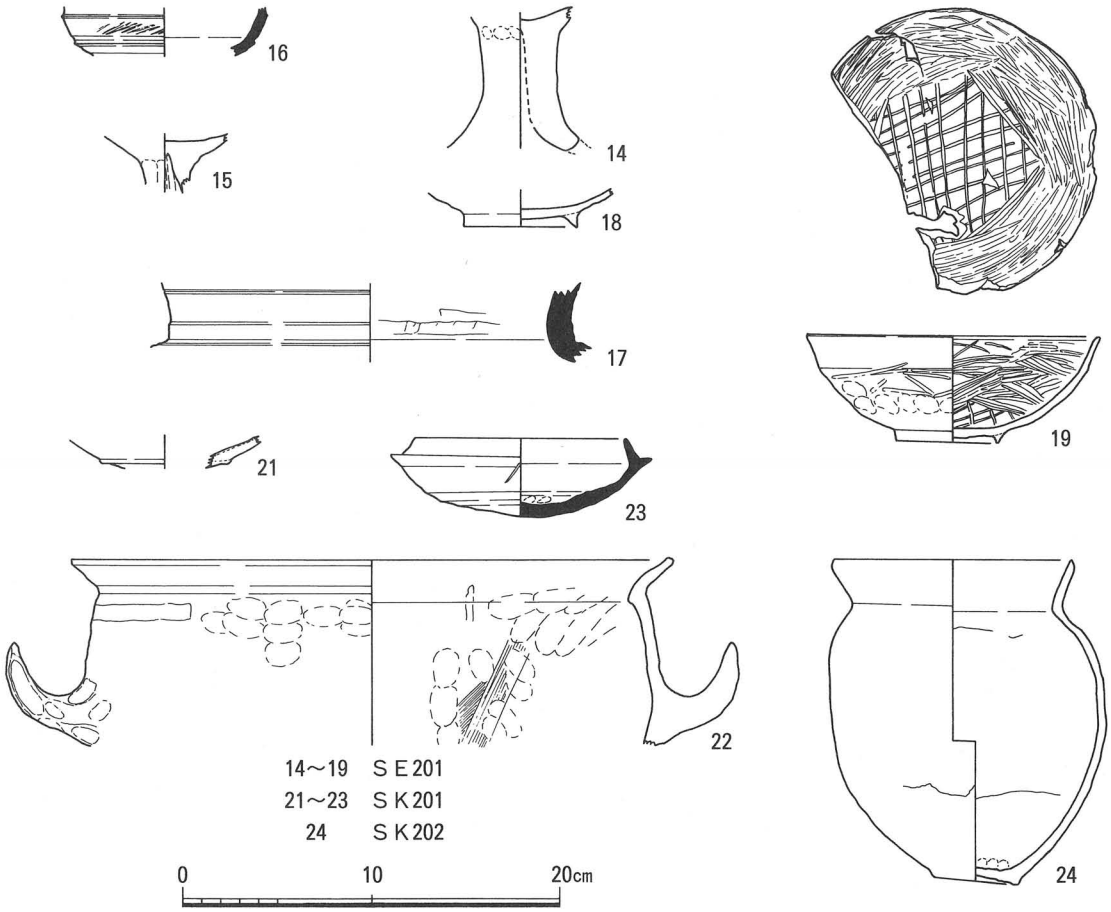
は煤が付着している。6世紀後半～7世紀前半に属するものであろう。（5・6）は器種不明の底部～高台部である。高台はいずれも貼り付けられている。（7・8）は長脚二段透し高杯の杯部である。杯部の中位～底部に、鋭い凸帯とヘラ描き斜行直線文が施されているのが特徴である。6世紀末～7世紀初頭にかけての所産であろう。9は口縁端部が内傾する平面を形成する広口短頸壷の口縁部～口頸部である。10は甕の口縁部～口頸部である。口縁下端部から1.0㎝下の外面には鋭い凸帯が1条めぐる。口径部外面は、カキ目調整後5条の凹線が施される。これらの凹線は2条1組と考えられる。カキ目が施された後に櫛描き斜行列点文が施される。11は横瓶の一部と思われる須恵器片である。12は摩滅の激しい円筒埴輪の底部片である。13は用途不明石製品である。

ＳＥ201内出土遺物（14～20）

弥生土器・土師器・須恵器・瓦器が67点出土したが、図化できたものは9点だけである。14は弥生土器の高杯柱状部～裾部の一部である。柱状部は直線的で、裾部との屈曲点は明瞭でない。裾部には透孔が1個だけ確認できる。胎土はやや粗で、角閃石を多量に含む。生駒西麓産のものである。15は、手づくね成形の小型高杯である。16は長脚二段透し高杯の杯部の細片、17は須恵器甕の口縁部である。18は瓦器椀の体底部～高台部である。先端の尖った断面逆三角形の貼り付け高台で、12世紀中頃の時期が与えられる。19は和泉型の瓦器椀である。体部外面のヘラミガキ調整は粗く、成形時の指頭圧痕が顕著に見られる。体部内面は分割ヘラミガキが密に施される。見込みのヘラミガキは格子状である。12世紀中頃～後半に属する。20は銅芯銀貼りの耳環である。



第9図　ＳＤ101・ＳＯ101出土遺物（Ｓ＝1/4・1/2）



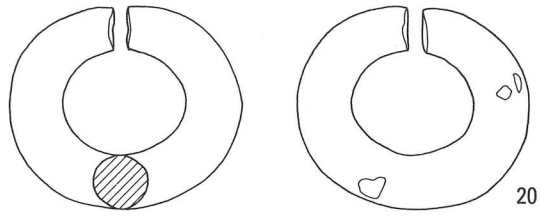
第10図　ＳＥ201・ＳＫ201・ＳＫ202出土遺物（Ｓ＝１/４）

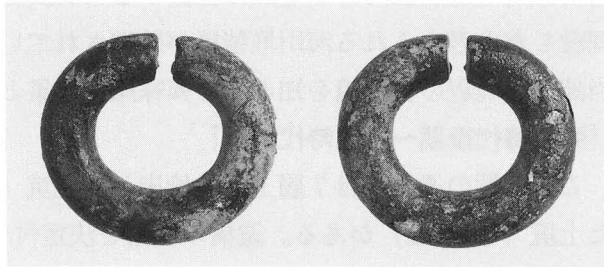
ＳＫ201内出土遺物（21～23）

遺物は、③層内から土師器・須恵器が14点出土した。この内、図化が可能なものは３点だけである。21は、内面に炭化物が付着した高杯の杯部細片である。22は土師器の鍋である。外面調整は、口縁部が横ナデ、体部が指ナデである。一方内面は、口縁部は横ナデ、体部は縦方向にハケ状の工具でナデを施した後、指ナデを行う。23は須恵器の杯身である。ＴＫ43～ＴＫ209型式に属するもので６世紀後半～末に比定される。

ＳＫ202内出土遺物（24）

土師器が14点出土したが、図化できたのは24の甕のみである。外面は摩滅が激しく調整は不明である。内面は、底部に指頭圧痕が認められるほかは、ナデ調整を施す。底部は底





第11図　ＳＥ201出土耳環（Ｓ＝１/１）

部輪台技法により成形されている。共伴土器の中には、内面にヘラケズリが施されたものも含まれることから、これらの遺物の帰属時期は庄内式期に求めることができる。

2、地層内出土遺物

第5層内出土遺物（25～29）

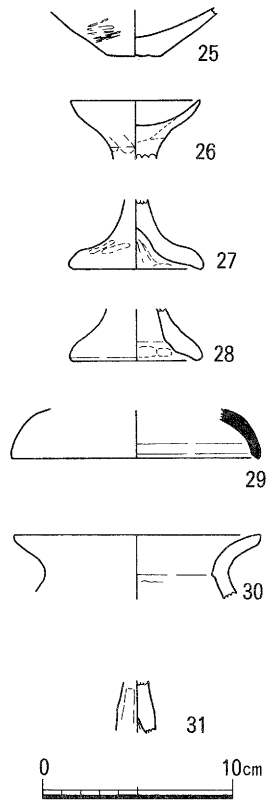
土師器・須恵器の細片が71点出土した。この内、図化が可能なものは5点だけである。25は土師器の体部～底部である。体部と底部の屈曲点がなく、しかも二次焼成を受けてないことから、器種は壷であろう。体部外面には右上がりのタタキ調整が行われる。庄内式期に帰属時期を求めることができよう。26～28は土師器の小型高杯である。26は杯部～柱状部、27・28は柱状部～裾部で、3点とも指おさえによって成形された手づくね土器である。27の裾端部外面と裾部内面には黒斑が認められる。29は須恵器の杯蓋である。口縁部しか残っておらず復元は困難を極めるが、概ね6世紀末～7世紀初頭に帰属するものであろう。

第6層内出土遺物（30）

弥生土器の細片が22点出土した。これら帰属時期は弥生時代後期（畿内第Ⅴ様式期）に求めることができる。この内、図化できたのは1点のみである。30は甕の口縁部である。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は丸くおさめる。内面には口縁部と体部との接合痕が明瞭に残る。

出土地点不明遺物（31）

手づくねにより成形された土師器小型高杯柱状部である。



25～29　第5層
30　第6層
31　出土地点不明

第12図　地層内出土遺物
（S＝1/4）

第3章　まとめ

今回の調査では、概ね四時期の堆積層・遺構・遺物を検出した。出土遺物量はコンテナ2箱である。以下、各時代について述べていく。

［弥生時代後期以前］

第7層がこの時期に相当する。ラミナ構造が顕著に認められる河川堆積層である。当調査地の南側約10mの地点に位置する第25次調査地や北東側約150mの地点に位置する第36次調査地（成海1991）、東側約100mの地点に位置する第44次調査地では、古墳時代初頭（庄内式期）頃までに埋没したと考えられる河川堆積層が確認されているが、これらと対応する地層である。当該期の当調査地周辺の古環境を知る上で興味深い成果といえる。

［弥生時代後期～古墳時代前期］

この時期の遺構には7層上面で検出した土坑（ＳＫ203）・溝（ＳＤ201）と6層上面で検出した土坑（ＳＫ202）がある。遺構の性格を決定付ける要素が乏しいが、当調査地の南側約10mの地点に位置する第25次調査地において古墳時代初頭（庄内式期）の集落（居住域）が確認されていることから、今回の調査によりこの集落（居住域）がさらに北へ拡がる可能性も考えられる。

［古墳時代後期］

この時期の遺構は６層上面で検出した土坑（ＳＫ201）がそれに相当する。この時期の遺構は当調査地周辺では確認されておらず、今回がはじめてである。検出遺構はこの一基だけなので集落（居住域）が存在したのかは明らかではない。特筆すべき点は、５層上面で捉えた井戸（ＳＥ201）から耳環が、落ち込み（ＳＯ101）からは、後期古墳より検出される須恵器長脚二段透し高杯の杯部細片が認められることである。これらの遺物は、後期古墳の副葬品としての意味合いが強いもので、当地周辺における第６層上面の延長線上にこの時期の墓域が存在していた可能性が考えられる。今後の調査に期待したい。

［平安時代末期］

この時期の遺構は５層上面で検出した井戸（ＳＥ201）・溝（ＳＤ101）・落ち込み（ＳＯ101）がそれに相当する。第25次調査地おいても平安時代末期の集落（居住域）の存在が確認されているが、本調査地でも同時期のＳＥ201が検出されたことから、一連の集落（居住域）がさらに北へ拡がることは確実である。しかしＳＥ201は、構築層が同じであるＳＤ101に切られていることから、その存続期間は比較的短かったことが想定される。

引用・参考文献

・西岡三四郎　1977「人面土器」『八尾市史（文化財編）』八尾市役所
・坪田真一　1998「Ⅱ　東郷遺跡第44次調査（ＴＧ93－44）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告61』（財）八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋　1989「Ⅰ東郷遺跡（第11次～第16次・第18次調査）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告17』（財）八尾市文化財調査研究会
・原田昌則　1996「Ⅳ東郷遺跡（第49次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告54』（財）八尾市文化財調査研究会
・駒沢　敦　1984「２．東郷遺跡第17次調査」『昭和58年度事業概要報告（財）八尾市文化財調査研究会報告５』（財）八尾市文化財調査研究会
・米田敏幸　1986『東郷遺跡第21次埋蔵文化財発掘調査概要　八尾市文化財調査報告13』八尾市教育委員会
・高萩千秋　1983「第８章　東郷遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報　1980・1981年度』八尾市教育委員会
・高萩千秋　1989「東郷遺跡」『東郷遺跡・田井中遺跡　（財）八尾市文化財調査研究会報告17』（財）八尾市文化財調査研究会
・米田敏幸・嶋村友子　1986「１．東郷遺跡の調査」『八尾市内遺跡昭和60年度発掘調査報告書　八尾市文化財調査報告12』八尾市教育委員会
・西村公助　1988「14．東郷遺跡」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和62年度　（財）八尾市文化調査研究会報告16』（財）八尾市文化財調査研究会
・渕　斎　1995「東郷廃寺発掘調査報告」『八尾市文化財紀要７』八尾市教育委員会文化財課
・広瀬雅信　1989「萱振遺跡を調査して」『八尾あれこれ　文化財講座記録集　財団法人八尾市文化財調査研究会報告21』（財）八尾市文化財調査研究会
・生田維道・小林義孝　1982「第５章調査の成果　第１節縄文時代晩期」『山賀（その４）』（財）大阪文化財センター
・広瀬雅信他　1992『萱振遺跡』大阪府教育委員会
・山上　弘　1989『成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅳ』大阪府教育委員会
・高萩千秋他　1983『成法寺遺跡』八尾市教育委員会
・福田英人他　1986『成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅰ』大阪府教育委員会
・原田昌則　1983「第１章宮町遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要　昭和56・57年度』（財）

八尾市文化財調査研究会
・成海佳子　1990「１.小阪合遺跡（ＫＳ89－18)」『八尾市文化財調査研究会年報　平成元年度（財）八尾市文化財調査研究会報告18』（財）八尾市文化財調査研究会
・坪田真一　1993「Ⅱ　小阪合遺跡第19次調査（ＫＳ90－19)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告３　（財）八尾市文化財調査研究会報告41』（財）八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋　1989『小阪合遺跡　（財）八尾市文化財調査研究会報告15』（財）八尾市文化財調査研究会
・渕　斎　1995「東郷廃寺発掘調査報告」『八尾市文化財紀要７』八尾市教育委員会文化財課
・成海佳子　1991「８．東郷遺跡第36次調査（ＴＧ91－36)」『平成３年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会報告

註

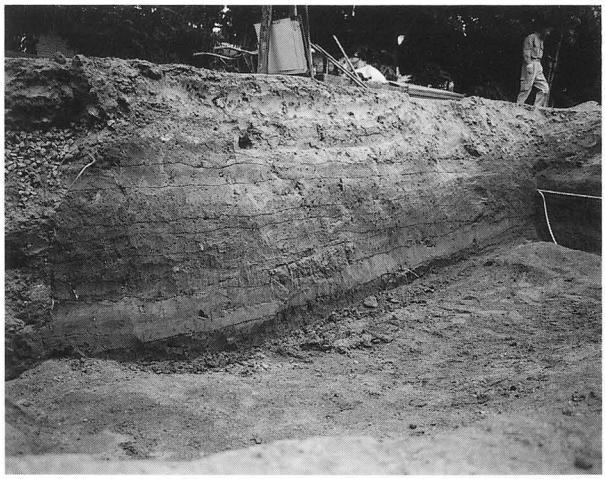
註１　1998年７月16日毎日新聞朝刊を参照した。

図　　版

図版一

調査地周辺状況（北から）

機械掘削状況（東から）

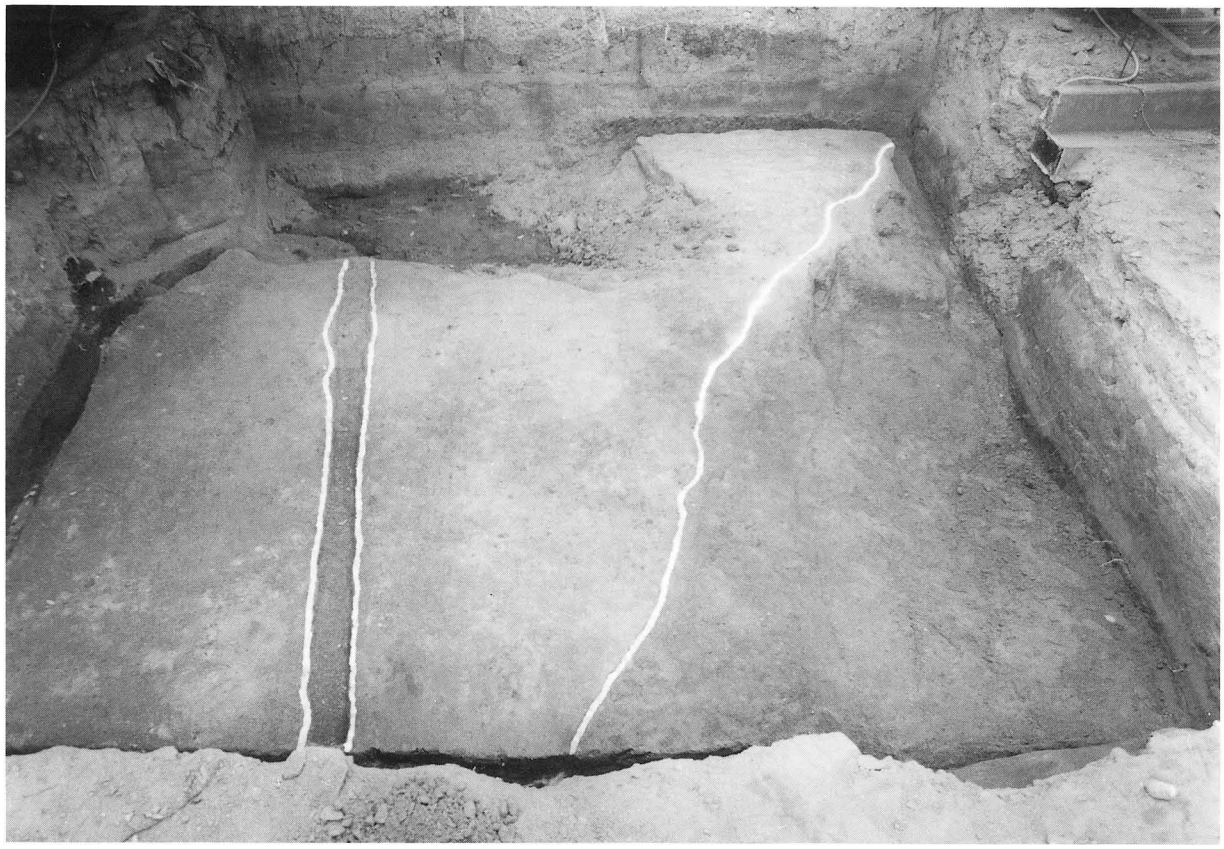


西壁地層堆積状況（南東から）

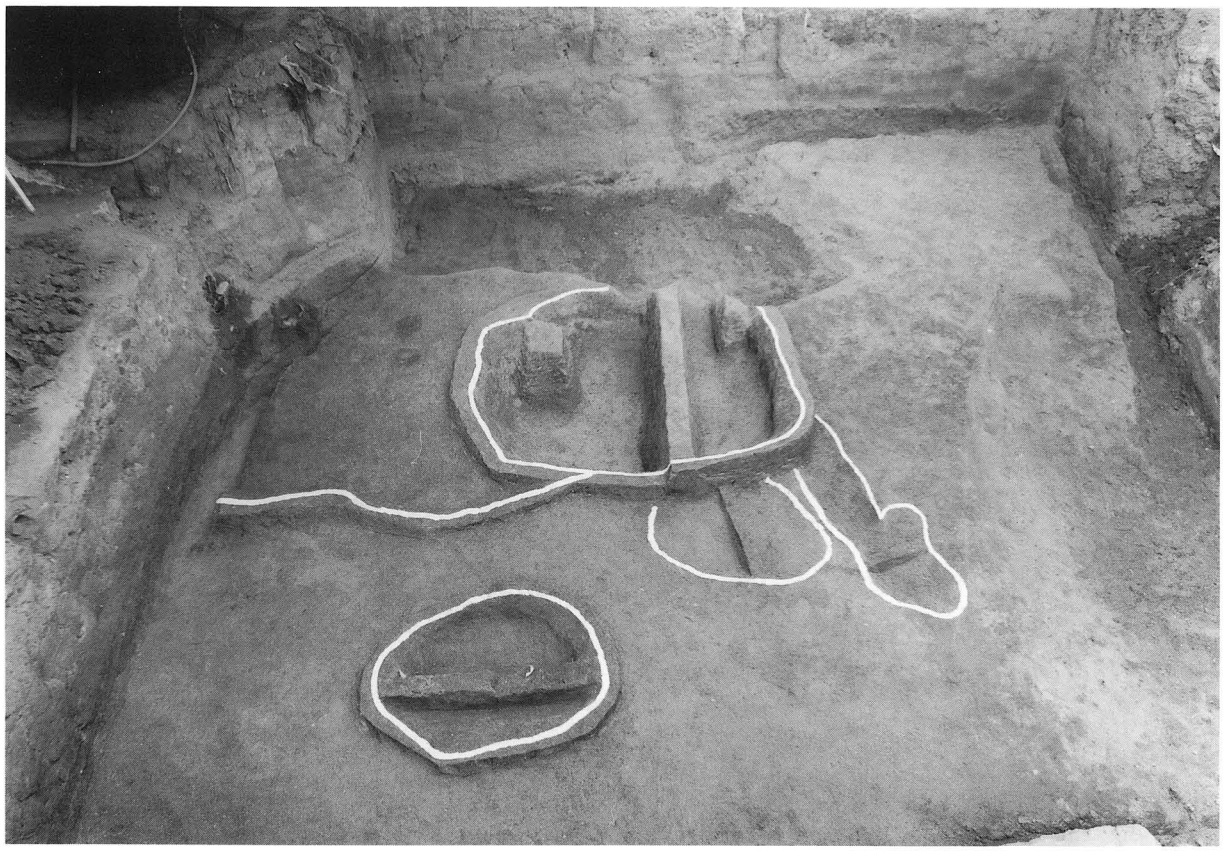
北壁地層堆積状況（南東から）

東壁地層堆積状況（南西から）

東壁地層堆積状況（T.P.＋5.5～7.4m）

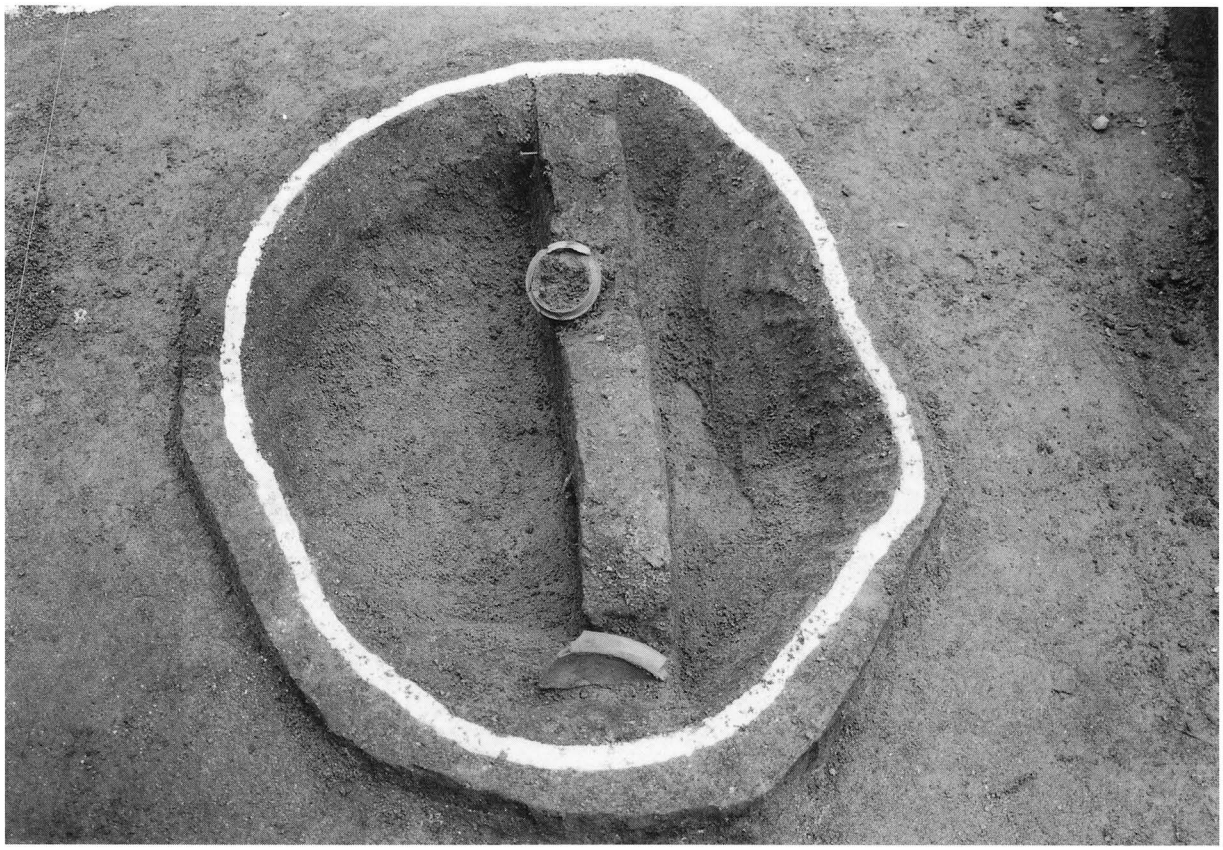


第１面全景（北から）



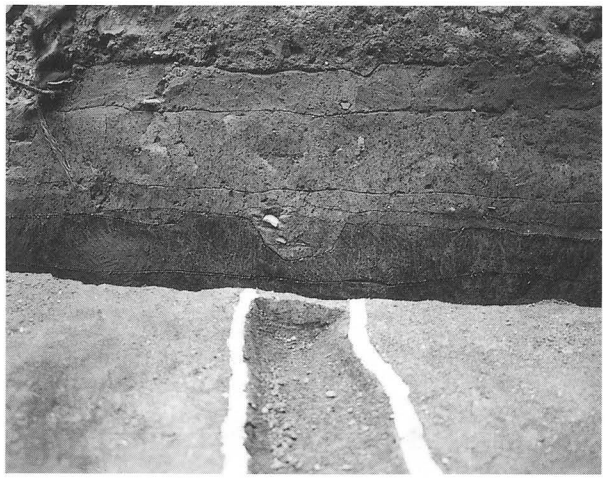
第２面全景（北から）

ＳＥ201（南東から）



ＳＫ201（東から）

図版四



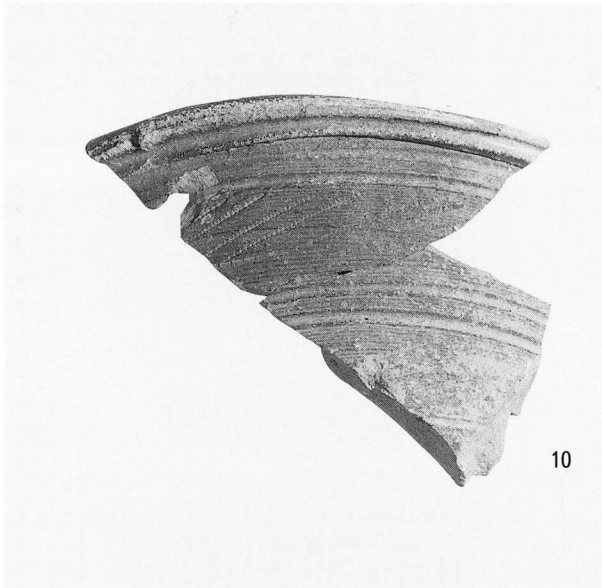
ＳＤ101（南から）

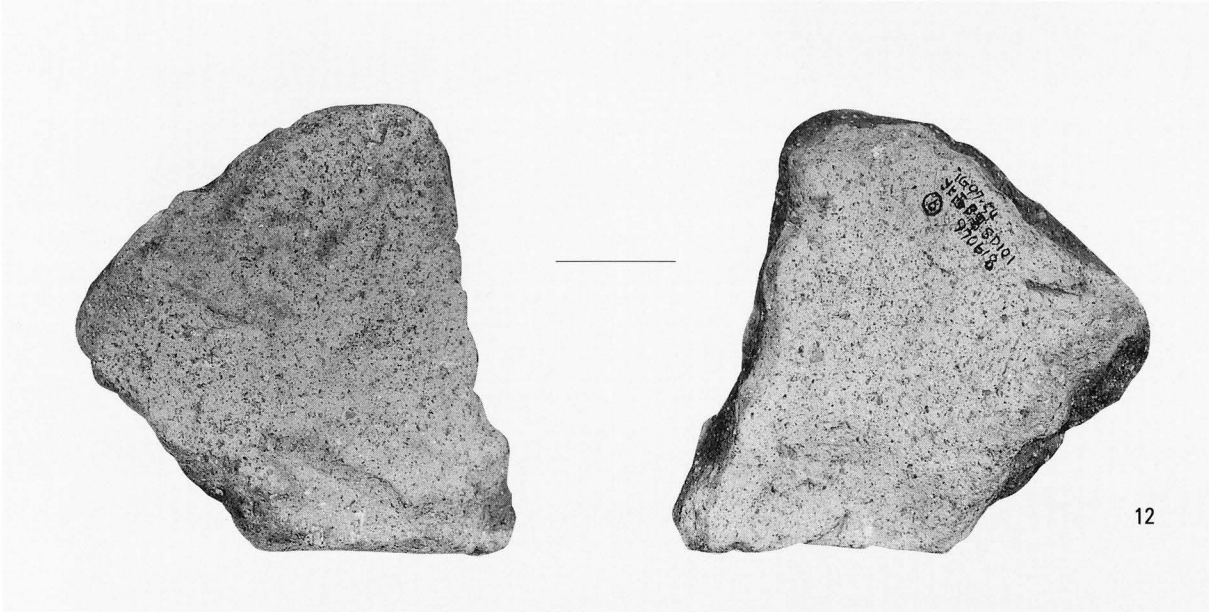
ＳＥ201埋土断面（東から）

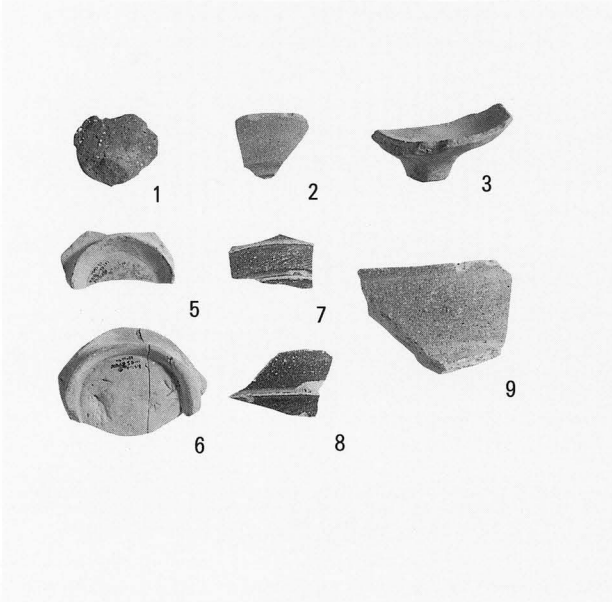
ＳＥ201耳環出土状況（南西から）

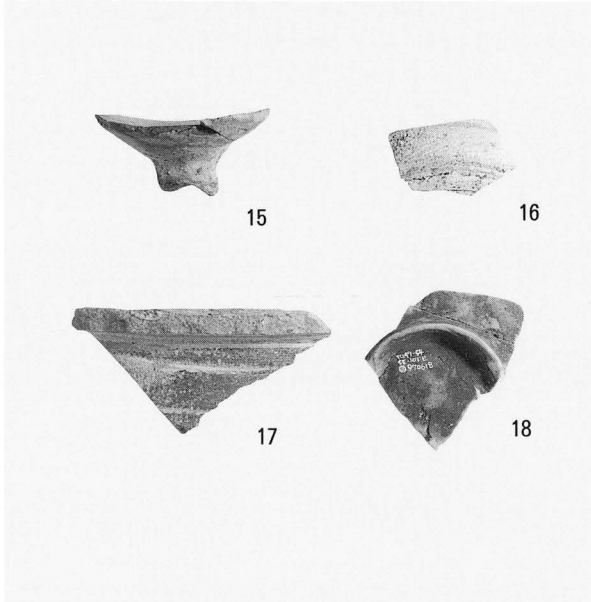
ＳＫ202土器出土状況（西から）

調査参加者









ＳＤ101・ＳＯ101・ＳＥ201出土遺物